2022年度（令和４年度）

沖縄県ＮＩＥ実践報告書

おきなわ
NIE
Newspaper in Education

沖縄県NIE推進協議会

【日本新聞協会指定ＮＩＥ実践校】

名護市立久辺小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

名護市立大宮小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

浦添市立牧港小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

西原町立坂田小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

久米島町立久米島小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

西原町立西原中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

沖縄県立本部高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

【沖縄県県 NIE 推進協議会指定実践校】

糸満市立糸満中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59

読谷村立読谷中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67

沖縄県立辺土名高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・73

ヒューマンキャンパス高等学校・・・・・・・・・・・・・・・85

沖縄県立桜野特別支援学校・・・・・・・・・・・・・・・・・89

【資料１】沖縄県ＮＩＥ推進協議会の組織と運動の経過・・95

【資料２】これまでの実践指定校・・・・・・・・・・・・・・107

【資料３】ＮＩＥ実践フォーラム・全国大会の新聞記事・・111

ごあいさつ

沖縄県 NIE 推進協議会会長
仲村 守和

本協議会は平成１２年（２０００年）に設立され今年で２３年目を迎えました。本会は「教育界と新聞界が協力し、新聞教材の開発、活用の研究と普及を通して、児童生徒の情報活用能力の育成を図ること」を目的として、NIE (Newspaper in Education) 活動を推進してきました。協議会の事務局を沖縄タイムス社、琉球新報社が担い、１０社の新聞社が加盟し、２０１８年度からは幹事に県立学校教育課、義務教育課の指導主事が加わるなど協議会組織の強化が図られています。昨今、NIE（教育に新聞を）活動への県民の理解が深まって参りました。これもひとえに県教育委員会はじめ市町村教育委員会や学校、ＰＴＡ、地域そして加盟各社等のご理解とご協力によるものであります。現在、多くの学校で新聞をツールとした教育実践が推進されています。

２０２２年１１月、坂田小学校（松田邦昭校長）で開催された「沖縄県 NIE 実践フォーラム」は西原町教育委員会（新島悟教育長）との共催が初めて実現しました。西原町教育委員会は町として実践校を引き受けられ、町内の３校を実践校に指定し、NIE 活動の教育的意義を確認し NIE アドバイザーの甲斐崇指導主事が積極的に実践校に関わるなど組織的にバックアップされました。こうした西原町教育委員会の実践はこれから市町村教育委員会の取り組みの参考事例として本県の NIE 活動の活性化や普及・発展に大いに寄与するものと期待しております。

さて、新学習要領における児童生徒の「主体的、対話的で深い学び」を育成するには NIE 活動が有効であると考えます。つまり児童生徒が「主体的、能動的」に参加する授業づくりには「生きた教材」といわれる「新聞」を授業に積極的に取り入れることが肝要と思います。新学習指導要領では「新聞活用」が全ての校種で指導すべき内容として位置づけられていることからも不断の研究が求められています。

この度、２０２２年度の実践指定校１２校の実践概要が本冊子にまとめられました。３年間に及ぶコロナ禍で授業研究が困難な中でも、実践指定校は積極的に授業実践を継続しました。そこには「新聞」を有効に活用し、楽しく有意義な授業の構築が図られ、子どもたちの生き生きとした活動の様子が報告されています。NIE 活動を通して、児童生徒の思考力や判断力、表現力等が培われ

ていることは、NIE の教育的手法が児童生徒の課題解決能力の育成に大きな効果があることを実証しています。

つまり、児童生徒が「自ら学び、自ら考え、判断して行動する『生きる力』の育成」が期待できます。本報告書のねらいは指定校の実践を各学校で共有化することにあります。学習教材としての新聞活用や新聞づくりなど NIE の教育的手法を取り入れ、児童生徒の読解力や表現力、社会性等を培っていく授業実践のためにも NIE 活動を各学校で推進していただきたいと思います。

結びに、NIE 活動の実践事例としての本報告書が県内の学校や家庭、地域社会など多くの機関で活用され本県の有為な人材育成の一助になれば幸いです。

令和４年度　NIE 実践報告書

名護市立久辺小学校
教諭　比嘉　江利子

Ⅰ　はじめに

本校は、平成２８年度より NIE 活動を実践してきました。各学年試行錯誤を繰り返し、学年の特色に合った活動に取り組んできました。主な活動としては、同一記事に対する意見交流、新聞読者欄への投稿や秘話学習の壁新聞づくり、国語科の授業における新聞活用等です。また今年度は教育課程の中にＮＩＥの時間を設け、月 2 回、朝の時間に各学年で取り組みました。

２　本校での取り組み

・高学年で「琉球新報」「沖縄タイムス」「朝日新聞」、中学年で「毎日新聞」、低学年で「ワラビー」を活用。
・児童作文などを県紙へ投稿。
・ＮＩＥタイムを設け、新聞に親しむ活動。
・授業と関連付けた取り組み。

３　新聞にふれる環境づくり

・校長先生手作りの新聞棚を図書館に設置。県内 2 社の新聞を月毎に整理し、いつでも必要な新聞を探し出せるようにしています。
・新聞を通して児童が地域とのつながりを感じることができるように、校長先生が児童玄関付近に地域に関する記事を掲示しています。
・児童作成新聞を廊下に掲示しています。

廊下に掲示された学校や地域の記事

県内 2 社の新聞棚

廊下に掲示された新聞投稿の記事

4　実践事例

（１）低学年の取り組み

①　「慰霊の日」の取り組み

本校では，今年度も外部の方を招いての取り組みができませんでした。そこで昨年同様，いただいた「慰霊の日に向けて」の新聞を活用して，平和教育を行いました。漫画でも紹介されており，低学年でも抵抗なく読み進めることができました。子ども達なりに，平和について考えるよい機会となりました。

②　NIE タイム

毎週金曜日に設定されている「NIE タイム」では，教師が紹介したい記事や子ども達が気になった記事などを取り上げていきました。また，紹介しきれなかった記事については，タイトルのみを紹介し，子ども達の興味を引きつけるように工夫していきました。また，新聞に掲載されているクイズなども学級で挑戦し，盛り上がりました。クイズの後には，実際に新聞を手に取り，クイズ話で盛り上がる子供の様子も見られました。

③　新聞投稿

本校では，新聞に掲載された児童の作文については，全児童の目に触れる廊下に掲示されています。毎朝，記事が増えているか楽しみにしている児童もおり「今日は，○○お姉ちゃんのが載っていたよ！」と，嬉しそうに報告してくれました。

一年生は，作文の学習を終えると，「私たちも挑戦してみたい！」と，取り組みを楽しみにする児童が増えました。

掲載されたときには，学級で記事を読み上げて紹介していきました。子ども達は，自分の事のように喜び，学級が温か雰囲気に包まれました。

（２）中学年の取り組み

① NIE タイム（毎週金曜日）と総合的な学習

３年生は NIE タイムに「①自分で新聞を選ぶ②関心のある記事を切り抜く③感想を書く」の手順で進めてきました。始めのうちは自分の気に入った記事を選びがちだった子どもたちですが，次第に視野が広がり他国の子どもたちの様子や，今話題になっている社会的な記事が掲載されている新聞も選ぶようになりました。また，どこまでが記事の範囲なのかが分からずに記事の途中で切り抜いてしまう子も多かったのですが，記事をよく読むことで記事の終わりも分かるようにもなりました。

NIE タイムで目にしている新聞から子どもたちは，それぞれの記事に小見出しをつけること，写真や絵があると読み手に様子がよく伝わることに気づいていました。それを参考に，総合的な学習の時間で地域の行事について調べたことを新聞にまとめました。初めての新聞作りだったため簡単な新聞になりましたが，見出しごとに記事をまとめることができたので調べたことを読み手にわかりやすく伝えることはできたと思います。これから更に新聞に触れることで，新聞にまとめる技術もついてくると思います。

② NIE タイム（毎週金曜日）

４年生の NIE タイムでは，国語科の授業と連動させて，ウミガメやバリアフリー等の記事を準備して各自で読解し，制限時間の中で自分の考えを書く活動に取り組みました。また，書くだけでなく，友達と読み合い，交流して助言する姿がみられました。教科と関連していることもあり，更なる探求心も出てきて，書くことに抵抗がなくなり，スムーズに書くことができました。

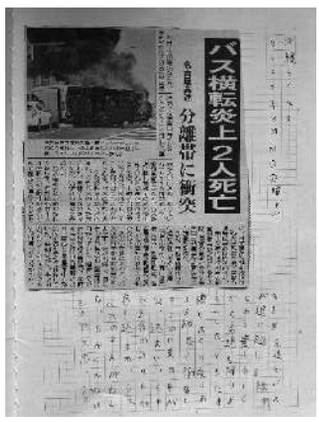
讀賣新聞のワークシート通信の中から，児童が興味・関心のありそうなものを準備した記事にもペアで一緒に読み合うことができました。新聞を読んでいく中で，わからない語句を自ら辞書を使って調べ，実生活に活かそうとする場面も見られました。興味のある個所を蛍光ペン等でわかりやすくチェックし，切り抜きをする児童も増えてきています。

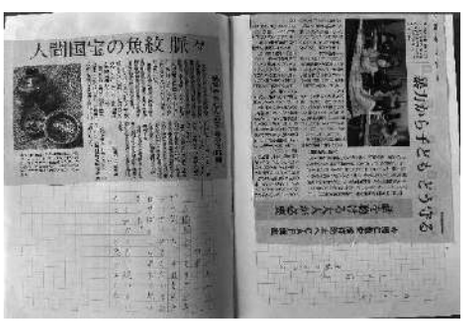
③ 新聞投稿

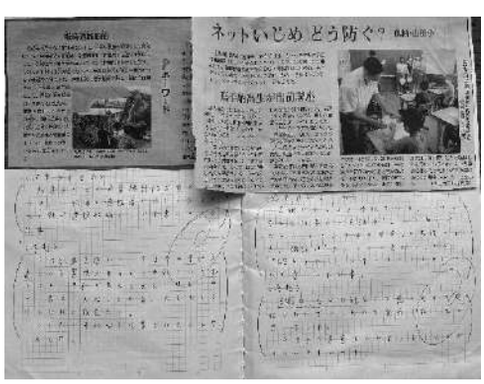
行事の振り返りや自分が感じたことや感動したことを新聞投稿することで，これまで以上に書く意欲が増してきました。４年生では，毎週金曜日に原稿４００字程度の課題を出して取り組ませています。これまで，「海洋体験」や「沖縄高等専門学校見学」といった他校では体験できないことや時事問題等が新聞に掲載され，学校や地域の良さを改めて実感することができました。

（３）高学年の取り組み

5 年生は、国語科の授業で新聞の仕組みを知り、実際に同じできごとを扱った記事を読み比べたりしました。また、情報ノートをつくり、朝の NIE の時間に自分が気になった記事を読み、切り貼りして情報ノートにまとめました。朝のわずかな時間に記事を読み、感想までまとめるには時間がかかり、まとめまでできない児童もいますが、記事を読み合いながら、それぞれの意見を伝え合う姿がありました。普段家庭ではなかなか新聞記事に触れない児童も多く、学校の NIE の時間に様々な記事に触れ、考えを深めている児童もいました。授業では新聞の構成などについて知る際に、実際に新聞に触れながら学習できた事がよかったです。







６年生は、NIE の時間に興味にある新聞記事を選び、その記事を要約し、自分の感想を書く活動を行いました。自分の興味のある記事を選ぶのに時間はかかりますが、その分丁寧に読み、要約・感想を書くことが出来ました。

また、修学旅行やジョブシャドウイングで学んだことを、新聞（AI 用紙）にまとめることが出来ました。５年生で学んだ新聞の書き方を確認後、事前学習で学んだことや、体験したり見学して学んだ事、感じた事、話を聞いて分かったことなどを新聞にまとめました。それぞれが構成を工夫して作成することが出来ました。

その他に、国語の学習で取り組んだ文章や日記などを新聞に投稿しました。新聞掲載された文章は、学級便りで紹介し、保護者の皆さんにも伝えることが出来ました。

５　成果と課題

（Ｉ）成果

・新聞投稿し校内に掲示されることにより、児童の自己肯定感が高まり、新聞記事にも関心が湧いてきた。
・新聞投稿で採用された記事を学級通信に載せることで保護者にもＮＩＥの活動を伝えることができた。
・朝の時間にＮＩＥの時間を設ける事で児童が新聞を手に取る場面設定ができた。
・児童が手に取る新聞記事の内容が、自分の趣味だけではなく時事内容など、視野が広がっていた。
・他教科との関連や学習内容を新聞記事にまとめる際に参考になった。
・新聞に掲載されているクイズなどを活用し、低学年でも新聞の活字に触れる事ができた。

（２）課題

・週時程としての活動の時間は短く、記事を深く読みまとめるまでの時間を工夫するのがむずかしかった。
・各学年でＮＩＥのやり方にばらつきがあった。
・学級担任の負担にならない程度の取り組み方法。
・新聞記事の精選が難しい児童への手立て。

次年度、課題解決に向けて取り組む事で、より児童が新聞に親しみ、記事を通して自分の考えを広げるれるようなＮＩＥ活動を目指していきたいです。

大宮小学校 NIE 実践報告

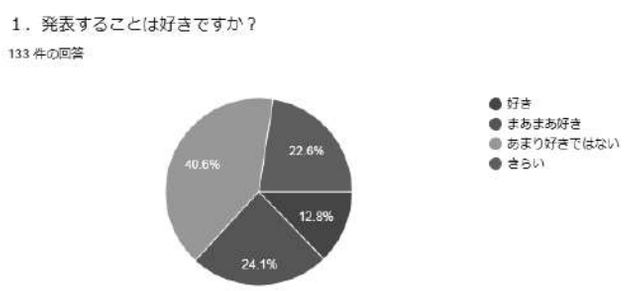
大宮小　宮城英誉

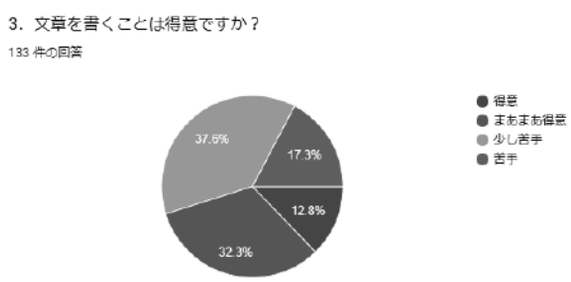
テーマ「主体的・対話的で深い学びへ誘う NIE」

１．　はじめに

大宮小は、本年度より日本新聞協会指定の NIE 実践指定校に認定され、5、6 学年を中心にＮＩＥの日常的な実践を進めてきた。取り組みとしては、親子でつながる新聞スクラップノート、新聞遊びや新聞読み聞かせ、伝え合う力を高めるＮＩＥフリートークなど、朝の時間や宿題を通じて「NIE の日常化」を図ってきた。また、授業においては、導入、展開、終末のいずれかで新聞を無理なくワンポイントで活用し、「問いが生まれる授業」を実践してきた。そのような取り組みを通して、本校の校内研主題である「主体的・対話的で深い学びへ誘う教育活動」へ迫っていった。

児童の実態について（6 学年）





アンケートの結果、発表に苦手意識をもっている児童が約 63%、文章を書くことに対して苦手意識をもっている児童も約 55%と共に高く、話すこと書くことに対して半数以上が後ろ向きな意識をもっていることがわかった。このような実態をふまえ、「楽しい NIE」をツールとし、「主体的・対話的で深い学びへ誘う教育活動」の実現に向け歩みだした。

NIE を通してつけたい力

児童生徒の実態から設定した育てたい３つの力

① 自分の思いや考えを伝え合う力　　（思考力・判断力・表現力）
② 自分の思いや考えを書きまとめる力　　（書く力）
③ 社会の出来事に関心を持ち、調べる力　　（つながる力）

２．　「ＮＩＥの日常化」にあたって

・保護者に NIE について知ってもらうために、5 月の授業参観日などに NIE の説明資料を配付した。
・新聞購読の年間計画を立てる際にはどの月にも新聞に触れられるようにした。また、学習や行事との関連性も意識し、重点的に多くの新聞を注文する月を設定した。
・新聞コーナーをつくり、沖縄県紙、全国紙がいつでも手に取れるようにした。
・校内研修でＮＩＥの日常化を目指し、理論・実践研修に努めた。

３．　「ＮＩＥの日常化」を目指す実践について

(1)主な取り組み

① NIE フリートーク　② 新聞スクラップノート　③ 新聞遊び　④ 新聞感想文
⑤ 新聞読み聞かせ　⑥ 新聞製作　等

(2) NIE の共通実践について

NIE フリートーク

時間のとり方

・6 年　（毎週木曜）

ＮＩＥフリートークの時間

12 分

ＮＩＥフリートークでやること

児童・生徒

・自分の考えを発表する　(5 分)
・ペアで話し合う　(1 分)
・感想を交流する　(4 分)

教師

・導入での趣旨説明　(1 分)
・フリートーク後の価値付け　(1 分)

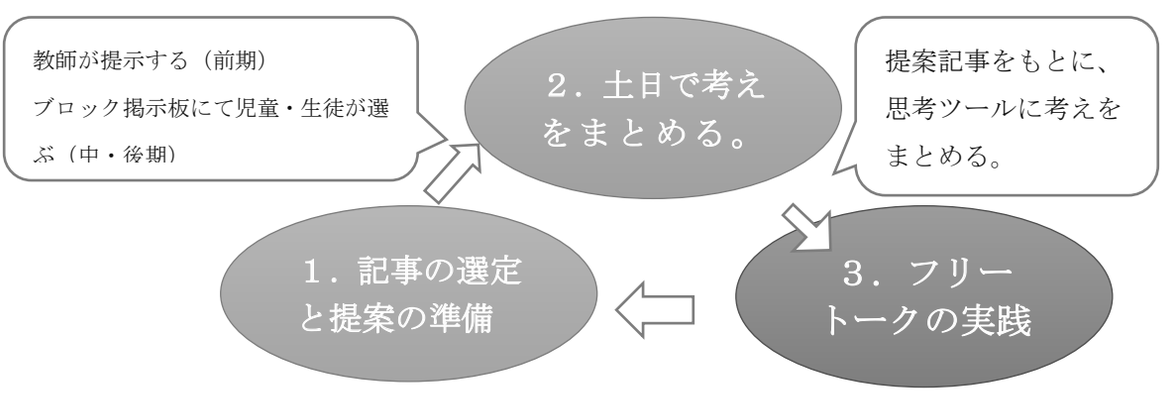
考えをまとめる

「思考ツール」を活用する。

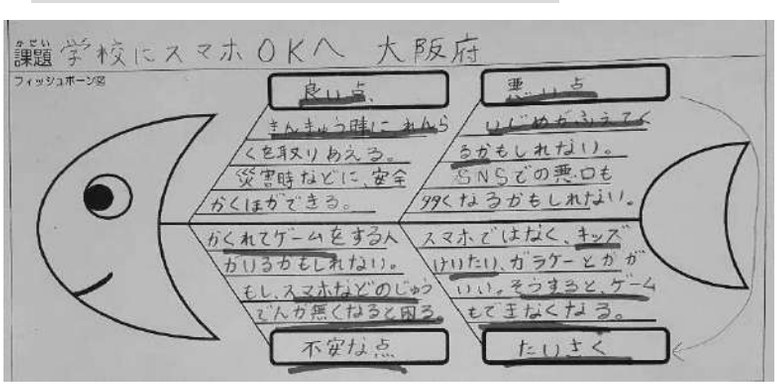
実際の流れ

・導入での趣旨説明　(1 分)
・自分の考えを発表する　(5 分)
・ペアで話し合う　(1 分)
・感想を交流する　(4 分)
・フリートーク後の価値付け　(1 分)

ＮＩＥフリートークを実施するまでの流れ

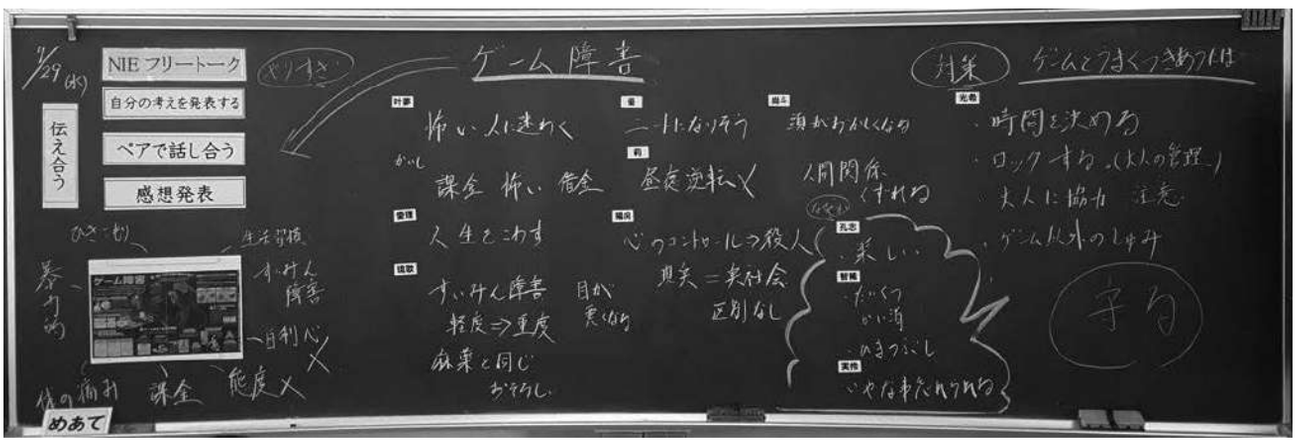


思考ツールに自分の思いや考えをまとめる



フリートークの様子

実践の足跡　板書　NIE フリートーク

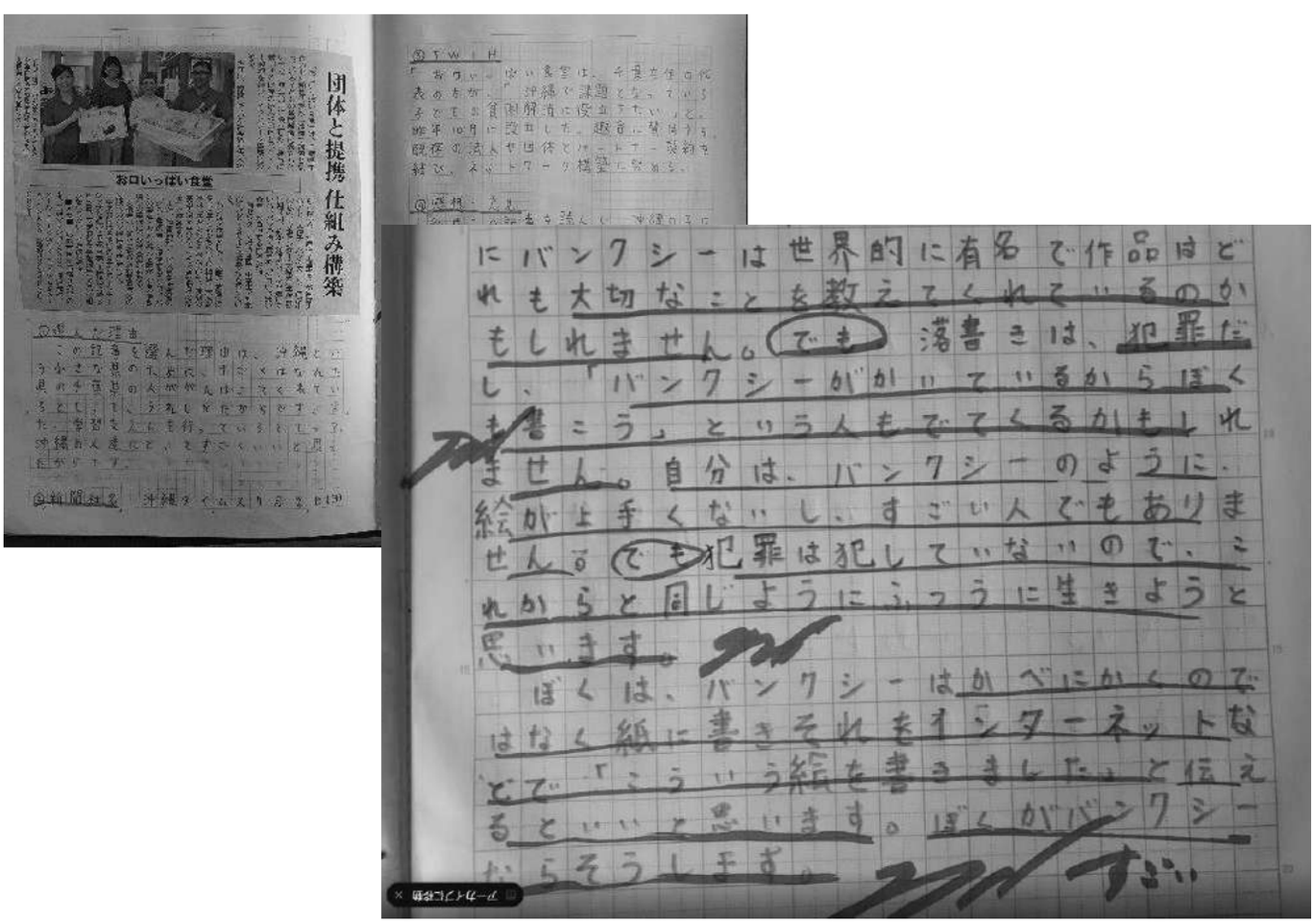


親子で取り組むスクラップノート

実践学年　6 年

学習内容　好きな新聞記事 OR 学級で同じ記事を選び、親子で記事に対しての感想を書く。
（週末に持ち帰り、週の始めに提出）

チェック　コメントではなく、「書く力」に関わるところに、〇をつけ、アンダーラインを引く。
※接続語や心情が表れている文等に引く。



新聞遊び　新聞読み聞かせ

実践学年　4～6 年

学習内容　新聞記事のスクラップ学習や記事の発表会、記事の読み聞かせ等

その他の取り組み

日本新聞協会主催「いっしょに読もう新聞コンクール」

新聞製作制作学習　はがき新聞づくり

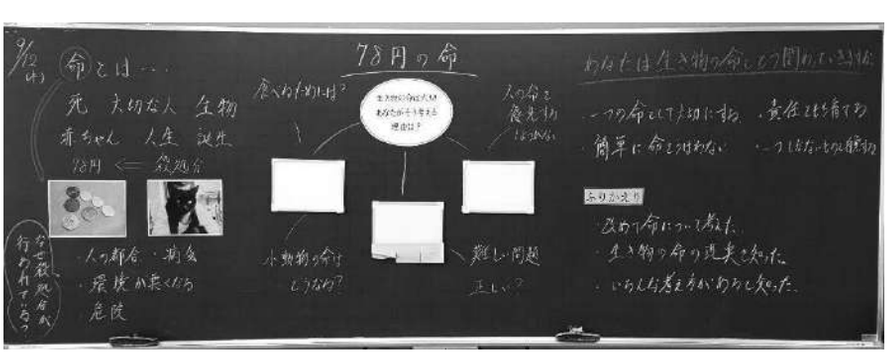
第 12 回新聞スクラップコンテスト　「タイムス社社長賞・学校賞受賞」

ワラビー復帰 50 年　特別号「復帰 100 年へ理想の沖縄を描く」

NIE 特設授業

新聞を活用した授業の様子

6 年道徳「78 円の命～小学 6 年生の新聞投稿から～」



5 年算数「割合～高校受験倍率を読み取ろう～」

５年沖縄タイムス出前授業「本土復帰 50 年について考える」

6 年琉球新報出前授業「世界のウチナーンチュ大会を知ろう」

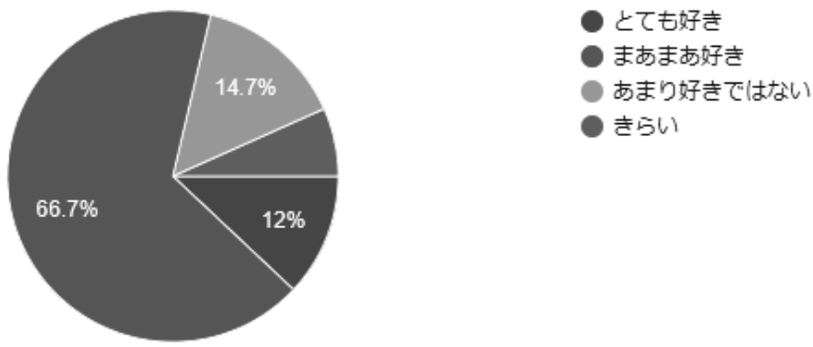
ＮＩＥの日常化に関わる校内研修

【成果】

【10 月実施】

③沖縄や日本、世界でおきている出来事に興味、関心はありますか？

75 件の回答



④　③でそうこたえた理由をかいてください。

71 件の回答

- いろんなことが知れるから
- 自分の知らないことがあるから
- とにかく楽しむのが好きから
- そういうのが好きだから。
- 自分自体あまりテレビを見ていないから出来事とかがあまりわからない
- 全てに興味があるわけではなく、自分の好きなこと親の職業などと関係していることには興味、関心があるから
- 沖縄や日本、世界は今どういう状況なのかがわかるから
- 外国にきょうみがあるから。
- 新聞を見ながら色々なことを考えることが好きです。
- 新聞を使うと色んなことの情報が得られるから。
- あんまり新聞に興味がないから。
- 難しいけど、新聞はいろいろな記事があり考えさせられいろんな考えを出せることができるから。
- 新聞を読んで今を知ることで初めて分かることもあったりして面白いからです。
- 文を書くから。

アンケートや各調査の結果、授業、思考ツールやスクラップノート等からみえた成果

1．「伝え合う力」の向上・・【関心・意欲・態度】の面で変容がみられた。
伝え合う力がついてきた。
※10 月実施のアンケート結果では発表するのが好きとこたえた児童が約 64%となった。

2．「書く力」の向上・・・・考えを広げ、深め、文章化する力がついてきた。
各調査等において「書く力」に関する問題での向上がみられた。
「新聞製作学習」が一番人気で、書く学習に意欲的に取り組んでいた。
※10 月実施のアンケート結果では書くのが得意とこたえた児童が約 67%となった。

3．「つながる力」・・・・・・学習にしっかりと向き合い、粘り強くやりとげる児童･生徒が多くなってきた。
親子と共に NIE に取り組み、主体的に社会に目をむけ、そこで得た学びを発信するようになってきた。

【課題】

・NIE のつなぎ・・・各学年で発達段階に応じた取り組みを実践すること

・NIE の日常化・・・各学年で継続して取り組むこと

令和４年度　ＮＩＥ実践報告書

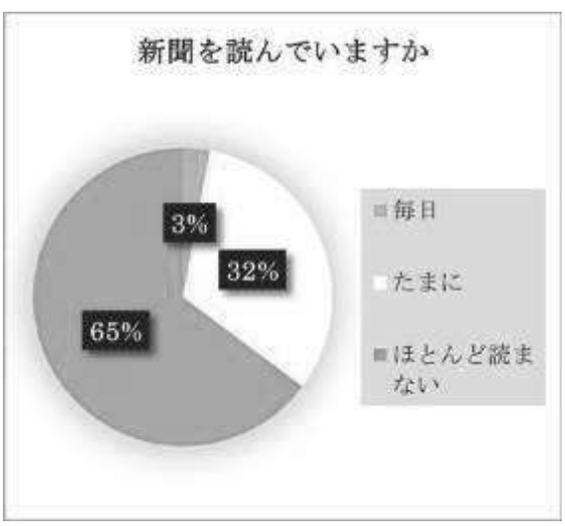
浦添市立牧港小学校
教 諭　宮城 和人

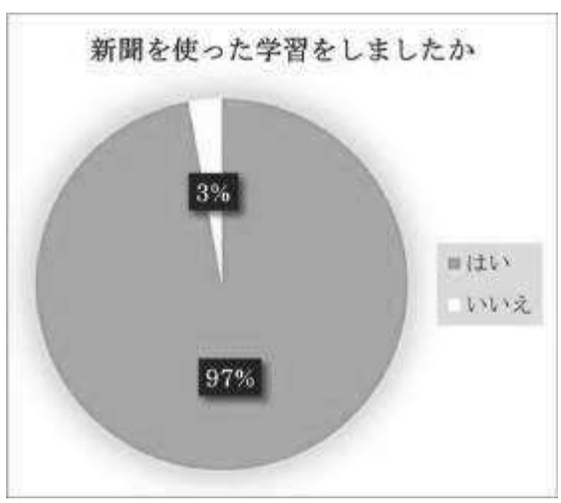
１　はじめに

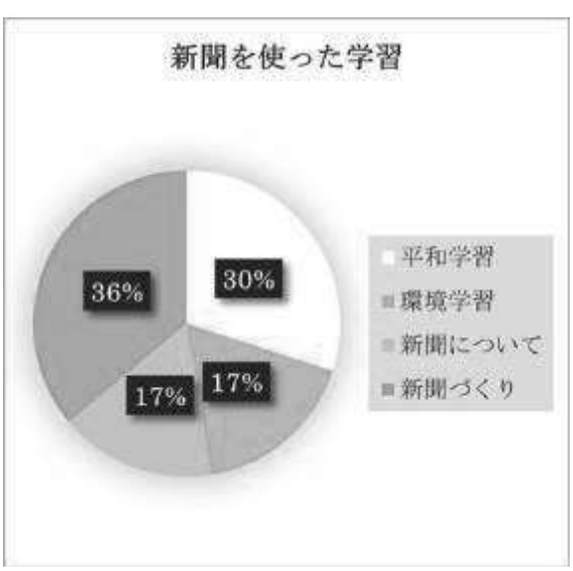
本校は、ＮＩＥ実践指定校１年目。本校実践テーマとして「新聞に親しみ，主体的・対話的で深い学びの実現」を設定した。

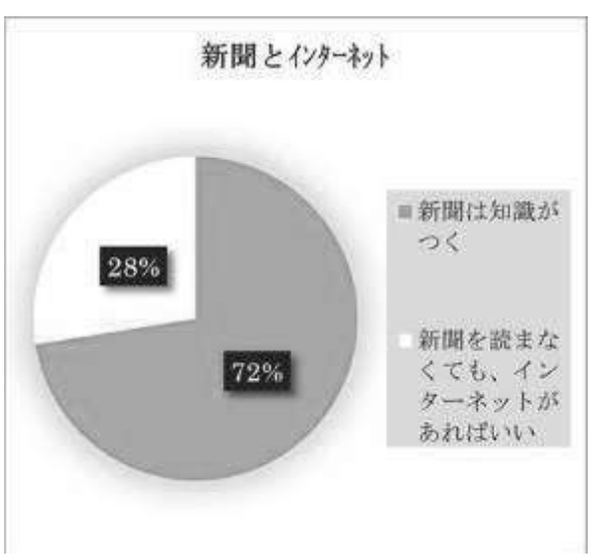
今年度は，５・６学年を実践学年として，平和学習の新聞づくりや，新聞記事の紹介，関連のコンクールに応募することを中心にＮＩＥの取り組みを行った。

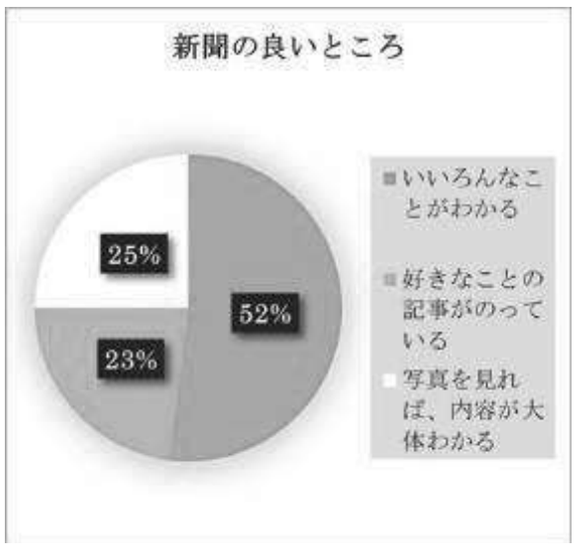
２　新聞について（５・６年対象アンケートより）

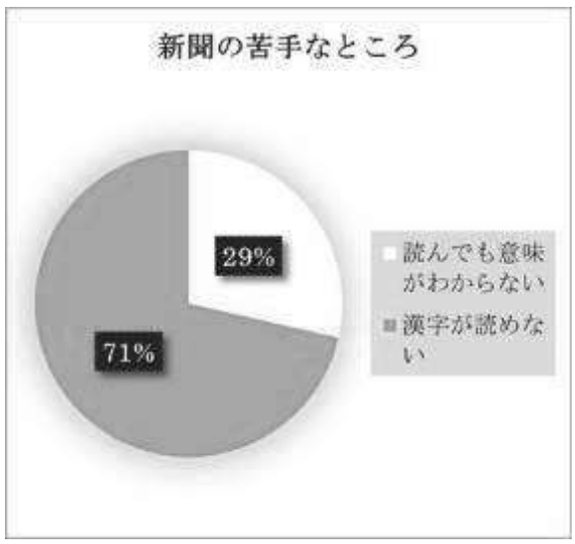












（１）アンケートから

① 今回のアンケートには、掲載していないが、家庭での新聞購読は少ない。新聞を読まない児童が多い中で、新聞の学習、コンクールの取り組みで新聞に興味を持つ子が多くなった。

② インターネットに触れる機会が増えているが、新聞を読むことで知識がつくと回答した児童が多かったのが意外であった。

③ 新聞には、いろいろな記事があることを知り、スポーツなどの興味をもっている以外に新しい発見を見つけることができた。

３　本校の取り組み

(1) 学年のフロアや図書室、理科室などに NIE コーナーを設置し、新聞に親しみやすい環境作りを行った。また、学校全体で読売新聞ワークシートにも取り組み、１０月には琉球新報社の出前授業に５年生が学習した。

NIE コーナーの設置

3　実践事例

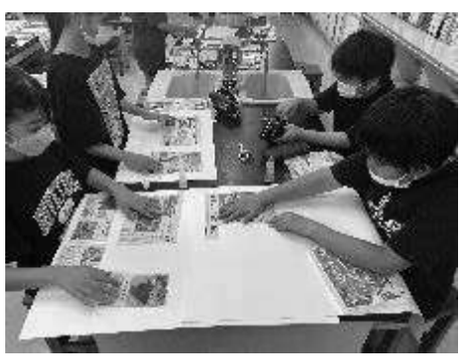
（1）6学年の実践

平和月間の取り組み（6月）

沖縄戦について学習した。沖縄タイムス「ワラビー」と琉球新報「りゅうＰＯＮ！」の沖縄戦特集号」を活用し、沖縄戦について新聞づくり。

（2）コンクールの取り組み

『スクラップ新聞』



（3）その他の実践

①各学年とＮＩＥ

・国語の時間にＮＩＥタイムの時間を設定し、自分の興味ある記事に目を通させた。また、図書館の本を読み終えた児童・・・（1年）

・国語の授業で低学年向けの記事を読んで質問に答える取り組みを学年で行った。（2年）

・琉球新報の「レッツチャレンジＮＩＥ」を各学年で取り組んだ。朝の会で、11 月の皆既月食の写真を紹介し、掲示した。（2年）

・朝の会にて、総合（黒糖づくり）に関する記事の紹介をした。（4年）

・総合「平和学習」で、沖縄戦に関する記事を読み、情報を集め、新聞にまとめる。（4年）

・国語「新聞を読もう」で活用しました。新聞記事の構成、書き方。（５年）
・授業参観日、新聞を活用して、親子で「カタカナを見つけよう」という活動をしました。（特支１年）

②児童とＮＩＥ（感想）
・いろいろな新聞を読んだり、新聞の記事や写真を自分で作ってみたりしたい。
・スクラップ新聞をまた作りたい。
・環境の問題についてやりたい。
・いろいろな新聞を読んでみたいです。
・家でとっていないので、他にどんな新聞があるか知りたい。
・スクラップ新聞をもっとつくりたい。クラスでスクラップ新聞を読みあって感想を書きたい。
・平和の事についてもっと知りたいです。
・違う新聞で、記事を見比べると、情報の与え方はどう違うのか調べたい。
・普段はインターネットでニュースや情報を見ているけど、新聞は新聞の良いところあることがわかりました。
・スマホだけじゃなく新聞では、読む力がつくからいいと思いました。
・新聞を使った学習をして気づいたことは、インターネットより新聞が具体的に書いているとわかりました。
・普段、新聞を読まないから読むきっかけにもなるし、インターネットよりも情報が正確だから自分で新聞を作るときの情報にとても役だって良いなと思います。
・月に１回、その月にあったことを自分で新聞にまとめる時間を入れることで、言葉の表現力が身に付くと思う。そして世間について興味を持ってもらえると思う。
・インターネットよりも本みたいなので、知らないことなどが分かる。そして、ブルーライトをあびずに情報を知ることができる。

４　成果と課題

〇成果
・新聞を購読している家庭は少ないが、学校での取り組みで、新聞の良さを知ることができた。
・各学年でＮＩＥ実践をしている。継続できること。

〇課題
・各学年で無理なく、ＮＩＥの実践ができること。
・ＮＩＥの情報紹介

2022年度　坂田小学校　NIE実践報告

「主体的・対話的で深い学びを生み出す児童の育成」
～情報活用能力を育む学習指導の工夫を通して～

１ ＮＩＥ実践指定校（日本新聞協会）としての取組

坂田小学校では、「クリエィティブ・主体性」のある子、自ら動ける子の育成を目指し、「表現」に繋げる「読み」の工夫を行っている。「読む」「聞く」ことを通し、相手に伝える「言葉」、相手の立場になった、思いやる「言葉」を育て、「表現」「活動」ができる子へと繋げていきたいと考え取り組んできた。また、「書く」事に時間を要する子や、自分なりの対話「理由・根拠・構成・不思議・気に入る・もしも等々」を持つことに戸惑う子への支援にも取り組んでいる。

校内研修においては、前年度まで、上記の「根拠」等をキーワードとした国語「説明文」の研究を進めてきた。その結果、各学年で児童に身につけさせたい力を明確にして指導することで、教材を正しく読み解く力が向上した。3年間の研究結果では、児童が根拠を持ち自分の考えを伝えることができるようになってきた。しかし、一方で、児童が身につけた知識及び技能を用いて、他者との対話から自分の考えを広げ深めたり、自身の考えを再構築したりするまでには至らなかった。更に学習状況調査においても、集団の特徴を捉えるために、どのようなデータを集めるべきか判断する項目に課題がみられた。これらは、理解していることを活用し、どのように駆使するかといった汎用的な力において課題が残った。

そこで、今年度は、これまで身につけた知識・技能や新たに習得した知識・技能を用いて、自らの生活や学習課題の解決に向けて駆使する力の育成を目指し研修に取り組んでいる。それらの力を育成するために、３つの学びの基盤の一つである情報活用能力に焦点をあて、研究を進めているところである。学習指導要領総則によると、『情報活用能力とは、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用し、問題を発見・解決していくのに必要な資質・能力である』とされている。各教科等においてタブレットの効果的な活用、ＮＩＥの授業実践等を通して、情報活用能力の育成、育成された能力を発揮し駆使していくことにより、深い学びが生まれ、各教科における資質・能力を身につけることに繋がると考え、校内研修深め、日常的な授業改善を図っていく。

２　研究内容

（１）　情報活用能力に視点をあてた理論研修

①情報活用能力の概念理解（NIE、タブレット等）

②効果的な情報・情報技術の検証、実践

③IE-schoolにおける指導計画を基に、年間指導計画の見直し・修正

④情報スキルの系統表作成（情報部と連携）

⑤児童に問いを持たせる発問の工夫

⑥明確な身につけさせたい資質・能力

（２）児童の基礎的・基本的事項の定着（ＮＩＥ・タブレットを効果的に活用する）

①情報手段の基本的な操作

②情報モラルの定期的な指導

③読み取る力の育成

④情報の収集、選択、活用力の育成

⑤情報を基にした思考力・判断力・表現力の育成

⑥全学年による共通実践事項を明確にした取り組み（あたりまえの 10 か条、学びの 10 か条）

３　検証授業と授業研究会の推進

（１）検証授業は、研究主題・副主題に基づいた授業とする。

（２）検証授業は、各学年１回実施する。

全体研(NIE 指定研究)　3・5 年　ﾚｲﾝﾎﾞｰ　1 年 1 月実施予定

隣学年研（西原中校区学力向上推進　幼小中連携授業会）

2・4・6 年、レインボー学級

（３）全体授業研究会の際は、講師を招聘し、指導を仰ぐ。

４　具体的な実践内容

＜令和 3 年度＞

（１）　図書館に新聞コーナーを設置した。新聞記事を読み取る環境ができた。新聞を掲示できる掲示板の寄贈を活かし、写真新聞コーナーも設置した。

（２）　職員を対象に、NIE アドバイザー・西原町指導主事甲斐崇先生による NIE 研修会を実施した。先生方は、新聞活用の手立てや「見出し 10 文字」の文字表現効果を学ぶことができた。

（３）　児童会を中心に「りゅうＰＯＮ！ジュニア通信員」として学校紹介を行った。タブレットを活用し、読み手に伝わる言葉の工夫（キーワードとなる言葉の選び方）や、まとまりと「小見出し」の整合性、４つのまとまりの構成（順序など）効果等を学ぶことができた。

坂田小学校児童が進学する西原中学校もジュニア通信員として学校紹介を行った。コロナ禍のため、それぞれの通信員が対面交流することはできなかったが、新聞を活かして学校の様子を紹介することができた。R４年度もジュニア通信員を実践する予定である。

（４）　「第１２回いっしょに読もう！新聞コンクール」へ参加した。３～６学年へ呼びかけ、記事を読み「選んだ理由、自分なりの考え」等を表現することができた。

（５）　５学年を中心に新教科書題材の中から「環境・ＳＤＧｓ」に関わる記事に触れる機会を設けた。

（６）　総合的な学習では、６学年を中心に「キャリア・平和」等に関わる記事に触れる機会を設けた。

（７）　児童・先生の中には、主体的に新聞投稿へチャレンジし「表現・伝える」機会を作っていた。

（８）　２月、５学年では、新聞記者による講話。

（９）　琉球新報検索システム利用申請。（キジサガス）

＜令和 4 年度＞

（１）　琉球新報や沖縄タイムスによる出前授業。

（２）　「第１３回いっしょに読もう！新聞コンクール」へ２学年から６学年の多くの児童が参加。

（３）　図書館の新聞コーナーを継続して実施。レッツチャレンジ NIE クイズコーナーも設置。

（４）　児童会による「坂田っ子新聞」の作成。

（５）　職員の情報を共有する場「NIE コーナー」の設置。

（６）　新聞投稿への呼びかけ。

（７）　坂田小学校・西原中学校ジュニア通信員を継続実践。

（８）　NIE フォーラムでの公開授業（３年生，５年生，特別支援学級）

（９）　琉球新報検索システム利用申請を継続する。（キジサガス）

５　令和３年度　ＮＩＥ実践指定校（日本新聞協会）主な実践　≪1年目≫

（１）　６月 10 日　職員へ紹介
町教委指導主事　甲斐　崇

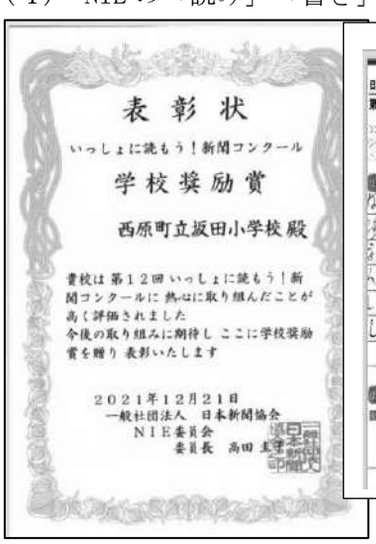
（２）　その後、児童のスクラップ
新聞を読み取り　気づきを書く

（３）　図書館の環境づくり

Ｒ１　手作り新聞台（寄贈）新聞を調べる

Ｒ３　ＮＩＥ実践指定校（日本新聞協会）

（４）　NIE の「読み」「書き」「表現」実践



表彰状

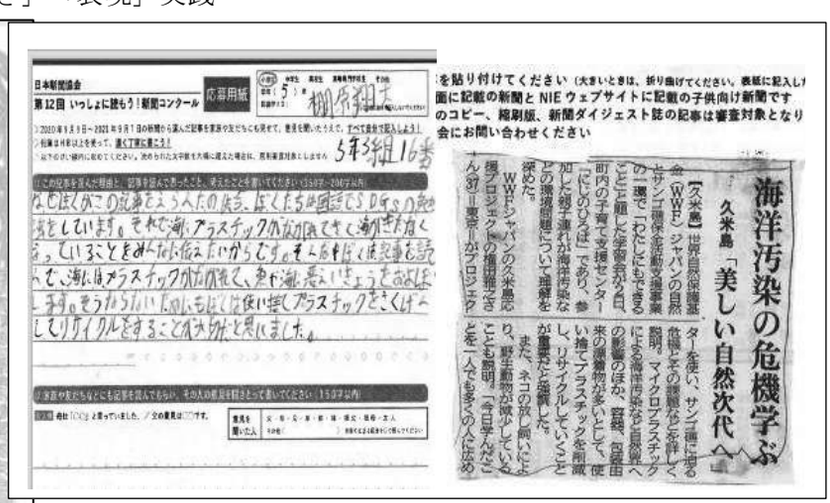
いっしょに読もう！新聞コンクール

学校奨励賞

西原町立坂田小学校殿

貴校は 第１２回 いっしょに読もう！新聞コンクールに 熱心に取り組んだことが高く評価されました
今後の取り組みに期待し ここに学校奨励賞を贈り 表彰いたします

２０２１年１２月２１日
一般社団法人　日本新聞協会
ＮＩＥ委員会
委員長　高田 [illegible]



日本新聞協会
第12回 いっしょに読もう！新聞コンクール
応募用紙
5年1組16番
棚原翔太

を貼り付けてください（大きいときは、折り曲げてください。表紙に記入し
面に記載の新聞と NIE ウェブサイトに記載の子供向け新聞です
のコピー、縮刷版、新聞ダイジェト誌の記事は審査対象となり
会にお問い合わせください

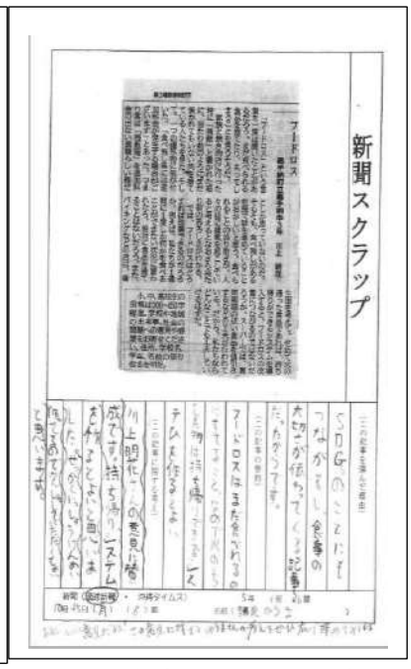
海洋汚染の危機学ぶ
久米島「美しい自然次代へ」

【久米島】世界自然保護基金（WWF）ジャパンの自然位置とその課題などを伴ど説明。マイクロプラスチックによる海洋汚染など自然へ
の影響のほか、容器、包装由来の廃棄物が多いとして、使い捨てプラスチックを削減し、リサイクルしていこと
が重要だと強調した。
また、ネコの放し飼いにより、野生動物が減少している
ことも説明。「今日学んだこと
を一人でも多くの人に広め

５年「ＳＤＧｓ海洋汚染の」記事を選んだ理由と考えを書く

Ｒ３　第１２回いっしょに読もう！
新聞コンクール「学校奨励賞」

R３　児童会・ジュニア通信員作成　坂田小紹介
文章吟味と構成を新報担当と対話する。



R３　５年新聞スクラップ
理由・考えたことを表現する。

（５）　NIE の広がりと深まり

R３　西原中学校生徒の読み聞かせ　坂田小学校にて
読み聞かせ後の質問タイムで対話する。

R３　沖縄タイムス掲載　R4.1. 30（日）
４年 宮里秀太郎学級　３３回目投稿掲載

６　令和４年度　ＮＩＥ実践指定校（日本新聞協会）主な実践≪２年目≫

（１）　琉球新報と沖縄タイムスによる出前授業（５年生）

新聞の特徴について学び、お互いにインタビューしあって、記事の作成にチャレンジしました。

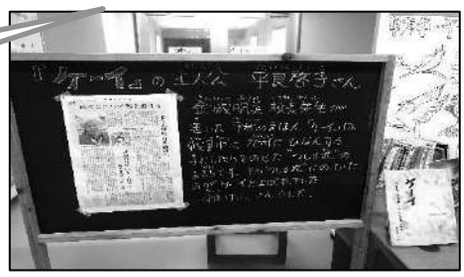
（２）　一緒に読もう新聞コンクールへの参加

２年生から６年生の多くの児童が参加し、記事について考え、友達や家族と対話することで考えを深めることができました。

（３）　図書館の新聞コーナー

「レッツチャレンジＮＩＥクイズコーナー」の設置。子どもたちが記事を読み、キーワードとなる言葉や文を見つけ、一生懸命クイズに答えていました。

復帰５０年の記事からこれまでの沖縄や平和について学ぶことができました。

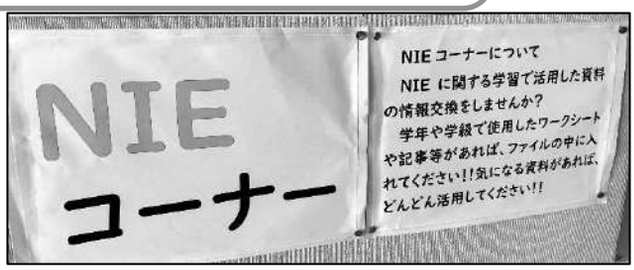


（４）　児童会が作成した「坂田っ子新聞」

児童会の子どもたちが作成した「坂田っ子新聞」学校での取り組みや出来事が紹介され、１年生から６年生の児童が興味を持って読めるように工夫して作成されている。

（5） 職員のＮＩＥに関する情報交換の場「ＮＩＥコーナー」の設置

休み時間や空いている時間に気軽に情報を交換したり、共有したりできる場を設け、NIE の授業実践へ繋げていきました。



（6） 新聞投稿への呼びかけ

日々の学習の中で書いた、日記や作文を投稿。掲載されることで子どもたちの自信にも繋がりました。

沼学習の体験

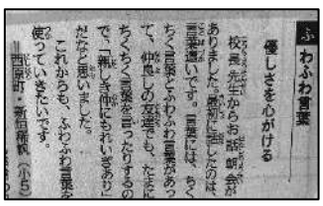
夜の散策楽しかった

夜の山道散策

友だちと協力しゴール

る（同・野原林恭）▽うちかび
の最後の灯火消えてゆく（坂田
小5年・宜野座康太郎）▽どこ

透き通る 海で海亀 空を飛ぶ
（坂田小5年・内間和花）


ふ わふわ言葉

優しさを心がける

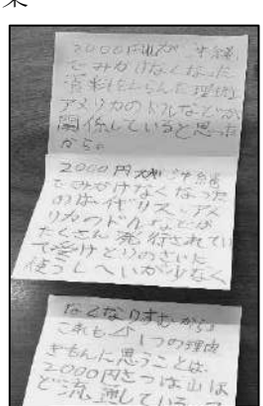
（7） 児童会・ジュニア通信員作成　児童会取組の紹介

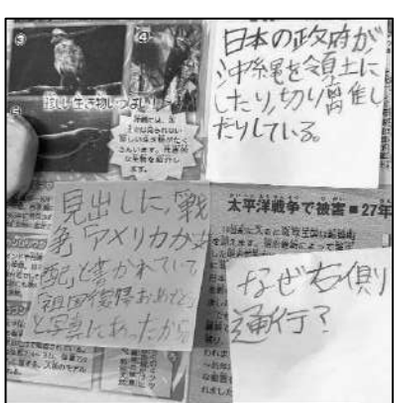
「服の力プロジェクト」

坂田小学校では、服が無くて困っている子供たちに私達が着なくなった子供服を寄付する【服のチカラプロジェクト】に参加しました。坂田小学校の児童の皆さんが期間内にとてもたくさんの服を寄付してくれました！（後略）

たくさんの服を持ってきてくれた写真

（8） 戦後復帰５０年　読売新聞を使っての授業





NIE アドバイザー甲斐先生と沖縄復帰５０年について学びました。選んだ記事から「分かったこと」「分からないこと」を書き分けて、自分の考えを伝え合っています。

７　各学年の取組

学　年	内　　容
１年生	○新聞を開き、カタカナの文字を探す活動を通して、いろいろなカタカナが使われていることに気づかせる。（国語） ○子ども新聞から気になる記事を見つけ、写真にとり、感想を発表しよう。（国語）
２年生	○新聞から沖縄復帰５０年について学ぶ。（国語） ○「一緒に読もう新聞コンクール」への参加。（国語） ○新聞をめくって、大きな見出しを見つけよう。（国語） ○レッツチャレンジＮＩＥ。記事を見て答える。 ○気になった記事の写真を見つけ、感想を伝えよう。
３年生	○新聞を開きゲーム感覚で大きな文字を探す活動をする。（総合） ○「へん」と「つくり」を知り、新聞を開きゲーム感覚で同じ部首の漢字を探す活動をする。（国語・総合） ○興味のある写真や文字、イラストに目を向け、お気に入りをレイアウトしてしおりを作る。（図工・総合） ○記事からクイズを作って、クイズ大会をしよう。（全２時間）（国語・総合） ○地域の記事からクイズを作って、クイズ大会をしよう。（全２時間）（社会・総合）
４年生	○ハガキ新聞（国、算、社の学習で分かったことをまとめる） ○ハガキ新聞（食育） ○新聞スクラップ（平和について考える） ○夏休み新聞（ハガキ新聞） ○「あいうえお漢字」　新聞から文字集めをしよう。（国語・総合） ○「わたしだけの新聞写真アルバム」　新聞から気になった記事を集めよう。
５年生	○季節に関係する新聞記事を探し、その記事内の言葉を季語として俳句を作る。（国語） ○新聞記者を招いて、新聞ができるまでの流れやメディアリテラシーについての話を聞き理解する。（社会科） ○新聞記者を招いて、新聞の構成（見出し、逆三角形など）を教えてもらう。（国語科） ○食べ物を無駄にしないために、自分たちにできることは？プラスワンを考えよう。（総合）
６年生	○復帰５０年の記事から平和について考える。（総合） ○沖縄戦について、気になった記事をスクラップ。感想を交流し考えを深めよう。（総合） ○新聞から熟語を探し、仲間分けをしよう。（国語） ○新聞から憧れの職業に関連する記事を探し、感想を交流しよう。（総合） （職業に対しての視野を広げる。） ○新聞づくり（社会） ○レッツチャレンジＮＩＥ
ﾚｲﾝﾎﾞｰ	○一つの記事から気になる物を見つけ、話し合う。（総合） ○新聞から情報を読み取ろう（世の中の出来事）。（総合） ○鳥の写真や記事の中から、鳥の数や名前をみて、友だちと一緒に問いについて考え答える。（総合） ○複数の新聞から、「気になる」記事・写真を探して比べることで、新聞に対する理解と興味・関心を高める。（社会） ○新聞の４コママンガから「うちなーぐち」の数を読み取る。（総合）
図書館	○平和月間にて新聞を使った資料を作成し掲示。 ○館内にて沖縄戦や戦争を特集した記事の読み比べコーナーを設置。 ○新聞をコーナーに設置し“レッツチャレンジＮＩＥ”クイズコーナーを備える。

令和3年・4年度　久米島町立久米島小学校　NIE実践報告書

久米島町立久米島小学校
教諭　菅間　伸也

１　はじめに

本校は、人口8000人弱の久米島町内にあり、在籍児童数は60名前後の小規模校である。また、各学年もクラス替えは無く、転出入を除けば、入学から卒業まで同じメンバーで6年間を過ごす。そのため、阿吽の呼吸のような、すべてを語らずともなんとなく伝えたいことが理解できるような環境にあり、他者に自分の意図を適切に伝えるという経験が乏しく、場面に応じた言葉を知らないため、伝えたいけどうまく伝えられないという児童が少なくない。国語科の単元テストや県の諸調査においても、文章の読み取りの問題等において正答率が低く、本校の課題となっている。そのため、今年度は、「新聞を活用した社会的事象への関心を高め、学習したことや資料を根拠として自分の考えを文章で書き表す事ができるようにする」ことをテーマに取り組んだ。また、令和3年度より日本新聞協会指定NIE実践校となった。以下は令和3年度に6年生、令和4年度では、５・６年生の複式学級を中心に新聞を活用した教育実践に取り組んだ内容になる。

２　校内研究との関わり

令和３年度の本校の校内研究は、「互いに伝え合い、深い学びを追求する児童の育成～各教科・領域における、よりよく考え“自分力”を発揮できる実践を通して～」である。副題にある“自分力”とは、「自己の持てる力を遺憾なく発揮する力」と定義づけた。児童が“自分力”を発揮できる姿とは、自分の考えを表出したり、得意を生かして本領を発揮したり、また、苦手なことにも挑戦し、わからないことは素直に認め学ぼうとする主体的な姿である。[1]

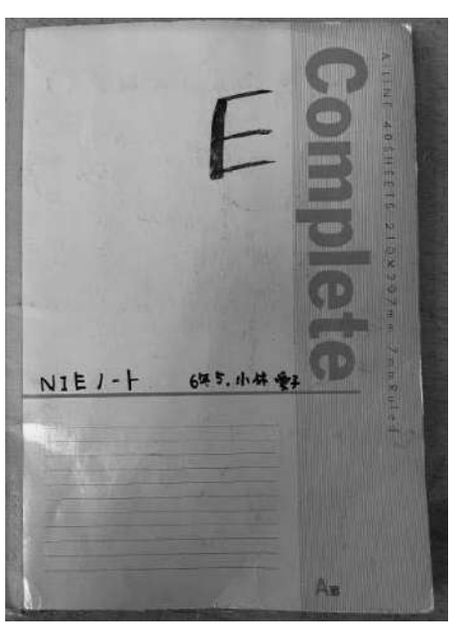
そこで、自分たちが学習したことを表出したり、日頃の授業と日常生活を関連付けながら学習を進め、深い学びを追求するために、新聞を活用した実践に取り組んだ。

３　本校の取り組み

（１）NIEノートの活用

①個人のNIEノート

NIEノートとは、児童自身が興味のある新聞記事を選び、その記事に対する感想や疑問点などを整理するノートである。本学級は、日頃の授業や県到達度調査などの諸調査等からも、主語と述語の関係性や〇〇字以内に要約することが苦手な児童が多く在籍していることがわかった。そのめ、NIEノートでは、「５W1Hをはっきりさせる。」「②



[1] 久米島町立久米島小学校　令和３年度校内研究概要より

その記事に対する自分の考えや疑問に思ったことを書く。」ということを行ってきた。

まず、「①５W1Hをはっきりさせる」については記事の中から、誰が(who)、何を(what)、いつ(when)、どこで(where)、なぜ(why)、どのように(how),を見つけ、記事を要約させた。それを踏まえて「②その記事に対する自分の考えや疑問に思ったことを書く」ことで、社会的事象を批判的に考察し、情報過多な現代社会の中においても、多面的・多角的に考察する力が養われると考える。

②NIEリレーノート

NIEリレーノートとは、1冊のNIEノートをリレー形式で回し、前日の友達のページを読んで、それに対するコメントを入れる。そして、次のページに個人のNIEノートと同様に書く。これを繰り返し実施する。このNIEノートのねらいとしては、自分の考えと比較しながら友達の考えを読むことで、多面的・多角的な思考を促すことである。右の資料が実際のNIEリレーノートである。友達の意見の良いところにも着目して読むことができ、単に新聞の記事の内容だけでなく、友達の考えを読むことができる利点があると考える。

また、次の人に回す際には、その人が興味がありそうな記事を選んでNIEノートに貼り付けてから渡すというシステムでやっているので、自分の興味のある記事以外にも触れることができる。

（２）校内に新聞記事コーナーの設置

校内の掲示板に沖縄タイムスのワラビーに掲載されている、新聞クイズを掲示している。そして、全校で取り組むことができるように、図書館教育主任がまとめたA4サイズのプリントに、希望する児童がクイズに取り組んでいた。その結果を貼り出すなど、児童の新聞への興味関心を高めてきた。このクイズに取り組む中で、わからない言葉やクイズについてタブレットを使って調べる児童もいた。また、家族に話を聞くなど、家庭内で新聞を通してコミュニケーションを取る姿も見られるなど、様々な良い影響が出てきている。

（３）コンクールへの出展（令和３年度）

①いっしょに読もう！新聞コンクール

6年生１１名中９名が夏休みの宿題として取り組み、学校奨励賞を受賞した。

②新聞スクラップコンテスト

優秀賞（１名）

③琉球新報学校新聞コンクール

金賞１名　銀賞３名　銅賞４名

計８名（１１名中）

（４）理想教育財団によるはがき新聞の活用

今年度、NIEのねらいとして、「①社会的事象への感心を高める」「②学習したことや資料を根拠として自分の考えを文章で書き表す事ができるようにする。」ことの２点をあげた。そのうち「②学習したことや資料を根拠として自分の考えを文章で書き表す事ができるようにする。」では、理想教育財団のはがき新聞を活用した。

右の資料①では、国語科の小単元である季節の言葉を用いて俳句や短歌を創作する学習で用いたものである 。児童が考えた俳句や短歌に加えて、そのときの情景等を文章と絵で表している。

また、資料②では、社会科等で活用してきたはがき新聞の様子である。（資料は、冬休みの宿題にだした、おすすめする本の紹介）

はがき新聞を多く活用した社会科では、単元の最初に設定する「単元のめあて」をもとに学習を進めた。そのめあてに対する児童の一人一人が単元を通してわかったことや感じたことを書かせ、１枚のはがき新聞にまとめさせ、専用のポケットに入れさせた。授業の時間内で終わらせることもでき、かつ、少ない文字数でうまくまとめるため、要約する力を身につけさせることもできた。

資料①

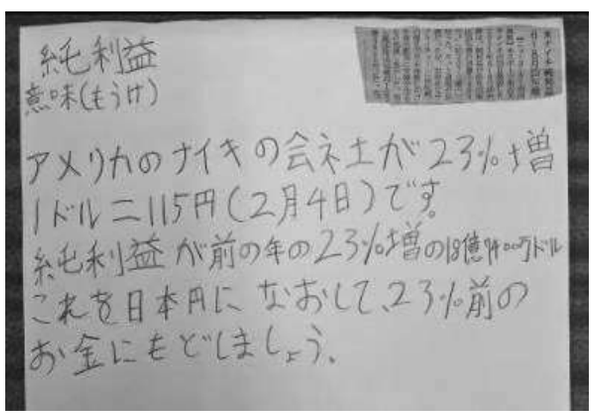
資料②

（５）算数科での問題作成

算数科で学習する内容と日常生活を結びつけさせることで、児童が主体的に学習に取り組みやすくなるのではないかと考え、新聞を活用した算数の問題作りに取り組んだ。６学年では、算数の最終単元において、６年パスポート（啓林館）という単元があり、総復習する内容で構成されている。そこで、これまで学習した内容をふり返りながら、自分たちで問題を作成させた。

①割合の学習

右の資料は、アメリカのNIKEの純利益が上がったという記事である。この記事を使い、割合の問題を作成したものである。内容は「アメリカのNIKEの会社（の売り上げ）が23％増、1ドル＝115円です。これを日本円に戻して、23％増える前の金額を求めましょう」である。このように、割合の問題を作るだけでなく、「純利益」という言葉の意味を辞書で調べたり、為替のレートをタブレットを用いて調べるなど、1つの記事から、様々な学習をし、それを基に問題を作成している。この問題を作成した児童は、決して学力が高い児童ではなく、支援員のサポートを受けながら学習を進める児童であるが、自分の興味のあるスポーツの記事を選ぶことで、主体的に学習を進める様子が見られた。



②速さの学習

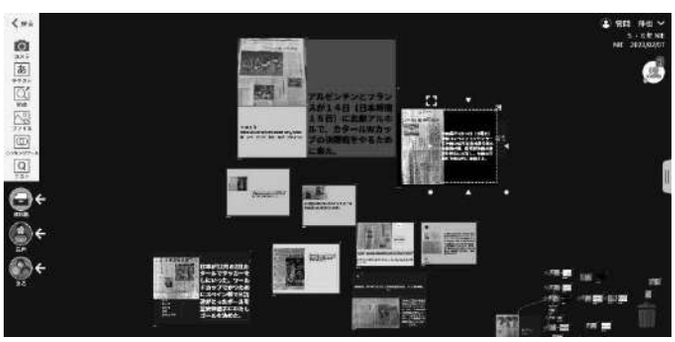
右の資料は台湾の軍艦の時速と、台湾と与那国島までの距離からかかる時間を求める問題を作成したものである。内容は「時速74kmですすむ軍艦があります。台湾から与那国島まで108km離れています。この船では何時間かかりますか？答えを少数第1位まで求めなさい。」である。

この問題では、速さだけでなく、概数の学習も取り入れている。

また、この記事には中国と台湾の関係性も記載されており、現在の社会情勢を知ることもできる。

このように、問題を作る際に、問題の意図を伝わりやすくするための文章を構成する力や社会的事象へについての知識の習得など、教科横断的な学習を進めることができた。

（５）ICT機器を活用してのNIE



久米島町はクロムブックが、1人1台端末として導入され、ロイロノートも多くの授業で活用されている。そこで、今年度は、新聞を切ってノートに貼るだけでなく、みんなが同じ記事を読み、自分の考えと比較させるために、ロイロノートの共有ノートを用いたＮＩＥ実践にも取り組んだ。

まず、気になる記事をカメラで撮影し、ロイロノートに添付する。それを、シンキングツールに貼り付け、同じシートの上で、５Ｗ１Ｈを見つけ、さらに自分の考えを書いていく。という手順で行った。

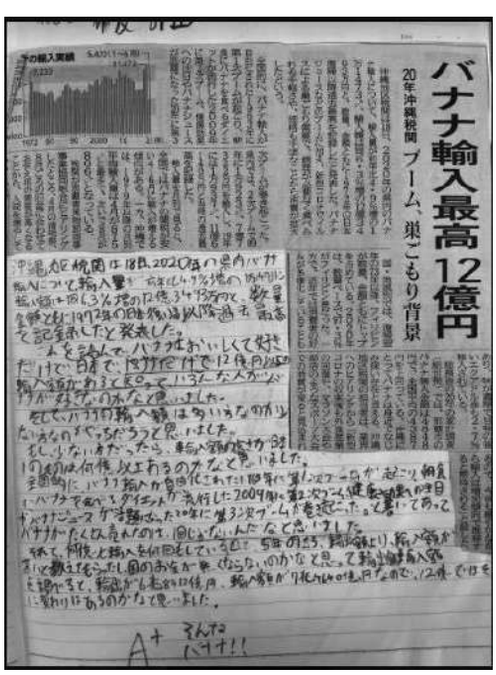
（６）端材の活用

気に入った新聞の残りを活用方法として、６年社会科の歴史、「鎌倉幕府」の学習で、大仏の大きさを体験するというものである。実際の大きさをインターネットを使って調べ、各部位を新聞紙を切ったりつなげたりすることで、体験的に強大な大仏を実感することができた。そして、当時の技術でなぜここまで大きな大仏を作ることができたのかという疑問を児童から出させることができた。

４　成果と課題

（１）成果

○新聞の書かれている内容を理解し、それを踏まえて自分の考えをきちんと書けるようになった。下の資料は同一児童の6月（NIE実践を始めた頃）と10月のNIEノートである。書く量が増えており、かつ10月では、自分で興味を持ったことや疑問に思ったことをインターネットを使って調べるなど、主体的に取り組んでいることがうかがえる。



○下の2つも同一児童のNIEノートである。左は国頭の大国林道の落書きに関する記事、右は辺戸名の壁に描かれたアートに関する記事である。この2つは同じように壁に書かれているのに、描く人や意義などの違いによって、記事の内容も周りの反応も違うことについての感想を書いていた。このように、物事を比較しながら多面的に読み取る力もついてきた。

（２）課題

●NIEを正規の授業時間で取り組むことが難しく、宿題やすき間の時間での取り組みしかできず、時間の確保が必要である。

●支援を要する児童は、まず、新聞に書かれている事を理解することが難しく、内容を理解しながら読むのではなく、ただ読んでいるという状態になる事もあった。

●いっしょに読もう！新聞コンクールでは、保護者の意見を書く欄が設けられているが、家庭によっては、協力が得られず、全員でコンクールに出展することが難しかった。

令和４年度　西原町立西原中学校　NIE 実践報告書

西原町立西原中学校
校長　友寄ゆかり
NIE 担当　喜納英仁

１．はじめに

今年度は沖縄県 NIE 実践指定校２年目として活動を行った。各学年や教科での実践を行い前年度よりも積極的に取り組み、各学年や教科での実践を行う事ができた。

２．実践事例

(1)『私の視点』の活用

『私の視点』とは、生徒が新聞から興味のある記事を選び、記事の内容と選んだ理由・感想をまとめて発表する取り組みである。全学年の社会科の授業で実施した。方法は授業の初めに作成方法を説明する。まず新聞記事の中から気になるものを取り上げる。取り上げた記事の内容を通して考えた事や感想を記入する。

この取り組みから期待できる効果は、新聞と社会的事象に興味・関心が高まること、まとめたり自分の考えを表現する力が高まること、相手の考え（主張）に対する聴く力が高まることが考えられる。

『私の視点』の掲示板

本土復帰 50 周年の新聞記事から

⑵平和新聞の活用

子ども向け新聞「りゅうぽん」沖縄戦特集号（琉球新報社）と「ワラビー」（沖縄タイムス社）の両紙を活用して平和学習を実施した。新聞記事の内容を読み込み、戦争経験者による戦時中の悲惨さや海外へ派遣された方々の話を改めて理解し、今日の世界で行われている戦争についても結びつけて考える事ができた。

３年生の授業での「りゅうぽん」と「ワラビー」から沖縄戦や経験者の話を読み込んでいる様子

⑶日本新聞協会　第 13 回いっしょに読もう！新聞コンクール

「⑵平和新聞の活用」で学習したものを、より「主体的・対話的で深い学び」につなげるために日本新聞協会の「いっしょに読もう！新聞コンクール」の取り組みを実施した。その取り組み内容は、新聞の中から印象が深く残った記事や新しい学びになった記事などから、読んでみての自分の感想を始めに記入し、次にその記事と感想を家族や友人などへ読んでもらい、どのように感じたのかを聞き、感想やアドバイス記入する。そして最後は、それらを踏まえた自分の考えた事や今後の予想、今後の取り組みなどを記入するものとなっている。

西原町は沖縄戦の激戦地となった場所でもあり、家族（祖父母）の話を多くの生徒が記入させる事ができていた。本校では平和学習の一環で、沖縄戦で亡くなられた方が刻銘されている平和の礎の呼名の読み上げを行っており、特に３年生は平和の礎での学習もあることから、より深い学びにし戦争の悲惨さをより感じさせる事ができた。その後、日本新聞協会より学校奨励賞を頂き、今回の取り組みが高く評価された。

【１段目】記事を読んで気づいた事など　　【２段目】家族や友人からのコメント

【３段目】１・２段目の内容を踏まえ、より深く考え、今後の予想や自分の取り組みなど記入

(4)新聞投稿

国語科が中心となって、新聞投稿に取り組んでいる。掲載された生徒は、教師から声をかけられたり、褒められたりして、自己肯定感の高まりに効果が期待される。

(5)社会科新聞コンクール

社会科が中心となって、沖縄県中学生社会科新聞コンクールに毎年取り組んでいる。テーマを西原町にし、全校生徒が夏休みの課題として探究したものを新聞にまとめていた。

(6)NIE 掲示板の作成

今年度、新たな取り組みとして NIE 掲示板の取り組みを行った。琉球新報と沖縄タイムスを中心に日々、新しい情報を伝える役割として設置した。また、新聞社の一面を掲示したり、NIE の取り組みで表彰された生徒の作品を掲示した。また、世界のうちなんちゅ大会やウクライナ侵攻などの記事も生徒が見えるように工夫をした。

３．成果・課題

【成果】

２年間の活動を通して、生徒の言葉から、さまざまな社会的事象に関する事柄が発せられる機会が増えてきたと感じることから、関心が高まっていると考えられる。また、資料を読み取る力や活用する力、自分の考えを書いて表現する力が向上したと考えられる。

学校としては、全学年で新聞の資料の掲示や新聞社の方による記事作成の方法や実情などを学び、より新聞からの学びが多くあった一年間であったと考える。

【課題】

NIE に関する学校全体としての取り組み体制の構築や確認が継続して必要と感じた。また、掲示場所の偏りや授業内での取り扱う時間の確保等の課題が残った。

４．おわりに

今年度が２年目という事もあり、職員間での取り組みは各学年での取り組みまで広げる事ができた。また、社会科や国語科、美術科の協力があり、この一年間充実した NIE の実践に取り組んできた。今年度が最終年ではあるが、NIE 実践校だったことの取り組みを継続的に行えるようにしていきたい。

令和４年度

日本新聞協会　NIE 実践校 実践報告書

沖縄県立本部高等学校
教諭　：比嘉 啓信（地歴公民科）、小松真澄（数学科）、仲松　聖（福祉科）

１ はじめに

今年度は、日本新聞協会の実践指定校として二年目の締めの年となった。昨年度の一年目は、９月から取り組みのテーマを以下の２つに設定し、実践を進めた。

①読む・書く力が弱い生徒が多い本校において、NIE 実践を通して、その力を育成する。
②教科の学びを、NIE 実践を通して、実社会に繋がる学びに転換し、主体的・対話的で深い学びへとつなげる。

昨年度の実践報告書中の最後のまとめで、NIE 教材の持つ魅力と可能性について述べた。その中でも、新学習指導要領が重点として示す「一人ひとりの『生きる力』を育むこと」、その中でも特に「多様性への理解や主体性、問題解決能力の育成」との関連の中で、教材としての新聞の持つ有効性の高さについて触れた。特に、「問題を見つけた時に論理的に考えて解決まで導ける力」や、「仲間と協力しながら問題に取り組むための表現力」などの基盤となる力を育む実践をつくり出せる可能性が掴み取れたのは大きな成果であったと言える。

また、２年目の実践の課題として、上記、評価の三観点中の「学びに向かう力・人間性」に関わり、「学習に対する主体的な意識や態度、意欲を育成する」ことを意識した実践を展開していきたいと結びに換えた。そのような意識、態度、意欲を育てるのは、もちろん一教科の取り組みだけでは不可能であり、これまでの私の実践の課題でもあった。そこで、今年度は、(NIE 実践だけでなく、高校現場における一般的な課題でもあるが）それぞれの教科に実践が閉じている部分を、いかに教科横断的な形で展開していくことができるのか、その方策を見つけ出していきたいということを、２年目のスタートにあたって課題として設定した。

そこで、今年度は、朝学習における新聞を使った NIE 教材の内容を少しレベルアップし、「読み込む力の育成」、それをもとに「まとめる力」へとつなげること、そして、さらには「探究的に課題を自ら設定」し、「その課題の解決のために学びを進める意欲と実践力の育成」につなげていく取り組みを、他教科の先生方とコラボしながら進めていく計画を立てた。その上で、今年度は、上記の目標に加え、以下の目標を新たに加えることにした。

③　①②の実践を通して基礎学力の向上を図り、学習に対する主体的な意識や態度、意欲を育てる。

今年度は、主に、「地歴・公民科１名」、「数学科１名」、「福祉科１名」の職員を中心にして実践を展開した。以下、その取り組みの内容を概観したい。

２ 本校の取り組み（主なもの）

① 朝学（１０分間学習）における NIE 教材による学習（全校生徒）
② 「新聞感想文」（夏期休業中の課題として取り組む）（全校生徒）
③ いっしょに読もう新聞コンクール（夏期休業中の課題として取り組む）（全校生徒）
④ 公共での NIE 教材を使った授業（１年生）
⑤ 地理 B での NIE 教材を使った授業（２・３年生）
⑥ 福祉（生活支援技術）での新聞記事を活用した授業（２年生）
⑦ 基本数学における PPDCA サイクルを活用した探究学習の授業（２年生）

３ 成果（主なもの）

□令和４年度　第１２回　新聞スクラップコンテスト（主催：沖縄タイムス社）
新聞感想文部門
【優良賞】
比嘉　成（２年）　　兼次　千友里（２年）
【佳作】
岸本　鈴音（１年）

□令和４年度　第１３回　いっしょに読もう新聞コンクール（主催：日本新聞協会）
【学校奨励賞】
新聞に触れる日常的な活動を含め、熱心に取り組んだ意欲的な学校、今後の取り組みに期待できるとして表彰。

４ 実践事例報告

（1）朝学における NIE 実践（報告者：比嘉　啓信：地歴・公民科）

昨年度の実践の継続で、本年度も全校生徒を対象とし朝学において NIE 実践を取り組んだ。昨年度同様、取り組みの基本軸を、本校の課題の１つである「①（義務教育段階で身についていない）読む・書く力をいかに育成するか」、②教科の学びを実社会に繋がる学びに転換し、主体的・対話的で深い学びへとつなげる、に据え、実践に取り組んだ。昨年度の報告でも書いたように、①②とも昨年度実践の中で一定の成果を得たが、特に今年度は、昨年よりも課題内容のレベルを上げ、「深く読む」力、「俯瞰的に考える」力、それをもとに「自分の思いをしっかりと記述する力」を育成することも目的とした課題の作成ならびに、事後指導・支援を充実させることに力を入れた。

こうした力の育成は、新学習指導要領が示す育成すべき資質・能力の三観点とも関連して重要であるばかりでなく、特に、卒業後に選択される進路先でもしっかりと学習や仕事をこなしていける力の基盤としても重要である。具体的に言うと、「高校生のための学びの基礎診断」（「義務教育段階の学習内容

を含めた高校生に求められる基礎学力の確実な修得とそれによる高校生の学習意欲の喚起を図るため、高等学校段階における生徒の基礎学力の定着度合いを測定する民間の試験」）として認定されている Benesse の基礎力診断テスト（年２回、４月、９月に実施する実力テスト）における「GTZ 指標」において多くの生徒が、今年度の４月段階で、D３に位置していた。

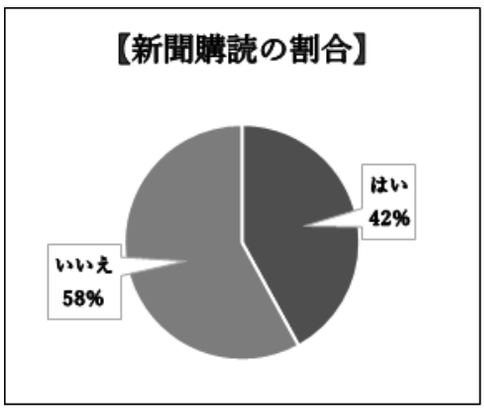
【ベネッセ　学習到達ゾーン指標（GTZ）と対応した進路選択肢の対応に関して】

<table>
<tr><th rowspan="2">学習到達ゾーン
【GTZ】</th><th colspan="3">進　路　選　択　肢</th></tr>
<tr><th colspan="2">進　学</th><th>就　職</th></tr>
<tr><td colspan="2">【S ゾーン】
S１～S3</td><td colspan="2">難関大学合格レベル</td><td rowspan="4">上場企業などの大手の就職筆記試験や公務員試験に対応できるレベル</td></tr>
<tr><td colspan="2">【A ゾーン】
A1～A3</td><td colspan="2">国公立・中堅私立合格レベル</td></tr>
<tr><td rowspan="3">【B ゾーン】</td><td>B1</td><td colspan="2">国公立・中堅合格レベル</td></tr>
<tr><td>B２</td><td colspan="2" rowspan="2">国公立大の推薦入試に合格可能で、私立大の一般入試では、選択肢の広がるレベル</td></tr>
<tr><td>B３</td></tr>
<tr><td rowspan="2">【C ゾーン】</td><td>C1
～
C2</td><td colspan="2">私大・短大・専門学校の一般入試に挑戦できるレベル</td><td rowspan="2">就職筆記試験における平均的評価レベル</td></tr>
<tr><td>C3</td><td colspan="2">私大・短大・専門学校の一般入試に向けた実力養成レベル</td></tr>
<tr><td rowspan="3">【D レベル】</td><td>D１</td><td colspan="2" rowspan="3">上級学校に進学することはできるが、授業についていけず、苦労する学生が多い</td><td rowspan="2">就職試験で必要な最低限のラインはクリアしているが、仕事をする上で、支障が出ることが多い</td></tr>
<tr><td>D２</td></tr>
<tr><td>D３</td><td>筆記試験が課される企業では不合格になることが多い</td></tr>
</table>

上記表からもわかるように、進学において D レベルは、上級学校に進学することはできるが、授業についていけず苦労する学生が多くなる傾向があり、就職においてD3 レベルは、筆記試験が課される企業では不合格になることが多い。昨年度の NIE 実践の成果もあり、特に読む・書く力の段階を端的に示す国語の学力において、４月段階で３年生Ｄ２－、Ｄ２＋、１年Ｄ１と、Ｄ３レベルは脱したものの、いまだかなり厳しい段階に位置していた。

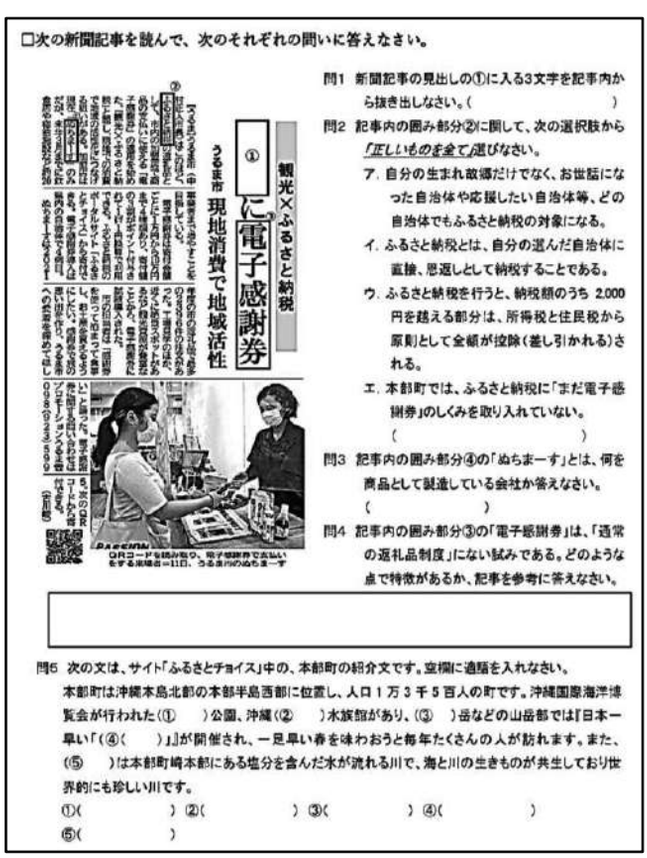
今年度は、そうした状況も踏まえながら、朝学において、昨年度よりも深く読み込み、自分の考えを示す課題、そして、それをもとに、実社会に繋がる学び、主体的・対話的で深い学へとつなげるとともに、その成果として学習に対する主体的な意識や態度、意欲を育てることを意識した教材づくりに努めた。ちなみに本校における朝学の取り組みは、月曜日はタイム・マネジメントの取り組み、火曜日

～木曜日は英語、数学、国語の課題、金曜日は隔週で社会と理科の課題に取り組んでいる。昨年度の報告書でも触れたが、生徒の情報収集は、基本的に SNS が中心となる。ましてや家庭での新聞購読率は、昨年度のアンケート結果でも示したように、約４割しかなく、日常的に新聞を目にする機会がない生徒も多い。（必然的に、新聞の読み方にも慣れていない生徒も多くなるのが現状である）また、基本的に特に LINE、Facebook、Instagram などの SNS から得られる情報は、使用者の情報嗜好に合わせて、選別され特化された情報が多くなるため、その内容は非常に偏ったものとなる。同時に、その情報の中には真偽のほどが疑わしいものも多く含まれる。自分の興味・関心に範囲を限定せず、より広い視点で物事が見える、知ることができる新聞というツールが選択されなくなってきているのは、生徒たちの読む力・考える力の弱体化だけでなく、思考や嗜好の範囲を狭める要因として看過できない。その結果、生徒達は、自分自身が住んでいる場所の情報すら知らない。（ある意味、知ろうとさえしない）そうした現状をどのように変えれば良いのかという視点から、１学期前半の課題は、より地域に関連し、自分たちの足下から考え、探究できるような課題づくりに努めた。課題をこなしながら、その延長線上で発展的・探究的な活動の中で、思考を手介させ、それを自分なりにまとめる作業ができるように心がけた。その例としてあげているのが、次のふるさと納



【朝学で取り組んでいる NIE 教材
ワークシートの例①－１（表面）】

【朝学で取り組んでいる NIE 教材
ワークシートの例①－２（裏面）】



□次の新聞記事を読んで、次のそれぞれの問いに答えなさい。

観光×ふるさと納税

① に電子感謝券

うるま市　現地消費で地域活性

問1　新聞記事の見出しの①に入る3文字を記事内から抜き出しなさい。（　　）

問2　記事内の囲み部分②に関して、次の選択肢から「正しいものを全て」選びなさい。

ア. 自分の生まれ故郷だけでなく、お世話になった自治体や応援したい自治体等、どの自治体でもふるさと納税の対象になる。

イ. ふるさと納税とは、自分の選んだ自治体に直接、恩返しとして納税することである。

ウ. ふるさと納税を行うと、納税額のうち 2,000 円を越える部分は、所得税と住民税から原則として全額が控除（差し引かれる）される。

エ. 本部町では、ふるさと納税に「まだ電子感謝券」のしくみを取り入れていない。

（　　）

問3　記事内の囲み部分④の「ぬちまーす」とは、何を商品として製造している会社か答えなさい。

（　　）

問4　記事内の囲み部分③の「電子感謝券」は、「通常の返礼品制度」にない試みである。どのような点で特徴があるか、記事を参考に答えなさい。

問5　次の文は、サイト「ふるさとチョイス」中の、本部町の紹介文です。空欄に適語を入れなさい。

本部町は沖縄本島北部の本部半島西部に位置し、人口１万３千５百人の町です。沖縄国際海洋博覧会が行われた（①　　）公園、沖縄（②　　）水族館があり、（③　　）岳などの山岳部では『日本一早い「（④（　　））」』が開催され、一足早い春を味わおうと毎年たくさんの人が訪れます。また、（⑤　　）は本部町崎本部にある塩分を含んだ水が流れる川で、海と川の生きものが共生しており世界的にも珍しい川です。

①（　　）②（　　）③（　　）④（　　）

⑤（　　）

□下の課題に答えなさい。

課題（2）

（1）本部町のふるさと納税の状況（納税された金額、件数、納税額の推移、返礼品の種類など）を調べてみよう。

（2）本部町のふるさと納税に関して、他の市町村にはない良さ、可能性と課題点をそれぞれ考えて見よう。

①良さや可能性

②課題点

「あなたが本部町の職員なら、どのようなアイデアを出しますか？企画となぜそのような企画を提案するか文章化してください」（→以上は書こう）

税に係る記事をもとにした課題である。記事との関連で、本部町のふるさと納税に関わる課題（地域の観光などとも関連して）をこなすと同時に、地域の発展のために、ふるさと納税を利用してどのような企画ができるか等についても考えさせた。

【生徒が取り組んだワークシートの例①】

□次の新聞記事を読んで、次のそれぞれの問いに答えなさい。

観光×ふるさと納税

①に③電子感謝券

うるま市 現地消費で地域活性

【うるま】うるま市（中村正人市長）はこのほど、②ふるさと納税の返礼品として、市内の加盟店で商品の支払いに使える「電子感謝券」の運用を始めた。「観光×ふるさと納税」と銘し、現地での消費で地域の活性化につなげる狙いがある。加盟店は現在、④「ぬちまーす」のみだが、来年3月までに飲食店や宿泊施設など約20軒まで増やすことを目指している。

電子感謝券は寄付金額ごとに1万円から10万円まで4種類あり、寄付額の3割がポイント付与されて1ポイント1円換算で利用できる。ふるさと納税のポータルサイト「ふるさとチョイス」から寄付で入手する。「電子感謝券導入は県内の自治体で4例目。ぬちまーすは2021年度の市の返礼品で最多の2365件の寄付があった。工場見学のほか、近くに絶景スポットがあるなど観光客が訪れることから、電子感謝券に試験導入された。

市の担当者は「感謝券を使って泊まって食事し、お土産を買えるよう発展させたい。感謝券で旅の思い出を作り、うるま市への空港を探めてほしい」と語った。電子感謝券に関する問い合わせは、プロモーションうるま会098(923)599

5.次のQRコードから寄付できる。（古川敬）

QRコードを読み取り、電子感謝券で支払いをする来場者＝11日、うるま市のぬちまーす

問1　新聞記事の見出しの①に入る3文字を記事内から抜き出しなさい。（返礼品）

問2　記事内の囲み部分②に関して、次の選択肢から「正しいものを全て」選びなさい。

ア．自分の生まれ故郷だけでなく、お世話になった自治体や応援したい自治体等、どの自治体でもふるさと納税の対象になる。

イ．ふるさと納税とは、自分の選んだ自治体に直接、恩返しとして納税することである。

ウ．ふるさと納税を行うと、納税額のうち 2,000 円を越える部分は、所得税と住民税から原則として全額が控除（差し引かれる）される。

エ．本部町では、ふるさと納税に「まだ電子感謝券」のしくみを取り入れていない。

（ア．イ．）

問3　記事内の囲み部分④の「ぬちまーす」とは、何を商品として製造している会社か答えなさい。

（塩）

問4　記事内の囲み部分③の「電子感謝券」は、「通常の返礼品制度」にない試みである。どのような点で特徴があるか、記事を参考に答えなさい。

寄付額の3割がポイント付与されて 1ポイント1円換算で利用できる。

問5　次の文は、サイト「ふるさとチョイス」中の、本部町の紹介文です。空欄に適語を入れなさい。

本部町は沖縄本島北部の本部半島西部に位置し、人口１万３千５百人の町です。沖縄国際海洋博覧会が行われた（①　　）公園、沖縄（②　　）水族館があり、（③　　）岳などの山岳部では『日本一早い「（④（　　）」』が開催され、一足早い春を味わおうと毎年たくさんの人が訪れます。また、（⑤　　）は本部町崎本部にある塩分を含んだ水が流れる川で、海と川の生きものが共生しており世界的にも珍しい川です。

①（海洋博）②（美ら海）③（本部）④（桜まつり）⑤（塩川）

上記の例で示したワークシートの生徒は、成績では上位層に位置する生徒であるが、地元の本部町に関する課題が解けていない部分もあり、それを踏まえて、いかに自分の地域の事を知っていないのかを知り、ショックを受けていた。その他の生徒も同様である。それを受けて、授業の中では、ワークシートの裏面を活用しながら、本部高校がいかにふるさと納税の恩恵を受けているのか（例えば、本校では、町によりふるさと納税を原資にして町営塾<チャレンジ塾>を設置、運営してもらっている）等を

示し、ふるさと納税に関する理解とその有効的な活用方法に関して、それぞれアイデアを練る作業を進めてもらった。

その後、二学期あたりからは、より視野を広げて沖縄県の抱える課題、それもより身近な課題について考えること、そして、それをもとに自らの将来についても考えることができるような課題づくりを心がけた。例えば、上記に示したような「母乳バンク」の記事と県内で低体重児で生まれる乳児の割合が全国で１位である記事を関連づけながら、自分自身の将来に引きつけてどのような対策が必要か、また（政策面なども含めて）解決のためにどのような方策を考える作業を授業の中で探究課題として進めていった。

【朝学で取り組んでいる NIE 教材

ワークシートの例②－1（表面）】

□次の新聞記事を読んで、次のそれぞれの問いに答えなさい。

令和4年(2022年)11月24日（木曜日）琉球新報 朝刊 2社 1版 028ページ

「①」理解29% 親に民間調査

②児に提供、周知課題

問1 記事の見出し①に入る５文字を記事内から抜き出しなさい。
（　　）(5点)

問2 記事の社出し②に入る
３文字を記事内から抜き出しなさい。
（　　）(5点)

問3 記事内の③に入る3文字を記事内から抜き出しなさい。
（　　）(5点)

問4 記事内の囲み④「罹患率」とは、どのような意味だろうか。次から、その意味をえらびなさい。
ア. 病気でにくなってしまう率　イ. 病気から快復する率　ウ. 病気にかかってしまう率
エ. 病気が重症化してしまう率　オ. 複数の病気に同時にかかってしまう率
（　　）(5点)

問5 記事内の⑤に入るグラフを作成しなさい。(5点)

1

【朝学で取り組んでいる NIE 教材

ワークシートの例②-２（裏面）】

探究課題　（社会科の授業の中で取り扱います）

県内 低体重児11%

19年 40年超ほぼワースト

問1 上記の新聞記事の内容240文字以内で「わかりやすく」「記事全体の内容にふれながら」まとめなさい。
(10点)

問2 沖縄県の①低体重児の出生の割合の変化や②その要因、③改善に向けての方策について調べてまとめ、④あなた自身がどのようなことに気をつけたら良いかまとめなさい。(15点)

①

②

③

2

ワークシート課題では、思考・判断・表現の分野にも関わって、記事内の数値をもとに、グラフ化させる課題なども多く設定してみた。下記、例に示した生徒は、上手く書けているが、多くの生徒が、記事内の数値を記事に書かれている順番にグラフ化し、並置されているその他のグラフと兼ね合いで、それらの数値をどのように並べながらグラフ化すれば良いかまで気にかけることができない生徒も多くいた。そうした点に関しても、授業の中で、より分かりやすい、見やすい資料の作成の方法などまで広げながら指導・支援することを心がけた。

【生徒が取り組んだワークシートの例②】

□次の新聞記事を読んで、次のそれぞれの問いに答えなさい。

令和4年(2022年)11月24日（木曜日） 琉球新報 朝刊 2社 1版 026ページ

「 ① 」理解29% 親に民間調査

② 児に提供、周知課題

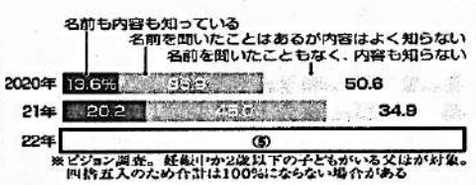
寄付された母乳（③ミルク）を低体重で生まれた赤ちゃんに提供する「母乳バンク」について、名称だけでなく内容も知っている親は29・7%だったことが23日、子ども用品メーカー「ピジョン」（東京）の調査で分かった。母乳は早産児の病気の罹患率（④）を抑える効果があり、同社担当者は「継続した周知が課題だ」としている。

調査は、妊娠中か2歳以下の子どもがいる父母にインターネットで7月に行い、1032人が回答。母乳バンクは、1500グラム未満で出生した早産児に母親が母乳をあげられない場合、ドナー登録した別の女性の母乳を新生児集中治療室（NICU）で与える仕組み。利用は医師が判断する。ピジョンによると、母乳バンクの拠点は県内に7500カ所以上あるが、日本は東京都内に2カ所のみ。同社はうち1カ所の運営を全面支援する。

調査で他の回答は、母乳バンクに関し「聞いたことはあるが内容はよく知らない」40・1%、「聞いたこともなく、内容も知らない」30・2%。一方で2年前の調査では、名前も内容も知っている人は13・6%で、浸透度は上がりつつある。

もし自身の子が1500グラム未満で生まれドナーミルクが必要と判断された場合、「かなり抵抗を感じる」「やや抵抗を感じる」が計49・0%を占めた。抵抗感は、名前も内容も知らない人ほど強く、内容まで知っている層は相対的に弱い傾向があった。担当者は「母親は出産直後に判断できないこともあり、父親も理解を深めてほしい」と話している。

母乳バンクについてどのくらい知っているか



※ピジョン調査。妊娠中か2歳以下の子どもがいる父母が対象。四捨五入のため合計は100%にならない場合がある

問1 記事の見出し ① に入る５文字を記事内から抜き出しなさい。

（ 母乳バンク ）(5点)

問2 記事の柱出し ② に入る

３文字を記事内から抜き出しなさい。

（ 低体重 ）(5点)

問3 記事内の③に入る3文字を記事内から抜き出しなさい。

（ ドナー ）(5点)

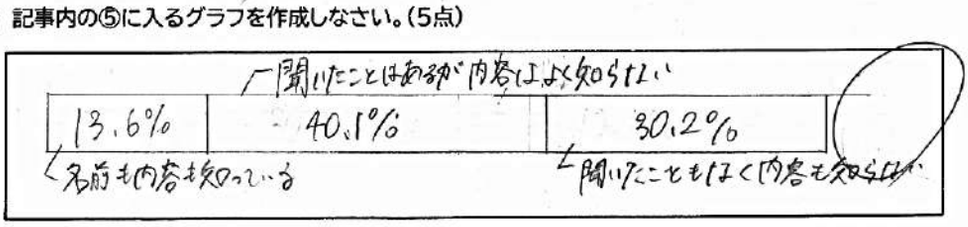
問4 記事内の囲み④「罹患率」とは、どのような意味だろうか。次から、その意味をえらびなさい。

ア. 病気で亡くなってしまう率　イ. 病気から快復する率　ウ. 病気にかかってしまう率

エ. 病気が重症化してしまう率　オ. 複数の病気に同時にかかってしまう率

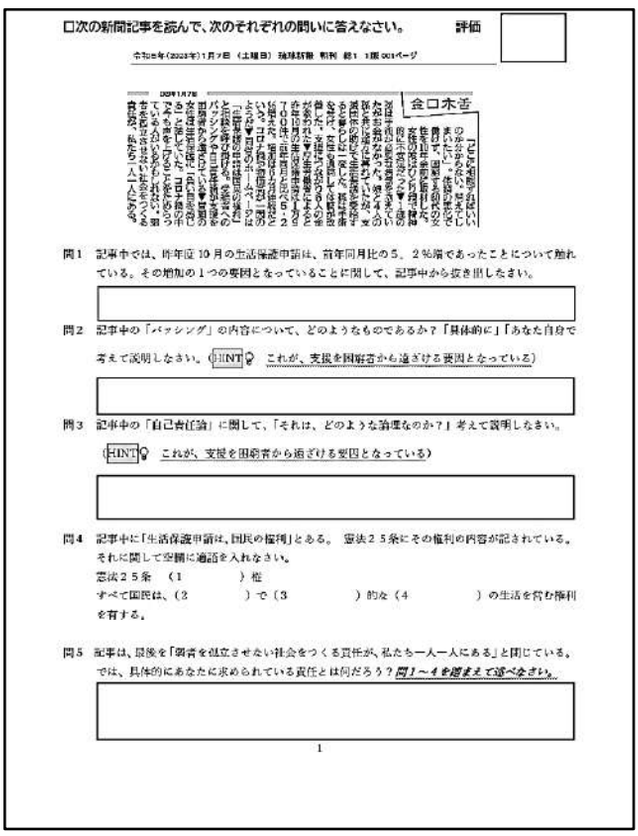
（ ウ ）(5点)

問5 記事内の⑤に入るグラフを作成しなさい。(5点)



1

【朝学で取り組んでいる NIE 教材
ワークシートの例③－1（表面）】



口次の新聞記事を読んで、次のそれぞれの問いに答えなさい。　評価

令和5年（2023年）1月7日（土曜日）琉球新聞　朝刊　総1　1版 001ページ

2023年1月7日

金口木舌

問1　記事中では、昨年度 10 月の生活保護申請は、前年同月比の５．２％増であったことについて触れている。その増加の１つの要因となっていることに関して、記事中から抜き出しなさい。

問2　記事中の「バッシング」の内容について、どのようなものであるか？「具体的に」「あなた自身で考えて説明しなさい。（HINT　これが、支援を困窮者から遠ざける要因となっている）

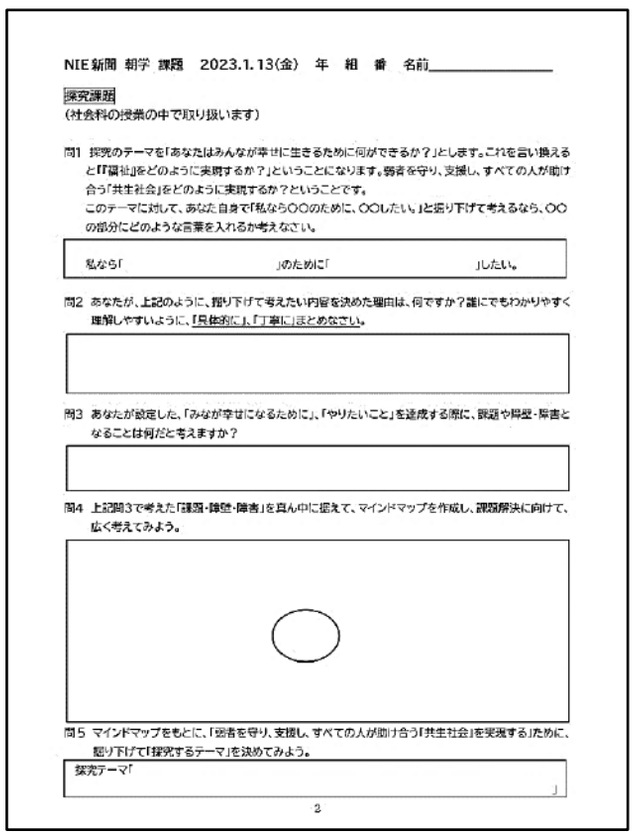
問3　記事中の「自己責任論」に関して、「それは、どのような論理なのか？」考えて説明しなさい。
（HINT　これが、支援を困窮者から遠ざける要因となっている）

問4　記事中に「生活保護申請は、国民の権利」とある。憲法２５条にその権利の内容が記されている。それに関して空欄に適語を入れなさい。
憲法２５条　（1　　）権
すべて国民は、（2　　）で（3　　）的な（4　　）の生活を営む権利を有する。

問5　記事は、最後を「弱者を孤立させない社会をつくる責任が、私たち一人一人にある」と閉じている。では、具体的にあなたに求められている責任とは何だろう？問1～4を踏まえて述べなさい。

1

【朝学で取り組んでいる NIE 教材
ワークシートの例③－1（裏面）】



NIE 新聞　朝学　課題　2023.1.13(金)　年　組　番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

探究課題
（社会科の授業の中で取り扱います）

問1　探究のテーマを「あなたはみんなが幸せに生きるために何ができるか？」とします。これを言い換えると「『福祉』をどのように実現するか？」ということになります。弱者を守り、支援し、すべての人が助け合う「共生社会」をどのように実現するか？ということです。
このテーマに対して、あなた自身で「私なら○○のために、○○したい。」と掘り下げて考えるなら、○○の部分にどのような言葉を入れるか考えなさい。

私なら「　　」のために「　　」したい。

問2　あなたが、上記のように、掘り下げて考えたい内容を決めた理由は、何ですか？誰にでもわかりやすく理解しやすいように、具体的に、丁寧にまとめなさい。

問3　あなたが設定した、「みんなが幸せになるために」、「やりたいこと」を達成する際に、課題や障壁・障害となることは何だと考えますか？

問4　上記問3で考えた「課題・障壁・障害」を真ん中に据えて、マインドマップを作成し、課題解決に向けて、広く考えてみよう。

問5　マインドマップをもとに、「弱者を守り、支援し、すべての人が助け合う「共生社会」を実現する」ために、掘り下げて「探究するテーマ」を決めてみよう。

探究テーマ「　　」

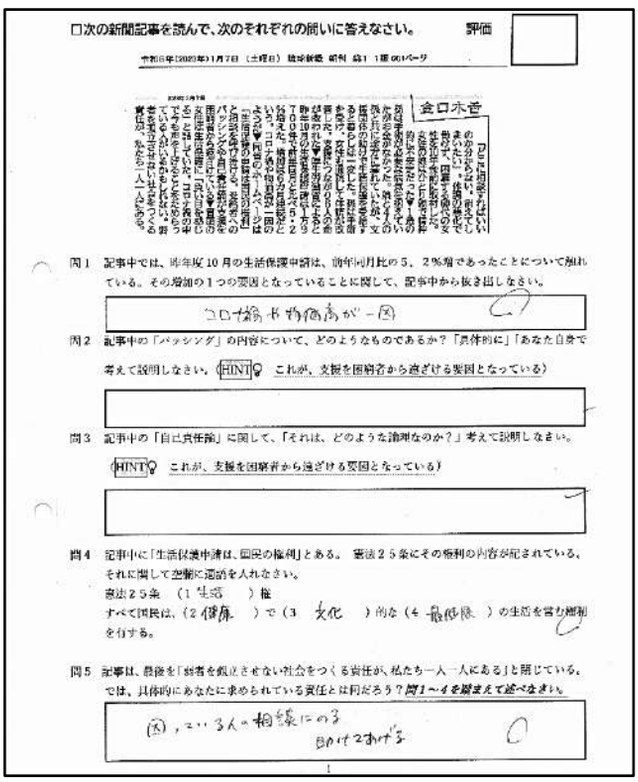
2

その後の課題は、語彙を広げていくことや記事の内容だけからは読み取ることのできない部分を想定して記述する課題に取り組ませることにした。同時に、教科で学習した内容との関連づけも意識しながら課題を作成することで、新聞記事の内容理解の深化から、教科内容の学びを深め、同時に、その後の探究活動へ繋げることで、学習に対する主体的な意識や態度、意欲を育てることへと繋げていくことを意識した教材づくりに努めた。

また、記事との関連から提示された探究のテーマをもとに、自らの興味・関心を掘り下げながら、マインドマップを作成し、それをもとに、自ら探究のテーマを設定する作業に何度か取り組ませることを意識した。多くの学校で探究活動を指導・支援する際に教師側の困り間としてあげられるのが、生徒が自らの興味・関心が何であるかを見定めること、そして、それをもとに社会的な問題や課題が何であるかを考え、自らの探究のテーマを設定することがなかなかできないということである。本校においても現状は変わらず、そうした生徒たちが探究活動に向き合う、取り組んでいく際の基盤となるテーマ設定の方法に関して習熟できるようになることも意識した教材づくりを心がけている。

目の前の教材の記述をこえて、自分で考えるということに、なかなかなれておらず、その作業を不得手にする生徒は、まだまだ多い。それは、上記に示したワークシート③－１、③-２に見られるよう

【生徒が取り組んだワークシートの例③－1】


□次の新聞記事を読んで、次のそれぞれの問いに答えなさい。　評価

令和5年(2023年)1月7日（土曜日）琉球新報 朝刊 総1 1版 001ページ

金口木舌

問１　記事中では、昨年度 10 月の生活保護申請は、前年同月比の５．２％増であったことについて触れている。その増加の１つの要因となっていることに関して、記事中から抜き出しなさい。

コロナ禍や物価高が－図

問２　記事中の「バッシング」の内容について、どのようなものであるか？「具体的に」「あなた自身で考えて説明しなさい。（HINT　これが、支援を困窮者から遠ざける要因となっている）

問３　記事中の「自己責任論」に関して、「それは、どのような論理なのか？」考えて説明しなさい。

（HINT　これが、支援を困窮者から遠ざける要因となっている）

問４　記事中に「生活保護申請は、国民の権利」とある。憲法２５条にその権利の内容が記されている。それに関して空欄に適語を入れなさい。

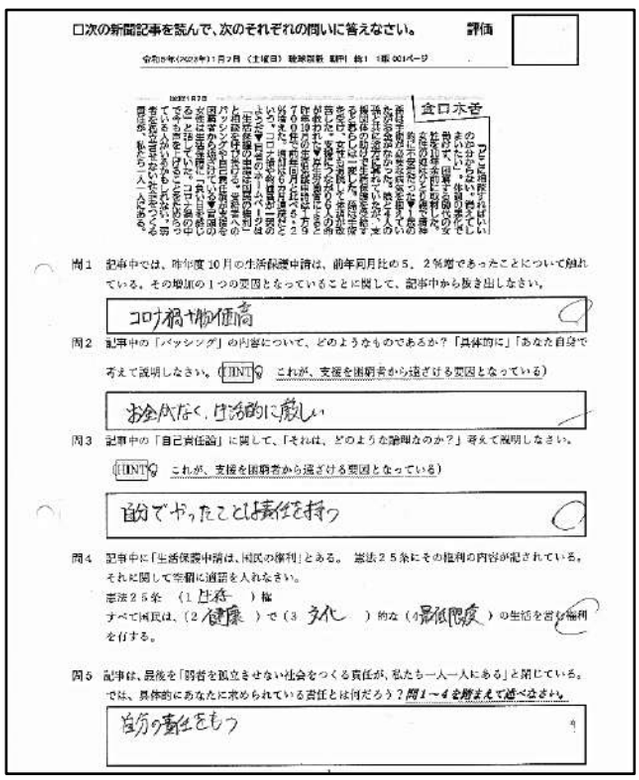
憲法２５条　（１生活　）権

すべて国民は、（２健康　）で（３文化　）的な（４最低限　）の生活を営む権利を有する。

問５　記事は、最後を「弱者を孤立させない社会をつくる責任が、私たち一人一人にある」と閉じている。では、具体的にあなたに求められている責任とは何だろう？問１～４を踏まえて述べなさい。

（図），こまっている人を相談にのる
助けてあげる

【生徒が取り組んだワークシートの例③－2】


□次の新聞記事を読んで、次のそれぞれの問いに答えなさい。　評価

令和5年(2023年)1月7日（土曜日）琉球新報 朝刊 総1 1版 001ページ

金口木舌

問１　記事中では、昨年度 10 月の生活保護申請は、前年同月比の５．２％増であったことについて触れている。その増加の１つの要因となっていることに関して、記事中から抜き出しなさい。

コロナ禍や物価高

問２　記事中の「バッシング」の内容について、どのようなものであるか？「具体的に」「あなた自身で考えて説明しなさい。（HINT　これが、支援を困窮者から遠ざける要因となっている）

お金がなく、生活的に厳しい

問３　記事中の「自己責任論」に関して、「それは、どのような論理なのか？」考えて説明しなさい。

（HINT　これが、支援を困窮者から遠ざける要因となっている）

自分でやったことに責任を持つ

問４　記事中に「生活保護申請は、国民の権利」とある。憲法２５条にその権利の内容が記されている。それに関して空欄に適語を入れなさい。

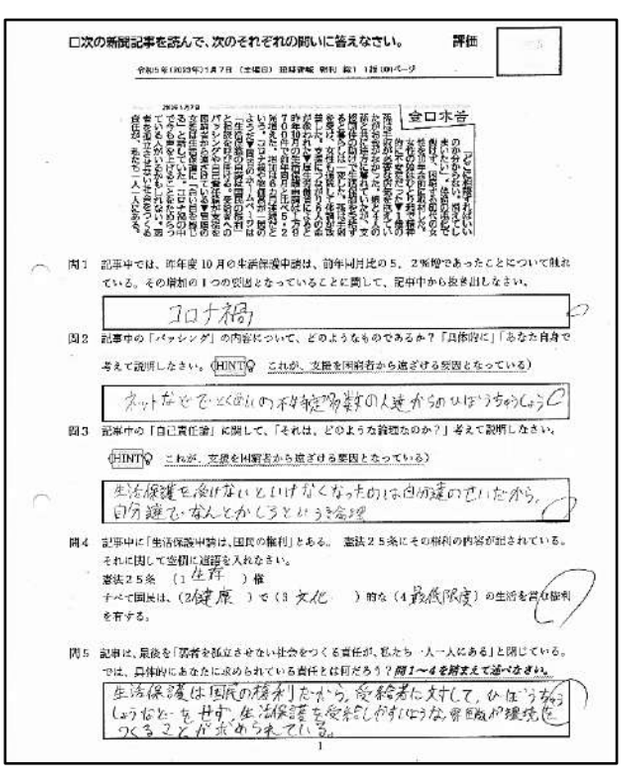
憲法２５条　（１生存　）権

すべて国民は、（２健康　）で（３文化　）的な（４最低限度　）の生活を営む権利を有する。

問５　記事は、最後を「弱者を孤立させない社会をつくる責任が、私たち一人一人にある」と閉じている。では、具体的にあなたに求められている責任とは何だろう？問１～４を踏まえて述べなさい。

自分の責任をもつ

【生徒が取り組んだワークシートの例③－3】


□次の新聞記事を読んで、次のそれぞれの問いに答えなさい。　評価

令和5年(2023年)1月7日（土曜日）琉球新報 朝刊 総1 1版 001ページ

金口木舌

問１　記事中では、昨年度 10 月の生活保護申請は、前年同月比の５．２％増であったことについて触れている。その増加の１つの要因となっていることに関して、記事中から抜き出しなさい。

コロナ禍

問２　記事中の「バッシング」の内容について、どのようなものであるか？「具体的に」「あなた自身で考えて説明しなさい。（HINT　これが、支援を困窮者から遠ざける要因となっている）

ネットなどで、よくある、の不特定多数の人達からのひぼうちゅうしょう

問３　記事中の「自己責任論」に関して、「それは、どのような論理なのか？」考えて説明しなさい。

（HINT　これが、支援を困窮者から遠ざける要因となっている）

生活保護を受けないといけなくなったのは自分達のせいだから、自分達でなんとかしろという論理

問４　記事中に「生活保護申請は、国民の権利」とある。憲法２５条にその権利の内容が記されている。それに関して空欄に適語を入れなさい。

憲法２５条　（１生存　）権

すべて国民は、（２健康　）で（３文化　）的な（４最低限度）の生活を営む権利を有する。

問５　記事は、最後を「弱者を孤立させない社会をつくる責任が、私たち一人一人にある」と閉じている。では、具体的にあなたに求められている責任とは何だろう？問１～４を踏まえて述べなさい。

生活保護は国民の権利だから、受給者に対して、ひぼうちゅうしょうなどをせず、生活保護を受給しやすいような、雰囲気や環境をつくることが求められている。

に、記述の内容が短文にとどまり、あまりにも簡潔である例にも見て取れる。しかし、その中でも数人の生徒がだいぶ力を付けてきたことも事実であり、③－３のワークに見られるように、自分事としてしっかり事象を引き取り、記述できる生徒が徐々にではあるが増えてきたのは、この２年間の取り組みの成果ともいえよう。

また、すべてが本実践による成果とは言えないが、最初に示した「学びの基礎診断テスト」（Benesse の基礎力診断テスト）における GTZ 指標において、国語の GTZ 指標が、４月当初の第１回テストと９月に実施した第２回テストを比較した場合、３年生が１回目：D２−→C３−と３ランクアップ、２年生が、１回目：D２+→D１−と１ランクアップ、１年生が１回目：D１−→D１+と１ランクアップしているところなどからも、少なからずその成果が出ていると感じているところである。

以上の結果から見て、全体を通して、１０分間という短時間でもNIE教材を活用した学習が効果を生み出す可能性があると同時に、その課題をもとに教科の学びに発展的に繋げ学びを深めていくことで、より高い効果を生み出すことができることを改めて実感しているところである。

（２）地歴・公民科と数学科の教科等横断的な取り組み　　【報告者：小松真澄（数学科）】

１．はじめに

この取り組みは、報告者が沖縄県教育センターの長期研修の研究内容として取り組んでいる「自ら考える力を育む『データの分析』の授業づくり―ＰＰＤＡＣサイクルを活用した教科横断的な取り組みを通して―」の一環として行った。

２．対象生徒：２年情報系列（１２名）

３．目　　的

新聞の社説を読むことは、読み書きに弱さを抱える本校の生徒にとって、非常に難易度の高いことであり、生徒自身も苦手意識を感じていると想定できる。そこで社説の１文１文を事実と筆者の意見に分類する作業からスタートすることで、そこに楽しさを見出させ、読み進めやすくしていくことから始めることにした。そして、その延長線上に、興味・関心をもつ事柄に注目させ、その事柄に対して「ＰＰＤＡＣサイクル」を活用して考察することで生徒の「自ら考える力」を育んでいく事を目的に実践を構想した。

４．内　　容

①生徒が社説を読みやすくするための工夫

社説の文章中の述語に注目して、別紙「事実と判断・意見を区別しよう」（図１）を作成した。別紙を参考にしながら、事実と意見を分けて読み進めていくように意識させた。

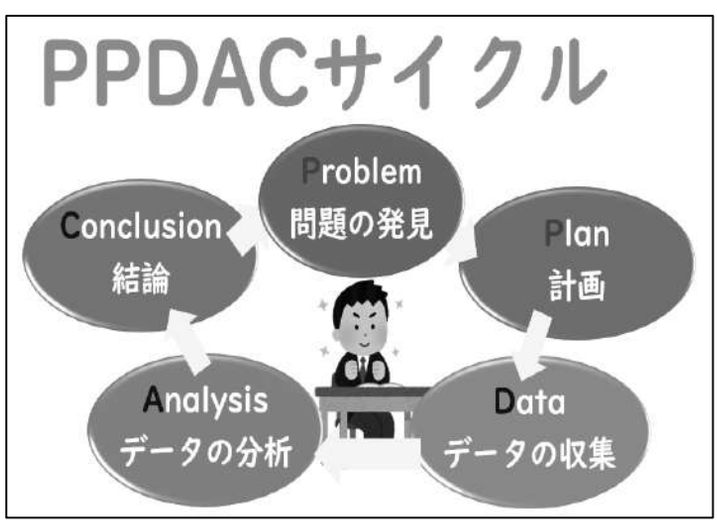


図２　ＰＰＤＡＣサイクル

②PPDAC サイクルとは

「Problem：問題」、「Plan：計画」「Data：データの収集」、「Analysis：データの分析」、「Conclusion：結論」を表す。

PPDAC サイクルは、統計的探究プロセスの１つであり、データを利用した問題解決の「手段」となる。

③授業の流れ・生徒の取り組み

現代社会（１時間目）と基本数学（２時間目）は連続授業で行った。現代社会で各生徒が毎日新聞社の５つの社説から１つを選び要旨をまとめる。そして、興味・関心をもつ事柄に注目し、その中から調べてみたい事柄を１つ取り上げる。それについて、基本数学では PPDAC サイクルを活用して、関連するデータを収集・分析し、得た結論を自分の言葉で発表を行う。

事実と判断・意見を区別しよう

社説は新聞社としての意見を述べる「論説」です。「意見」に注目すると、要約がしやすくなるでしょう。社説等でよく使われる判断や意見を表す語を下の表にまとめました。事実を示してから意見や判断を述べるパターンが多いことも参考になります。

論説を構成する事実と意見（判断）の例

客観的（事実）	主観的（判断や意見）		
	推測的判断	判断・意見・要望	状態・理由・評価
～である。	おそらく～	～思う。	（形容詞・形容動詞）
～であった。	～と考えられる。	～考える。	～高い。
～を行った。	～と推測できる。	～考えられる。	～良い。
～があった。	～と推測される。	～かどうか分からない。	～静かだ。
～した。	～と推察する。	～ではないだろうか。	～悪質だ。
～だ（断定の判断）。	～とみられる		～が元気だ。
確実性が高い	～かもしれない	～べきである。	～が肝要だ。
明らかに～である。	～だろう。	～べきだ。	
～明白だ。	～であろう	～必要がある。	（原因・理由・根拠）
～明らかである。	～であるはずだ	～欠かせない。	～からだ。
～確実である。	～可能性がある。	～期待する。	～からである
～間違いない。	～だろうか。	～期待したい。	～のである。
～に違いない。	～恐れがある。	～願っている。	～のだ。
		～てほしい。	
～可能性が高い。		～たい。	（評価）
～の疑いが強い。		～が求められる。	～を評価できる。
	※～だ。（断定の判断：は何をどう判断したか考えること）	～ねばならない。	～優れている。
～といえる。（根拠に注意すること）		～してはいけない。	～は誤りだ。
		～うではないか。	（～といえる）※

※表が示す客観性は参考程度です。必ず、前後に示された根拠を手がかりにしてください。

１　事実と意見・判断に分けよう（意見や判断に蛍光ペンでマーキングする）。

２　意見に注目して段落に分け、伝えたいことを要約しよう。

	伝えたいことのポイント・要約
新聞	・ ・ ・ ・ ・

図１　事実と判断・意見を区別しよう

時間	教科	生徒の活動	指導上の留意点
1	現代社会	○用意した５つの社説の見出しの一覧を生徒に提示する。 ○見出しを見て、読みたいと思った社説を選び、なぜ選んだかの理由をまとめる。 ○選んだ見出しの社説を受け取る。各社説を段落にわけ、それぞれの段落の要旨を１行程度にまとめ、それをもとに社説の要旨をまとめる。	※その際に、「事実と判断・意見を区別しよう」（別紙）を活用しながら、事実と意見を蛍光ペンで線をひきながら読むように促す。
２～３	基本数学	○社説ごとにグループになり、要旨からさらに調べたいこと（課題）を設定する。 ○PPDAC サイクルを活用して、スマートフォンや iPad 等を利用してデータの収集・分析を行う。 ○分析したことから結論を出し、一連の流れをまとめる。 ○まとめたことについて、各グループで発表する。 ○それぞれ質疑応答や聞いた後で自己の意見や考え方を相手に述べる。 ○振り返りを行う。	・PPDAC サイクルを活用するために適切な事柄かどうかを意識させて選択させる。 ・PPDAC サイクルの流れに沿ってまとめるよう促す。

５．NIE 実践を終えて

PPDACＣサイクルを活用した問題解決活動において、最初の「Ｐ：問題」につながるテーマを新聞の社説から選ぶことで、時事問題に対する生徒の興味・関心を促すきっかけになった。タイムリーな話題に対して積極的に取り組む様子が見られた。現代社会では、事実と意見を区別しながら社説に蛍光ペンで線を引くことでスムーズに読み進めることができた。そして基本数学の時間では、気になるキーワードについてインターネットを検索して、集めた情報からグラフを作成したり、グループで話し合ったりして結論を導く様子が伺えた。発表ではグループごとに、選んだ社説についての要旨と PPDAC サイクルを活用して考察した過程について説明することができた。

初めての取り組みではあったが、生徒の意欲的な様子が見られたことからも、今後も他社の社説を使用したり、考察時間を延ばしたりと工夫を加えていきたい。

【実践で使用したワークシート】

現代社会　NIE 課題【社説を読み込もう】　２年1組（　　）　氏名（　　）

◇社説を読み込み、まとめ、意見交流しよう。それをもとに PPDCA サイクルをもとに考察を深めていこう。
今日のテーマ：社説を読んで考える

【Step１】（３分）
次は、毎日新聞の社説の見出しをそれぞれ抜き出したものです。見出しを見て、読みたいなーと思った順に順位付けしてみましょう。

順位づけ	社説の見出し
	「パパ育休」スタート　企業や社会変えなければ
	観光促進策とコロナ　欠かせぬ第８波への備え
	原発の運転期間延長　なし崩しの変更は危うい
	ウクライナ進行　盾の「報復」攻撃　どれだけ実行されるのか
	キューバ危機から 60 年　「核戦争の恐怖」を教訓に

【Step２】（５分）
なぜ、そのような順位づけになったのでしょうか？特に１番に読みたいと思った理由を具体的に、あなたのこれまでの興味・関心や日常生活との関連から説明して下さい。

【Step３】（１０分）
別紙の「事実と判断・意見を区別しよう」も参考にし「判断・意見」にも着目しながら、「各段落をできるだけ簡潔に１～２行程度でまとめることができるよう」順番にマーク（蛍光ペン）or 線を引いて（赤ペン）みよう。

【Step４】（１０分）
順番にマークした部分をもとにしながら、社説の要旨（内容の大まかなまとめ）を簡潔につくってみよう。

1

現代社会　NIE 課題【社説を読み込もう】　２年1組（　　）　氏名（　　）

【Step５】（１０分）
（１）あなたと選ぶ社説を選んだ人とペアを作って下さい。（２）ペアになった人に、①あなたがその社説を１位とした理由を説明してください。②つぎに、社説の要旨を説明してください。③最後に、ペアの人に感想を書いてもらってください。

※下の欄には、①に、あなたのペアがその社説を１位に選んだ理由をメモしてください。②には、説明を受けた、社説の要旨の内容ををおおまかにメモしてください。

①

②

【Step６】（時間があれば・・・）
本時の学習を通して、①自分自身で考えたこと、感じたこと、②さらに調べて見たいと思ったこと、③ペアと活動してみて考えたことや感じたこと、など自由に書いて下さい。

初めての体験で、楽しかったし、大変だったと思います。
お疲れ様でした。M(_ _)m

2

【実践で使用した社説記事】

2022.10.10

「パパ育休」スタート　企業や社会変えなければ

子どもが生まれた直後の男性向け「産後パパ育休」制度が、今月から始まった。

これまでも休むことはできたが、分割取得が可能になった。パパ育休と、子どもが1歳になるまでの通常の育休を合わせ、最大4回に分けて取れる。

働き方に合わせ柔軟に取得できるようにするのが狙いだ。出産直後の女性の心身の負担を減らし、男性も育児を担う社会の実現に向けた一歩にしたい。

男性の育休は思うように広がっていない。2021年度は13・97%にとどまり、女性の85・1%と比べ極めて低い。

背景には育休を言い出しにくい職場の環境がある。厚生労働省の調査によると、取得しようとして上司などから嫌がらせを受けた男性は4人に1人に上る。

今年4月に施行された改正育児・介護休業法は、妊娠・出産を申し出た社員に対し、取得の意向を確認するよう企業に義務づけた。来春からは1000人超の企業は取得率を公表する。

企業の風土改善や管理職の意識改革が進むことを期待したい。

しかし、課題は多い。

制度の恩恵を受けられない人がいる。取得条件を満たさない一部の非正規社員のほか、自営やフリーランスは対象にもなっていない。子育てと仕事が両立しやすくなるよう対象者の拡大を検討すべきだ。

家計の収入が減るという問題もある。育児休業給付などで賄われるのは給与の8割程度にとどまる。半年間を超えた場合は、さらに減る。

余力の少ない中小企業は、育休期間中の代替要員を確保することが難しいという事情がある。

経済協力開発機構（OECD）加盟国の中で、日本の男性の育児・家事時間は最低水準だ。

だが、若い世代には意識の変化がうかがえる。男女とも「仕事と育児の両立」を望む人が増えている。内閣府の調査では、30代までの男性のうち、配偶者と家事・育児を平等に分担したいと考える割合は7割に上った。

こうした声に応えるには、長時間労働が常態化している現状を見直し、ワーク・ライフ・バランスを重視していくことが必要だ。

2022.10.10

2022.10.12

観光促進策とコロナ　欠かせぬ第8波への備え

政府が、新型コロナウイルスの水際対策を大幅に緩和した。観光振興が狙いだが、人の移動が増えれば感染のリスクは高まる。岸田文雄首相は、感染対策にも万全を期さなければならない。

1日あたりの入国者数を5万人までとする上限規制を撤廃した。海外からのビザなし渡航と個人旅行も解禁した。コロナ流行前とほぼ同じ受け入れ態勢となった。

他の主要国では水際対策の緩和で旅行が活発化しているが、訪日する外国人客は、年間3000万人を超えていたコロナ前から6割以上も落ち込んでいる。

新規感染者数が減少傾向にある中で、入国規制の見直しを求める声が出ていた。首相は、円安を追い風にして、インバウンド需要を喚起すると説明している。

国内観光も後押しする。都道府県ごとの旅行割引券「県民割」を全国に拡大する「全国旅行支援」と、個人の入場料を割り引く「イベント割」が始まった。

問題なのは、どのような科学的根拠に基づいて一連の措置を取ったのか、具体的に説明されていないことだ。社会経済活動と感染防止を両立するための明確な戦略も示されていない。

今冬には、感染の「第8波」や季節性インフルエンザとの同時流行が懸念されている。

オミクロン株に対応するワクチン接種の加速や、医療体制の確保などの備えが不可欠だ。重症化しやすい変異株の発生も警戒しなければならない。

世界平和統一家庭連合（旧統一教会）や「国葬」などの問題を受け、岸田内閣の支持率は急落している。景気回復への取り組みをアピールし、政権浮揚につなげる思惑もあるのだろう。

だが、コロナ再拡大のリスクを語らないまま、経済効果ばかりを強調するのは無責任である。

2020年に実施された旅行需要喚起策「GoToトラベル」を巡っては、当時の菅義偉首相による事業停止の判断が後手に回り、「感染拡大を助長した」との批判を浴びた。

同じ失敗を繰り返すことは許されない。岸田首相は、今後の感染状況次第では、社会経済活動のブレーキを踏むことをためらってはならない。

2022.10.12

社説　ronsetsu@mainichi.co.jp

2022.10.12

ウクライナ侵攻

どれだけ蛮行重ねるのか

露の「報復」攻撃

国際法を無視して蛮行を重ねるプーチン露大統領に、激しい憤りを禁じ得ない。

ロシア軍がウクライナの約20都市をミサイルや無人機などで攻撃し、民間人など100人以上が死傷した。

軍事施設やインフラを狙ったと主張しているが、ウクライナ側によると、住宅や教育施設などが破壊された。非戦闘員への攻撃は国際人道法に違反している。

マクロン仏大統領は、民間人を意図的に狙った攻撃だと位置づけ、「この戦争の本質を根底から変える」と指摘した。

バイデン米大統領はロシアによる戦争犯罪の責任を追及すると表明した。各国首脳の非難は当然だ。事態をエスカレートさせた責任はロシア側にある。

きっかけはロシアとウクライナ領クリミアをつなぐ大橋で起きた爆発だった。プーチン氏は「ウクライナの特務機関によるテロ」と主張し、それに対応する攻撃だと正当化している。

爆発がウクライナによる攻撃だったとしても、ロシアの「報復」が許されるわけではない。

ロシアは2014年、クリミアを一方的に「併合」し、18年に大橋を建設した。

しかし、国際社会の圧倒的多数は、クリミア併合を認めていない。橋の爆発を自国領への攻撃とする、ロシアの主張には根拠がない。

プーチン氏の自分勝手な考えで、罪のない市民が犠牲になっている。あまりに理不尽で、度を越した「報復」と言うほかない。

ウクライナの反転攻勢でロシア軍は苦戦を強いられ、プーチン氏の予備役動員に反発が起きている。戦争反対を叫ぶ市民の声にこそ耳を傾けるべきだ。

ロシアは先日、ウクライナ東・南部4州を一方的に併合した。国連総会は近く、これを非難する決議案を採決する。

国際社会は、これまでロシアに一定の理解を示してきたインドや中国などを取り込んで、対露包囲網を強化する必要がある。

プーチン氏は核兵器の使用さえ示唆し、世界は国際秩序崩壊の瀬戸際にある。今すぐ、ロシアを止めるべきだ。各国が危機感を共有しなければ、取り返しのつかない破滅を招きかねない。

2022.10.13

原発の運転期間延長

なし崩しの変更は危うい

岸田文雄政権が、原発の運転期間を「原則40年」とするルールを撤廃する検討を始めた。

明記された法律を所管する原子力規制委員会が容認した。運転期間をどう定めるかは今後、電力の安定供給を担う経済産業省に委ねられる。

40年ルールは、東京電力福島第1原発の事故後に導入された。これにより、「原発の寿命は40年」という認識が定着した。

深刻な事故の反省に立ち、古い原発から順に運転を止めて原子力に依存しない社会を目指すとの意思表示でもあった。

本来、国民的な合意を必要とする方針転換のはずだ。安全性に関わる法改正を推進側の経産省に任せ、なし崩しに原発回帰を進めるようなことは許されない。原発への依存度を低減していくと明記した政府のエネルギー基本計画とも矛盾する。

首相は8月、原発の新増設や再稼働を進める方針を唐突に打ち出した。電力の安定供給と脱炭素化の両立には活用が欠かせないとの考えに基づく。

その際、足かせとなるのが運転期間だ。国内の原発の多くは運転開始から30年が経過しており、40年ルールを厳格に適用すれば、2030年までに10基以上が廃炉を迫られる。

費用対効果の面から延命を望む電力業界や経産省は「40年は一つの目安であり、明確な科学的根拠はない」と主張する。

だが、老朽原発の事故リスクに関するデータは限られる。事故後、巨額の安全対策費が必要となり採算が取れないことを理由に、11基の廃炉が決まっている。

規制委の山中伸介委員長は「運転期間がどうなろうと厳正な規制ができる仕組みにする」と述べた。だが、規制の実効性を保つための知見や審査体制は十分なのか。

ルールを変更し、年数にとらわれずに原発を動かせるようにしたとしても、再稼働がスムーズに進むわけではない。立地する自治体には、事故に加えて住民の避難や情報公開に対する不安が根強い。

求められるのは、福島の教訓を生かしたエネルギー政策である。

国民の納得を得ないまま政治判断で押し切るようでは、原発不信が高まるばかりだ。

2022.10.13

社説　ronsetsu@mainichi.co.jp

2022.10.15

キューバ危機から60年

「核戦争の恐怖」を教訓に

東西冷戦期の1962年10月に起きたキューバ危機は、世界を核戦争の瀬戸際に追い込んだ。米国、ソ連ともに核兵器の使用を視野に入れ、世界が破滅の恐怖におびえた戦後最大の危機だった。

60年後の今、ウクライナに侵攻したロシアが「核の脅し」を米欧に仕掛け、世界を再び不安に陥れている。キューバ危機以来、最も危険な状況である。当時の教訓をどう生かすか。

発端はソ連が、米国に近接するキューバで核ミサイル基地の建設を始めたことだ。米国は搬入を阻止するために海上封鎖に踏み切り、攻撃を受ければ全面報復すると宣言した。2週間にわたって続いた緊張の末、ソ連がミサイルの撤去を決め、決着に向かった。

背景には、戦争になれば核戦力で劣るソ連が大損害を受けるとのフルシチョフ首相の現実的な判断があった。当時、秘密裏に核ミサイルを配備し、運用可能な状態だったが、大規模な反撃を恐れたという。国際社会から孤立することも避けたかったとされる。

米国のケネディ大統領が大規模攻撃を迫る軍部を抑え、水面下で外交を進めたことも事態打開に貢献した。フルシチョフ氏と何度も書簡を交わし、最後にはソ連を様的とするミサイルをトルコから撤去するという極秘の提案をした。

状況は60年前と同じではない。当時は全面核戦争が想定されたが、現在は小型の戦術核が使用される可能性が大きいとされる。

しかし、小型核であっても破壊力は強大だ。地域一帯が荒廃し、放射性物質が拡散して甚大な人道被害をもたらす。「使える核」と称して脅しをかけることは、保有国のエゴに他ならない。

一度でも使われれば国際社会が積み上げてきた核不拡散と核軍縮の努力も水泡に帰す。世界から非難を浴び、孤立を深めるだけだ。

ロシアの侵攻は明確な国際法違反であり、多くの民間人が犠牲になっている。ウクライナは抗戦を続けている。それでも米国が出口を模索し、停戦に向けた交渉を主導することはできるはずだ。

原爆が投下された広島・長崎の惨劇を世界の指導者が心にとどめ、外交努力を尽くす必要がある。核兵器が使われることが二度とあってはならない。

【社説の読み込みで使用した
生徒ワークシートの取り組み例①】

◇社説を読み込み、まとめ、意見交換しよう。それをもとに PPDCA サイクルをもとに考察を深めていこう。
今日のテーマ：社説を読んで考える

【Step 1】（3分）
次は、毎日新聞の社説の見出しをそれぞれ抜き出したものです。見出しを見て、読みたいなーと思った順に順位付けしてみましょう。

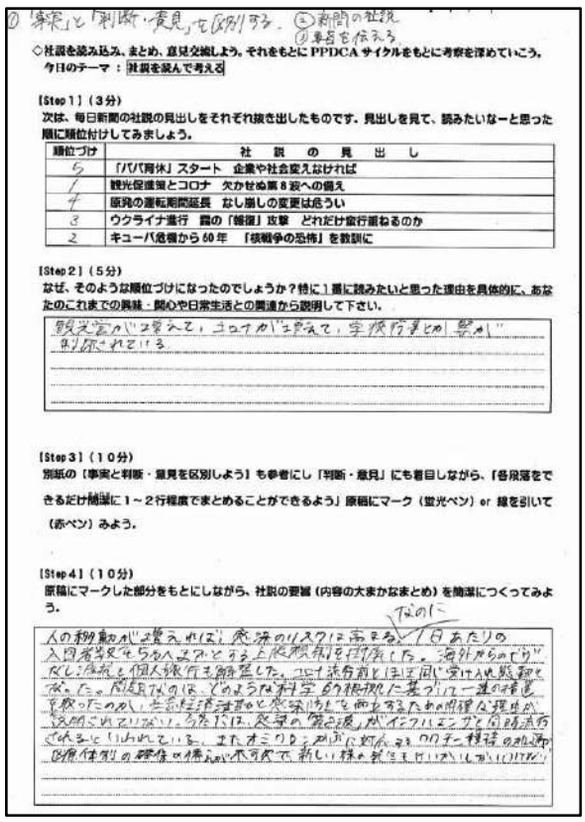
順位づけ	社説の見出し
1	「パパ育休」スタート　企業や社会変えなければ
2	観光促進策とコロナ　欠かせぬ第８波への備え
5	原発の運転期間延長　なし崩しの変更は危うい
3	ウクライナ進行　露の「報復」攻撃　どれだけ続行重ねるのか
4	キューバ危機から 60 年　「核戦争の恐怖」を教訓に

【Step 2】（5分）
なぜ、そのような順位づけになったのでしょうか？特に１番に読みたいと思った理由を具体的に、あなたのこれまでの興味・関心や日常生活との関連から説明して下さい。

【Step 3】（10分）
別紙の【事実と判断・意見を区別しよう】も参考にし「判断・意見」にも着目しながら、「各段落をできるだけ簡潔に１～２行程度でまとめることができるよう」原稿にマーク（蛍光ペン）or 線を引いて（赤ペン）みよう。

【Step 4】（10分）
原稿にマークした部分をもとにしながら、社説の要旨（内容の大まかなまとめ）を簡潔につくってみよう。

【社説の読み込みで使用した
生徒ワークシートの取り組み例②】


◇社説を読み込み、まとめ、意見交換しよう。それをもとに PPDCA サイクルをもとに考察を深めていこう。
今日のテーマ：社説を読んで考える

【Step 1】（3分）
次は、毎日新聞の社説の見出しをそれぞれ抜き出したものです。見出しを見て、読みたいなーと思った順に順位付けしてみましょう。

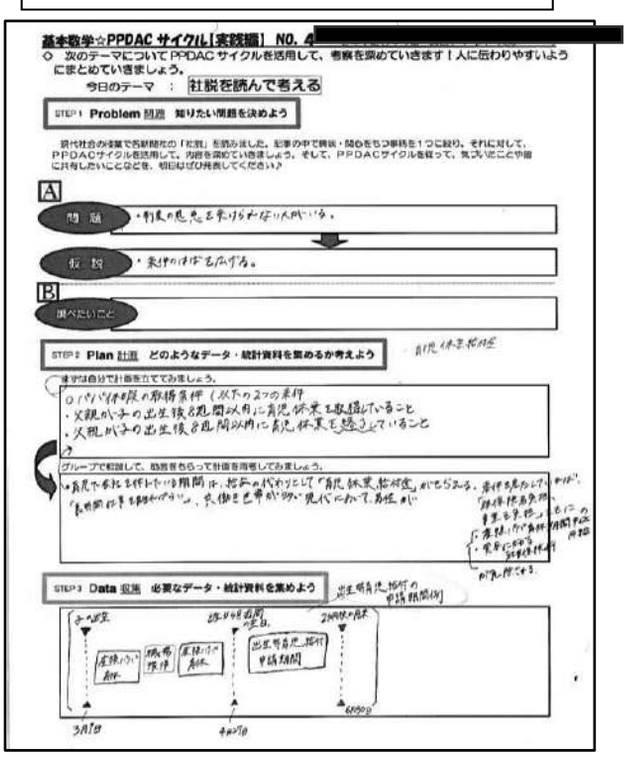
順位づけ	社説の見出し
5	「パパ育休」スタート　企業や社会変えなければ
1	観光促進策とコロナ　欠かせぬ第８波への備え
4	原発の運転期間延長　なし崩しの変更は危うい
3	ウクライナ進行　露の「報復」攻撃　どれだけ続行重ねるのか
2	キューバ危機から 60 年　「核戦争の恐怖」を教訓に

【Step 2】（5分）
なぜ、そのような順位づけになったのでしょうか？特に１番に読みたいと思った理由を具体的に、あなたのこれまでの興味・関心や日常生活との関連から説明して下さい。

【Step 3】（10分）
別紙の【事実と判断・意見を区別しよう】も参考にし「判断・意見」にも着目しながら、「各段落をできるだけ簡潔に１～２行程度でまとめることができるよう」原稿にマーク（蛍光ペン）or 線を引いて（赤ペン）みよう。

【Step 4】（10分）
原稿にマークした部分をもとにしながら、社説の要旨（内容の大まかなまとめ）を簡潔につくってみよう。

【PPDAC サイクルで使用した
生徒ワークシートの取り組み例①】


基本数学☆PPDAC サイクル【実践編】 NO. 4 [redacted]
◇ 次のテーマについて PPDAC サイクルを活用して、考察を深めていきます！人に伝わりやすいようにまとめていきましょう。
今日のテーマ ： 社説を読んで考える

STEP 1 Problem 問題　知りたい問題を決めよう

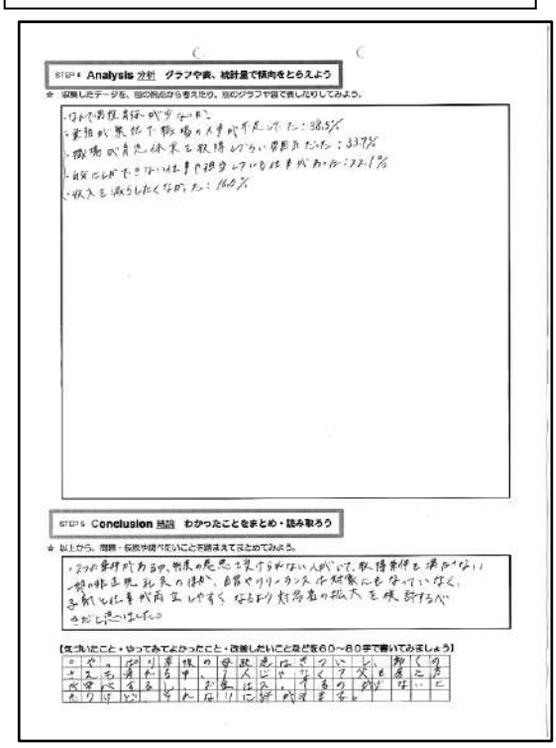
A
問題
・判断の思考を受けられない人がいる。
仮説
・実行のはげましになる。

B
調べたいこと

STEP 2 Plan 計画　どのようなデータ・統計資料を集めるか考えよう

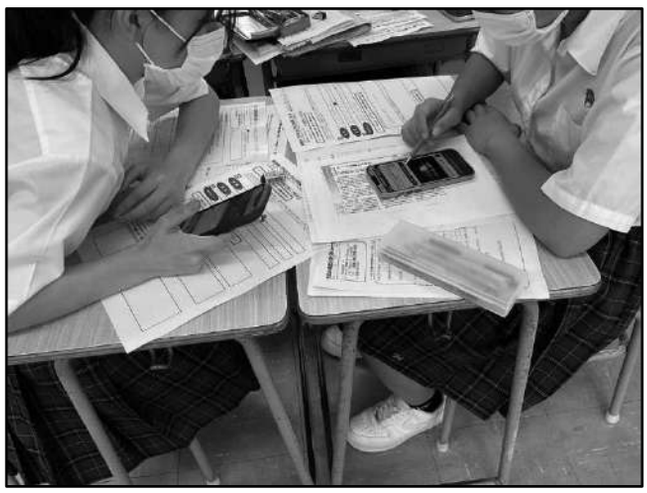
STEP 3 Data 収集　必要なデータ・統計資料を集めよう

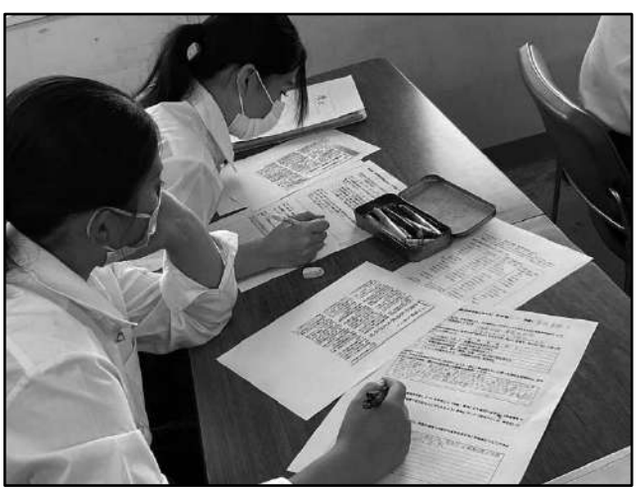
【PPDAC サイクルで使用した
生徒ワークシートの取り組み例②】

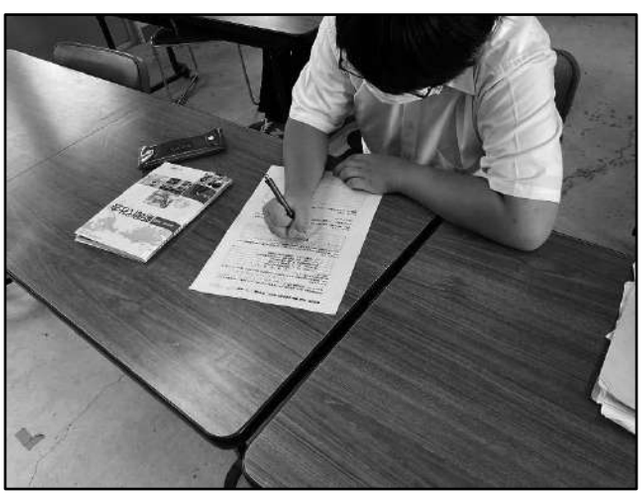

STEP 4 Analysis 分析　グラフや表、統計量で傾向をとらえよう
・収入を減らしたくなかった：16.0%

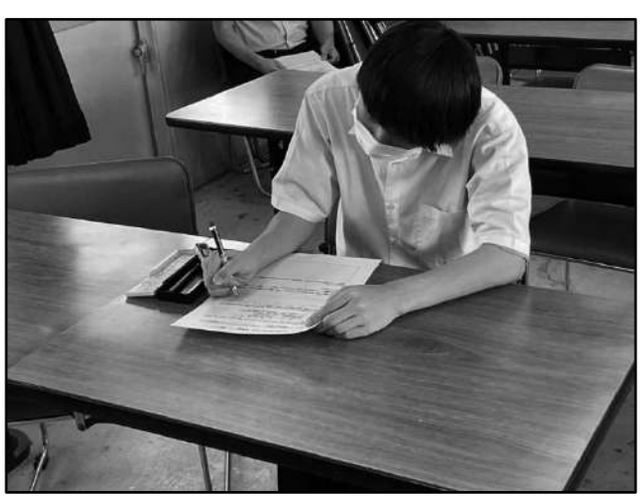
STEP 5 Conclusion 結論　わかったことをまとめ・読み取ろう

【生徒の活動の様子】









（３）福祉の授業での取り組み（報告者：仲松　聖：福祉科）

『自分ごと』として考えてみよう～支援する側とされる側　互いの関係性づくりで必要なこと

本校、保育福祉系列では、『介護職員初任者研修養成』を実施している。介護に携わる専門職として、その技術や知識の土台となる重要な基本理念である「基本的人権」「個人の尊厳」について、新聞記事を教材とし『自分ごと』として考え、発展的な学びを深める機会とした。

２．対　象・実践方法

（１）対象：保育・福祉系列２学年　４名

（２）実践方法

①学習プリント１．２．３の取り組み

②新聞記事から考えてみよう１『ひきこもり社会の理解を』・新聞記事の読み聞かせ

※新聞教材（NIE 教材は、地歴公民科の職員に作成してもらったものを使用）

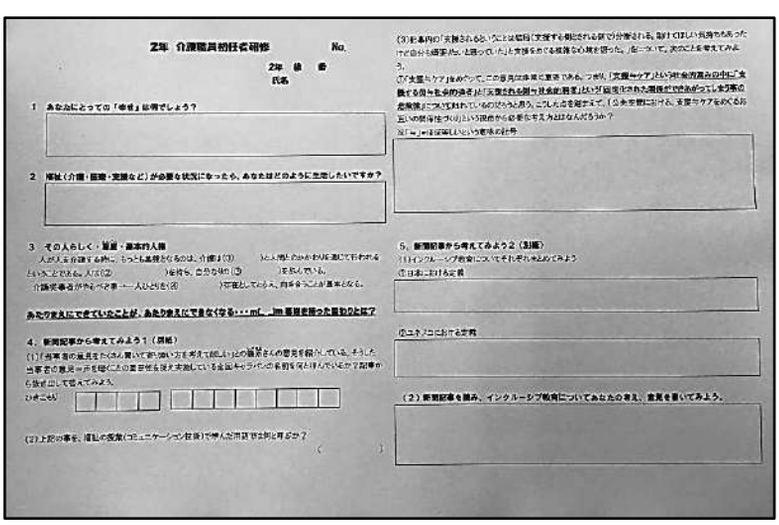
③新聞記事から考えてみよう２『インクルーシブ教育と共生社会』・新聞記事の読み聞かせ

④「支援する側とされる側　互いの関係性づくりで必要なこと」について自らの意見を発表し、まとめる。

３．目　的

専門職としての基本的理念の理解と共に、支援をする側も状況によっては支援される側になること。互いの関係性づくりにおいて大切なことを考える機会とする。また、新聞を「読む力」だけではなく、「聴く力」を通してより自分ごとに落とし込める授業実践の工夫に努める。

４．教　材



学習プリントは、教科に関する問い【４．（２）】も設け、新聞教材と教科の学びを関連づけた内容とした。

【学習プリント】

ひきこもりに社会の理解を

公的支援ない／親へのヘルプも

厚労省全国キャラバン＝沖縄

新聞教材①『ひきこもり社会の理解を』

インクルーシブ教育と共生社会

新聞教材②『インクルーシブ教育と共生社会』

４．授業の様子

新聞教材①では、「自らの思いを話せる場所が必要。」「どのような状況でも一人の人間として尊重することが大切。と言った、意見を伝え合っていた。また、「支援をしてあげている。」という上から目線が支援される側にはとても強く伝わるため、気をつけなければいけないという意見もあった。

新聞教材②では、共に学ぶ事への心配ごとや理解するために大切なことについて意見をだしあっていた。障がいについて、早期に学ぶことが重要であるとまとめた。

互いの意見をまとめポスターとして掲示】

５．授業を終えて

自ら新聞記事を読むことに抵抗を示していたが、授業展開の工夫として読み聞かせをしながら、語句の説明を入れ、状況や内

容を理解させることに努めた。その後、再度自ら新聞記事を読み込み、それぞれの考えを出すことができていた。また、１つのテーマについてそれぞれの意見を出し合い、まとめることで新たな視野の広がりにつながった。生徒たち自身が、支援する側の立場だけではなく支援される側の心情に寄り添い、理解することの大切さに気づくことができた授業であった。さらに、自分たちの学びを他の生徒へも理解を求めたいとのことで、ポスターとしてまとめることも考案し、アウトプットすることもできた。今後は、専門職としての支援方法のみだけでなはく、信頼関係の構築方法など日々の生活における人間関係づくりにもつなげていける授業を展開していく。

５ 課題と展望

昨年度、本校に転勤してすぐに、NIE の協議会の方から実践校のお誘いを受けた。まだ、職場の勝手も知らない状況の中で、数人の先生方へ私自身のこれまでの NIE 教育や実践の内容や NIE 教育の魅力を語り、協力を得ることができ、実践がスタートした。一年目の実践では、昨年度の報告書でも書いたように、ある一定程度の成果をあげることができた。一年目の取り組みの中で、アンケート調査などをもとに生徒の実態や学力面、生活面などの課題などを分析でき、それを克服するために、職員間で連携した実践として取り組めたのは大きな成果だった。また、その後、実践報告書を職員間で共有することで、個々の職員が生徒の課題を克服するために、それぞれの教育実践の中でどのような内容の取り組みをするべきかを考えるようになり、その中で NIE 教育に対する理解と教育実践としての効用に対する理解も深まったのは収穫であった。

２年目の取り組みは、本報告書の「はじめに」にも書いたが、その基盤をもとに、よりバージョンアップして、教科横断的な NIE 実践の取り組みができるということに挑戦した。この教科横断的な取り組みの弱さは、教科の専門性が高いがゆえに、個々の職員が必要性は感じながらも、なかなか取り組みが進まない高校の実践現場全てにおける課題でもある。さらに言えば、生徒に学びの意味とその喜びを掴ませ、「真性の生きる力」を育成するためには、なくてはならない要素である。

その点に関わって、今回、日本新聞協会の実践指定校として最終年度の取り組みを進める中で、社会科だけでなく、その他の教科と一緒にコラボレーションする形で身につけさせたい力を構想し、それをもとにともに授業を構想し、実践できたのは、わたし自身の経験においても非常に有意義な経験であった。

また、２年目の実践の課題として、あげた「学びに向かう力・人間性」に関わり、「学習に対する主体的な意識や態度、意欲を育成する」ことを意識した実践の展開に関しては、探究的な取り組みへと少しずつではあるが取り組みをすすめることができたこと、また、教科横断的な取り組みの端緒となる実践が始められたことは良かったと考える。この点に関しては、実践指定校として、生徒達が県内外の新聞を閲覧する機会を得ることができたことで、県内２紙だけでなく、大手県外紙も含めて、それらの新聞を読み比べる経験ができ、特に、各新聞社の社説などを読み比べながら、探究的な活動に繋げていけたのは、非常に良かった。

各新聞社の社説は、言うまでもなく、その社説を書くために、各社の論説委員かなり広い詳細な調査・研究を踏まえて書いているということ、また、それを踏まえた課題・問題点が明確に示されていることから、その社説を各生徒が読み込み、理解を深めるための活動を行っていくこと自体が、探究的な

視点の獲得や探究的な活動の足がかりにもなると考える。今後も今年度の活動の成果をもとに、こうした実践の中身を掘りさげて、生徒の探究的な活動を組織し、その中で、各生徒の学びの幅と学びの深さを追求した実践を構想していきたい。

他方で、昨年度からの継続となる朝学を通した学校全体での取り組みだけでなく、国語科、数学科、福祉科との連携した取り組みへと、幅を広げて実践を構想、展開でき、その取り組みの成果は、目に見えないもの、すぐには表に出てこないものなども多くあろうが、はじめにでも触れた学力面での課題克服について焦点化して見ていくと、Benesse の学力診断テストの４月度と９月度の成績変化に見てとることもできるのではないかと考える。例えば、３年生が１回目の成績平均Ｄ３＋から２回目の成績がＤ２－と１アップ、２年生が、１回目の成績平均がＤ３+から２回目Ｄ２-と１アップ、１年生が、１回目：Ｄ３+から２回目Ｄ１+と大きくアップすることができたことにも表れているのではなないかとも考える。特に、語彙力や読解力に焦点化すると、国語の成績は、１年生が、Ｄ２-からＣ３-へ３アップ、２年生が、Ｄ３+からＤ２-と１アップ、３年生が、Ｄ２+からＤ１-と１アップしていることからもその成果が表れているのではないかと考える。

次年度も、この２年間の取り組みをベースにして、多くの先生方が NIE 実践の効果と魅力を伝え合い、さらに多くの職員が NIE 実践に取り組んでくれることを期待して結びにかえたい。

（地歴・公民科：比嘉　啓信）

「確かな学力を身に付け，主体的に学び合い高め合う生徒の育成」

～新聞を活用した授業実践を通して～

糸満市立糸満中学校
校長　大城直之
教諭　久山智恵子

１　はじめに

本校は、平成２９年度よりＮＩＥ実践指定校として授業改善につなげる実践に取り組んでいる。今年度も、沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定実践校として、前年度同様、各教科でＮＩＥの手法や新聞を活用しながら授業改善に取り組み、その他にも「持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）」や「海洋教育パイオニアスクール」の実践校として取り組んできた。

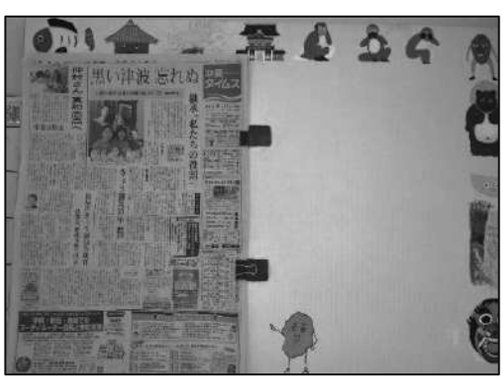
本校の校内研究の主題である『**確かな学力を身につけ、主体的に学び合い高め合う生徒の育成**』を目指した授業改善の中から新聞を活用した NIE の取り組みを紹介する。

２　実践の内容

（１）ＮＩＥコーナーの設置

県内２社の新聞を各学年と図書室に新聞閲覧コーナーを設け、生徒が自由に新聞を閲覧できるようにした。各学級でも新聞記事を掲示するスペースを作り工夫して取り組んだ。今年度もＳＤＧｓに関連するコーナーを設置し、新聞で紹介されるＳＤＧｓに関する記事を閲覧できるようにした。

【図書室の閲覧コーナー】



【新聞閲覧コーナー】

（２）新聞を活用した特設授業の実施

教科の特性に合わせ、NIE の手法や新聞の記事を活用した授業に取り組んだ。以下、実際に教科で取り組んだ実践事例を紹介する。

①社会科　大城宗 教諭

【沖縄県復帰 50 周年　特設授業】

復帰前の沖縄の様子が分かる過去の新聞記事を読み取り、現在の沖縄と比較することを通して復帰に対する理解を深め、主権者として社会に関わるという意識を育てることを狙いとして実施された。（図１）

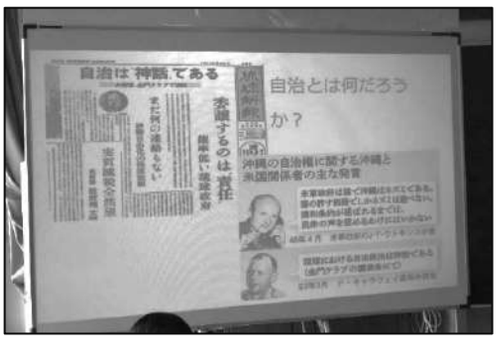


図１　活用した記事

②道徳　全クラス担任

【特設授業（「りゅうPON！」「ワラビー」活用授業）】

『沖縄戦や復帰を通して考える～沖縄の過去・現在・未来～「沖縄の未来の担い手として思いを伝えよう」』をテーマとし、小中学生新聞「りゅうPON!」「ワラビー」特別号を活用し平和学習を実施。（１）復帰から50年の歴史を振り返り、その時の人々の思いについて考えることを通して、これからの沖縄の未来の担い手として、平和な島を築き上げていこうとする心情を育てる（２）沖縄戦に関わる、過去・現在・未来について、学んだことや考えたこと、感じたりしたことを未来の自分へのメッセージとして思いを発信することをねらいとした。授業の流れは、①新聞記事から５つの写真を取り上げ、フォトランゲージ【図２】②「りゅうPON!」「ワラビー」を配布し、写真に関する内容を探し、考えたことと比較【図３】③新聞記事で学んだことや感じたことを沖縄の未来を担う一員として、未来の自分に向けて手紙を書く。【図４】

図２　①フォトランゲージの様子

図３　②　実際の記事内容を確認

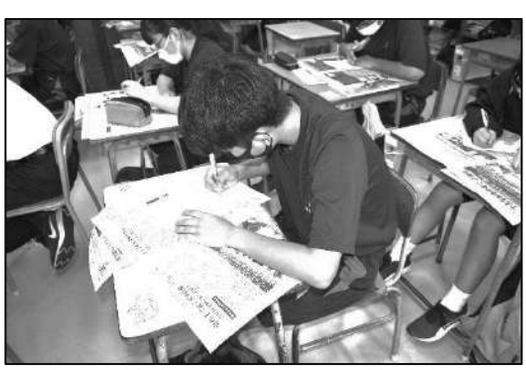


図４　③未来の自分宛の手紙を書く

戦時中の食べ物 ヘビやヤモリも

糸満中で平和集会

【糸満】戦争のむごさや平和の大切さを考える糸満市の糸満中学校の平和集会が17日、同校であった。図書委員らが絵本「弟をかえして」を読み聞かせたほか、沖縄戦当時の生活や現在につながる影響について発表。オンラインで各教室と結び、知識を深めた。

スライド発表で3年の崎山瑞葵さんは、戦時中の食べ物について当初はイモなどを食べていたがやがてなくなり、カタツムリやヤモリ、ヘビと何でも食べたと説明した。崎山さんは「平和の大切さを伝えるためには学び機会が大切だと分かった」と話した。

沖縄戦当時の状況について発表する糸満中学校の生徒たち＝17日、糸満市の同校

令和４年６月２２日（水）沖縄タイムス

復帰と沖縄戦 新聞で学ぶ

糸満中・読谷中で平和学習

「ひゅうPONI」など子ども向け新聞を活用し、沖縄の日本復帰や沖縄戦を考える授業が、県NIE推進協議会指定実践校の読谷中学校（読谷村座喜味）、糸満中学校（大城直之校長）で6月に行われた。各自が記事を読み込んだ上で感想や意見をまとめていた。（高良利香）

糸満中学校では17日、考古学などで沖縄の過去・現在・未来を探し考える、総合的な学習を実施した。沖縄の未来の担い手として良い生きかたを目的として、授業の最後に未来の自分に宛てた手紙の形で、それぞれ考えをまとめた。

授業前半では、祖父母の世代から事前に聞んであった、戦争体験や家族の写真について、生徒たちが話し合ってタイトルを考えた。その後、新聞から、答えを探しをして、戦争からこれまでの出来ごとをみんなで年表を読み込み、未来の自分へのメッセージも書いた。

生徒たちは戦争の事実・事故や人命が奪われていることに怒りを感じていることを伝えるなど、「少しでも悲惨が減っていることを願う」などの内容で、「戦争を二度と起こさないようみんな伝えるように」などと伝えるように

【「糸満ハーレー」講話】

糸満ハーレー行事委員会参与、与那嶺和直さんによる「糸満ハーレー」講話（２・３年生）

秘技「ビルマがえし」紹介

糸満中でハーレー講演会

与那嶺さん 母校で解説

【糸満】糸満ハーレー講演会が20日、地元の糸満中学校で行われ、3年生と2年生の340人がクイズ形式で歴史や文化、生きる知恵などについて学んだ。知識を深めた生徒たちは問いを使った優勝した。

講師は、糸満ハーレー行事委員会参与の与那嶺和直さん（61）。母校の生徒を前に、3年生中学生ハーレーに出場して一番になりのぼりを奪ったと話し、旧暦5月4日に行われ、航海安全・大漁祈願などと「神遊び」に始まり御願（願）で終わる、といわれるなど神事と密接に結びついていると紹介した。

与那嶺さんは、組織図を示しながら、「ビルマがえし」がなぜ、「糸満のウミンチュ（ビルマ）」と呼ばれるようになったのか、と問いかけた。

ビルマ（ミャンマー）で強制的に「死の行進」を強いられた際、「糸満のウミンチュ（ビルマ）だ」と言葉をかけられ、「ビルマがえし」で命を救ったと説明した。

また、コロナ禍のため3年間、中止となり神事のみを行う、与那嶺さんは行事委員会の一員として「押しかけない気持ちでいってほしい」と呼びかけた。

生徒は四つの班に分かれ、グループで意見交換し「国際」「癒しの中心」などと書いたクイズに答えた。

クイズを作った生徒は、「ハーレーが大切にされていることが手に入る」と話した。

（西銘聡郎・文豊盛）

令和４年５月26日（木）沖縄タイムス

糸満ハーレー「歴史に誇り」

糸満中 漕ぎ手・与那嶺さん講話

生徒に参加呼び掛け

令和４年５月30日（月）琉球新報

【「糸満ハーレー聖地巡礼ウォークラリー」】

全校生徒による「糸満ハーレー聖地巡礼ウォークラリー」。糸満ハーレーにまつわる場所を回り、糸満ハーレーの歴史に触れる。

山巓毛で説明板を読んでワークシートに書き込む生徒たち＝3日、糸満市の山巓毛

ハーレー歴史 学び新聞に

糸満中生、クイズで"聖地"巡る

【糸満】地域の伝統行事・糸満ハーレーについて学ぼうと、糸満中学校は３日、全校生徒が参加して糸満ハーレー聖地巡礼ウォークラリーを行った。３年連続開催が見送られたため、その代わりにハーレーに触れる機会にしようと初めて実施された。

生徒たちは山巓毛（さんてぃんもう）、白銀堂、糸満漁港、糸満市場いとま～るを回り、各場所でハーレーなどに関するクイズに答え、学校に戻った後は、これまでに学んだことをコンパクトな「はがき新聞」にまとめた。

生徒たちは４カ所で「山巓毛は御願バーレーの何を告げる旗が振り下ろされる場所か」「御願バーレーの距離は」といったクイズのヒントを探し、ワークシートに答えを書き込んでいた。

学校に戻った生徒たちは、各自新聞作りに取り組んだ。新聞の主見出しを「受け継がれる伝統」にしようと考えた新城知夏さんは「漁港から山巓毛の開始の合図が見えるってすごいなと思った」と話した。真栄平莉桜花さんは「ハーレーがないと物足りない感じ」と話し「『旧跡から知るハーレー』と題し、昔のことについて新聞をまとめたい」と話していた。各学級から完成した新聞を数点ずつ選び、いとま～るで展示した。（高良利香）

令和４年６月２３日（木）琉球新報

④校内研修（NIE授業づくり）

【「新聞の活用方法」「授業づくりの考え方」「新聞を活用しての授業づくり（ワークショップ）」】

NIEアドバイザー松田美奈子氏（読谷中学校主幹教諭）を講師に迎え、新聞を活用した授業づくりを紹介していただいた。初めてNIEについて学んだ職員がいたり、実際に体験することで、今後の授業のヒントとなったと感想を述べる職員もいたりと、２学期の授業づくりに向けて大きな学びとなった。【図６】

図６　研修を受ける先生方

授業への新聞活用学ぶ

糸満中でNIE研修会

おきなわ NIE

糸満中学校（大城原子校長）は7月29日、「NIE」（教育に新聞を）に関しての校内研修会を開いた。教諭ら人が日本新聞協会認定NIEアドバイザーによる講義や、生徒の立場になってのグループ学習を通し、新聞の特徴や記事の読み方、授業への活用方法を学んだ。糸満中は県内NIE推進協議会にNIE実践校として認定されている。

講師を務めた読谷中学校教諭でNIEアドバイザーの松田美奈子教諭が、NIEを通じ読解力や思考力、コミュニケーション力などを高めに対して説明。その「教材」となる新聞記事については日常から使えるような事柄を中心に選んでおくことが大切だと強調した。

グループ学習に参加した沖縄タイムスと琉球新報をめくって気になる記事を選び、選んだ理由や感想を書いた。同じ記事を別の参加者に読ませて感想を聞き、その意見を含めた感想も書くなどして、考えを深めた。

参加した糸満中の教諭に一般教諭は「ネットニュースを読むことは多いが、紙で読むことで次の記事に移りして興味がひかれた」と話した。

同じく教諭（数学）は「地元紙は地域の話題にフォーカスしているので親しみやすい」と話した。

講師の松田教諭は「NIEを授業改善のツールとして使い、社会と子どもたちをつなげてほしい」と呼んだ。（学生部・又吉記者）

新聞をめくりながら、気になる記事を探す糸満中学校の教諭らー7月29日、糸満中学校

【令和４年８月10日（水）沖縄タイムス掲載】

⑤生徒会

【ＮＩＥ新聞速報事前勉強会】

沖縄タイムスの又吉記者から新聞の構成や新聞ができるまでを学び、記者の仕事について学び、県中文祭の子供記者として写真の撮り方と取材の仕方などを学び、県中風学校文化祭に生かした。（図７）

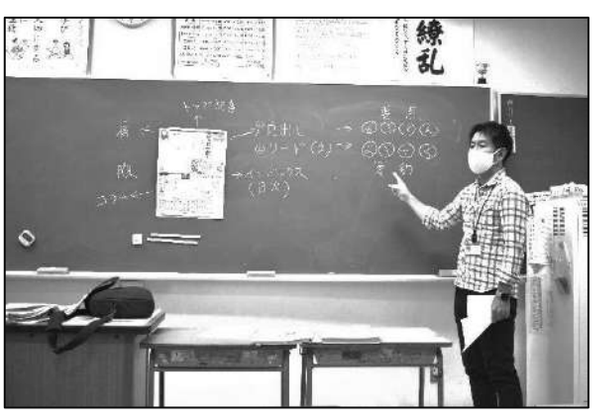
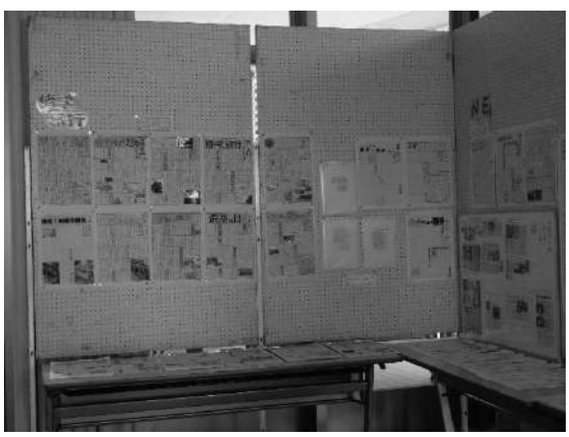


図７　研修の様子

⑥中文祭

【NIE 取り組みの掲示】

本校がこれまでに取り組んできた作品を展示した。



【図８　沖縄県中学校文化祭で紹介した展示作品】

⑦美術　金城絵美子　教諭

【りゅう PON！題字コンテスト】

「りゅう PON！題字コンテスト」に応募し、本校から多くの生徒が賞に選ばれる。

久山 輝人さん（糸満中２年）

子どもたちの目にとまり、興味を持ってくれるような字と絵にしました。りゅうちゃんを感電させたように骨を描いて面白みを出しました。目立つように文字を赤で塗り、背景の色も工夫しました。

うみんちゅ りゅうちゃんで賞　**石橋 美球さん（糸満中２年）**

見ただけで沖縄の魅力が分かるように「り」を木に、「ゅう」は釣り針と魚に見立て、「PON」でりゅうちゃんが釣りざおを引っ張っているように見立てました。

シェンロンで賞　**鈴木 淳之介さん（糸満中２年）**

「りゅうPON！」のキャラクターが龍になった感じで描いてみました（りゅうPON！のりゅうから取って）。龍に合わせて文字もそれっぽくしました。

新聞はいろいろなところから情報を集めて私たちに発信してくれているところが、自分の思っている探偵と似ていると思い、りゅうちゃんを探偵にしたり、足跡を描いたりして探偵っぽさを表現しました。

作品にりゅうPON！が沖縄県だけでなく、世界や宇宙の情報を私たちに発信してほしいと言う思いを込めて、りゅうちゃんが飛び出す様子を立体的に描き表現しました。

（３）『はがき新聞』の活用

①授業で調べたことや伝えたいことを『はがき新聞』にまとめ発表した。発表後は、学年フロアーに掲示し情報を発信した。

（４）　社会科新聞作成

授業や夏休みを活用して社会科新聞に取り組んだ。生徒は新聞作成に必要な条件や見出しの決め方を学び、個人で決めたテーマをもとに限られた字数の中でどう伝えるかを工夫して作成していた。作品は、「中学校社会科新聞コンクール」に出展している。その結果、沖縄賞１名、金賞 19 名、銀賞 14 名、銅賞 24 名と多数の生徒が入賞した。

（５）　新聞投稿に挑戦

学習の感想や学期はじめの抱負など、新聞投稿に挑戦した。投稿のねらいは、自分の考えや気持ちを表現することである。生徒は限られた字数で自分の伝えたいことを相手にわかりやすく書くための工夫をしながら「書く力・表現する力」を高めた。今年度は、休校中に生徒自身が自ら投稿している記事もあり、新聞投稿が生徒の身近なものになってきている。

中学校に入学して

糸満市立糸満中1年　上原　愛叶

私は中学校に入学して、とても心配でした。なぜなら中学校は小学校と違うところがたくさんあると聞いていたからです。

しかし、今日行われた生徒会入会式や部活動紹介のVTRを見て、先輩方がとても楽しそうに部活をしていたり、分かりやすく糸満中のことを紹介したりしてくれたので、中学校生活がとても楽しみになりました。

部活動の中で私が興味を持ったのはダンスです。なぜなら先輩方のダンスはとても迫力があり、動画だけでなく目の前で踊っている姿を見てみたいと思いました。部活動だけでなく、勉強にも精いっぱい取り組みたいと思います。あきらめが肝心の私でも、先輩方の頑張っている姿を見習って、得意な教科をさらに伸ばしていきたいです。

苦手な教科を克服できるか不安もありますが、少しずつ頑張って成長できたらいいです。さらに、別の学校から来た人たちとも仲良くするために、自分から積極的に話しかけて、今の友達と同じくらい仲良くなりたいと思います。

令和４年４月２２日（金）琉球新報

中学に入学 勉強しっかりと

玉城天音＝中1

僕が中学校に入学して頑張ろうと思ったことは、小学生の時との違いがいろいろあるので、その変化に慣れて、勉強にしっかりついていって単元テストや定期テストでも良い点数が取れるようにしたいです。また新しいクラスでも、別の小学校から来た生徒とも仲良くして友達をたくさんつくっていきたいです。

中学校からは算数が数学に呼び名が変わったり、新しい教科ができたりするので、教科を再確認して興味を持って学習に取り組みたいです。部活動は5月までは自分が一生懸命にやり通せるものを見つけて、先輩方と共に部活動を盛り上げて、さまざまな面で自分自身の向上に努めたいと思います。（糸満市・糸満中）

令和４年４月２３日（土）沖縄タイムス

中学校に入学して

糸満市立糸満中1年　伊礼　壮良

中学校の入学式を終えて、制服を着て学校に登校したことで、中学生になったんだなーと実感がわいてきました。

最初は不安の中で新学期を迎えましたが、今日の授業で自己紹介をして、自分の好きなことと得意なことが同じ人がいたので、ぜひその人と仲良くなりたいと思い、楽しみになりました。

しかし、新しい教科書を16冊ももらったので、中学校の勉強は難しくなりそうだなと少し不安にもなりました。中学校の授業は教科ごとに先生が変わるだけでなく、移動教室も多くなります。授業に臨む姿勢をしっかりと整え、提出物などもおろそかにすることなく頑張っていきたいと思いました。

中学校で学級や学年の仲間と過ごす時間を大切に過ごし、来年入学してくる1年生のお手本になれるよう、いろいろな活動を頑張っていきたいです。

令和４年５月１日（日）沖縄タイムス

成果と課題

【成果】

・各学年フロアー、図書室に新聞の閲覧コーナーを設置したことで、生徒が日常的に新聞に触れることができた。

・NIEアドバイザーによる「授業づくり研修」を実施することができ，ワークショップを行いながら、新聞を活用した授業を実際に体験することができた。

【課題】

・特設授業が多いので、各教科等の年間指導計画に位置付けることで、見通しをもって授業に取り入れることが必要である。

・次年度もＮＩＥに関する校内研修を計画し、職員全体で授業づくりについて更に深めていく必要がある。

2022年度　読谷中学校　NIE実践報告書

読谷村立読谷中学校
校　長　　與那覇直樹
主幹教諭　松田美奈子

１．はじめに

今年度から沖縄県ＮＩＥ実践指定校の指定を受け、ＮＩＥ実践校指定１年目となった。ＮＩＥを授業改善や授業力向上の手立てのひとつとして、相互に連動させながら各教科や領域などの教育活動に取り入れていくことを共通実践・共通理解で確認した。１年目なので、「ＮＩＥ入門」を意識しながら、ＮＩＥの理論と実践、啓蒙を進めていくこととした。

２．ＮＩＥ推進テーマ

「主体的・対話的で深い学びを育み、自己肯定感を育むＮＩＥの実践」
　～学びに向かう集団づくりや生徒視点の授業づくりを通して～

３．学力向上推進テーマ

「キャリア教育の視点を踏まえた新たな時代の授業実践」
　　～ＩＣＴ機器を活用した授業改善を通して

４．校内研修テーマ

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり」
　～ＩＣＴ機器（タブレット）を活用した授業～

５．新聞の設置

・ＮＩＥ用新聞は各新聞社ごとに図書館内にある専用棚に入れ、授業時に生徒が検索や閲覧ができるように仕分けした。
・本校独自で購読している県内紙（琉球新報・沖縄タイムス）は最初は職員室で閲覧できるようにしている。その後、図書館に移動させ、ＮＩＥ用新聞と区別して誰でも閲覧やコピー、貸し出しができるように教職員同士で共通確認をこまめに行いながら、新聞が身近な存在となるよう設置場所や新聞を開きたくなるような仕組みや周辺環境を整備してきた。

（２）校内研修

①オリエンテーション「ＮＩＥ入門～ＮＩＥで身に着く力・教育的効果・記事の教材化～」

（４月５日　講師：松田美奈子主幹教諭　ＮＩＥアドバイザー）

②ＮＩＥミニ研修会「ＮＩＥ講座　～新聞のしくみと特徴～」

（１０月７日　講師：松田美奈子主幹教諭　ＮＩＥアドバイザー）

（３）実践教科・領域と内容

①社会：山形県の第４のサクランボを考えよう、都道府県調べ、２０２２年度１０大ニュース、難民問題、

：沖縄本土復帰５０年

：行事や授業などの振り返りとして、「振り返り作文」を取組み、県内２紙に新聞投稿し、２年生や３年生を中心に多くの生徒の作品が新聞に掲載された。

②美術：作品鑑賞

③道徳：読谷村のガマについて

：沖縄戦について考えよう（全学年・全学級）

：新聞投稿記事コラムを活用して、思いやりの心について実践した。（ＴＴ授業）

：沖縄タイムス新聞記事投稿「茶飲み話」掲載記事を活用しての道徳授業

（中堅研の道徳授業の示範授業を実施した）

④総合的な学習の時間：「平和学習」（全学年）

⑤学活：「第１２回しんぶん感想文コンクール取組み」（２学年中心に実践）

（４）その他

①「学推だより」

・職員向けに発行

・内容は学力向上や授業改善に関する記事を掲載し、記事の要約や記事から読み取れること、記事のキーワード等を入れ、授業づくりのヒントになるよう心がけて作成した。

・学推関連の記事を抜粋し、記事の「キーワード」から職員への発問を掲載し、発行者側からの一方通行にならないよう、職員の意識高揚をねらった。発問に関して、職員からの記述があったものは、校長や教頭に目を通してもらった。

６．生徒の変容・成果・課題

（１）生徒の変容①最初の頃は新聞のしくみや特徴が分からず、興味がある面（スポーツ）や写真、広告面ばかりを見る生徒が多かったが、見出しの特徴・リード文の役割など新聞の特性や特徴を教師が説明した後は､他の面も読む生徒が徐々に増えた。

②落ち着きのない生徒が徐々に落ち着いてきた。

③自分で考える前に友人や教師にすぐ質問し早急に答えを知りたがる生徒が、まず自分で考えてから、その後、友人に質問するようになった。

④ペア学習やグループ学習を苦手にしていた生徒が小さい声ではあるが、グループでの話し合いや意見交換に参加することができるようになった。

⑤生徒からの質問が増え、意欲・関心が高まり、質問のレベルが上がった。

（例）当初は「全部分からない」という質問から「〇〇は分かるけど、□□のこの部分が分からない」という具体的な質問になった。

⑥各グループでの学び合い、教え合い、聴き合いなどが見られるようになった。

⑦各コンクール、各コンテストに入賞した生徒や新聞に作文が掲載された生徒たちに対して、多くの生徒や保護者、地域の方々から称賛され、自己肯定感が向上した。また来年も挑戦したいという生徒や自分もやってみたいという生徒が増え、仲間意識が深まった。

（２）成果　①集中力が高まり、表現力が向上し、自信を持つ生徒が増えた。

※ＮＩＥを実践することで、学力向上だけでなく、物静かな生徒が自己有用感が高まり、後に、生徒会役員選挙に立候補した生徒がいた。

②時間管理能力が向上した。（タイムマネジメント）

②思考力・判断力・表現力が高まった。

③各コンクール・コンテストへの応募についても、入賞者さらに上位入賞者が出て、生徒から生徒への称賛のようすが多数見られた。入賞しなかった生徒が入賞した生徒にグータッチをしたり、自分のことのように喜んでいる姿が見られた。学級によっては、盛大な拍手をするクラスもあった。

特に「第１３回いっしょに読もう！新聞コンクール」で学校奨励賞を受賞し、生徒が非常に驚き、飛び跳ねている生徒や拳を挙げている生徒もいた。

さらに、「第１２回しんぶん感想文コンクール」琉球新報賞・優秀賞・奨励賞・入選の生徒本人や保護者、親族（祖父母、姉妹）から取組応募への感謝の言葉が多数あった。

⑥理由や根拠を書くことを苦手にしている生徒が減った。

⑦コミュニケーション力、分析力、問題発見・問題解決力が身についた。

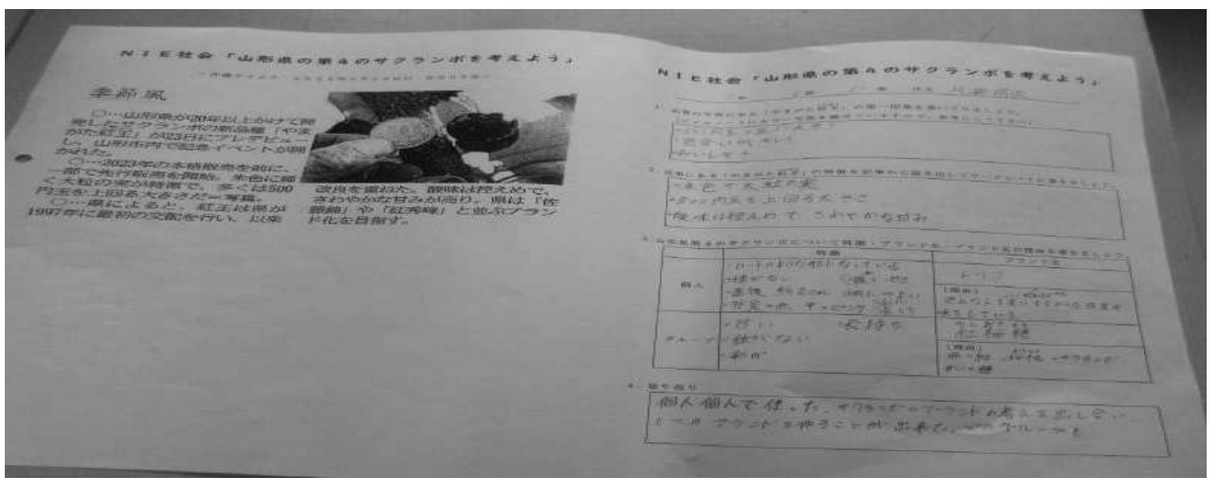
⑧文章を要約して書く、「要約力」や発信力が向上した。

（３）課題　　①一部の教科・領域の実践で、偏りがあった。

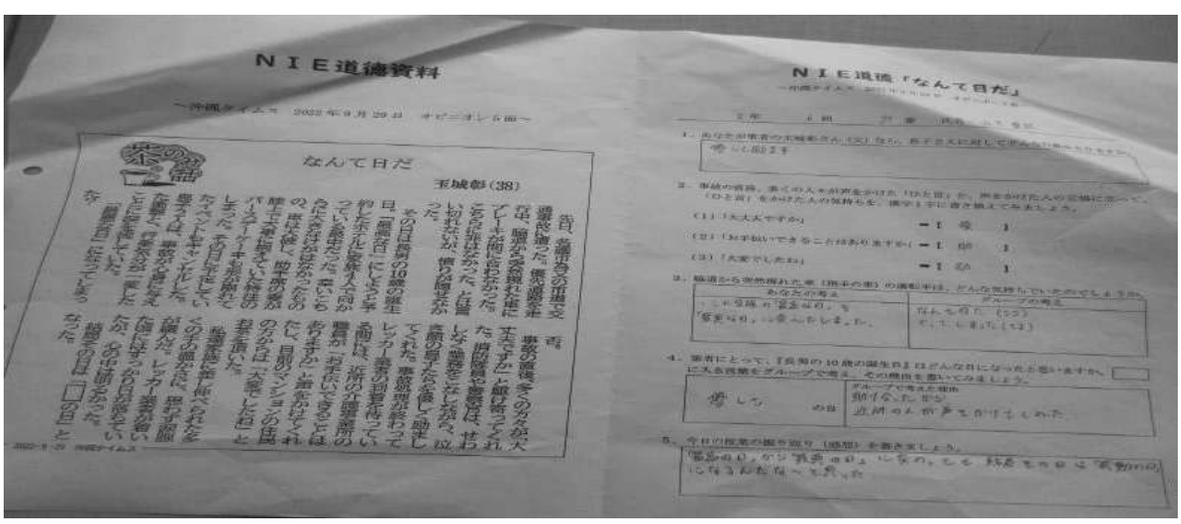
②ＮＩＥに関して、職員の温度差があり、新聞を活用することに「難しい」「面倒だ」と考えている職員もいる。

③どのような新聞記事を教材化するかということに頭を悩ませている職員が多いので、協働での教材づくりの輪を広げる必要がある。

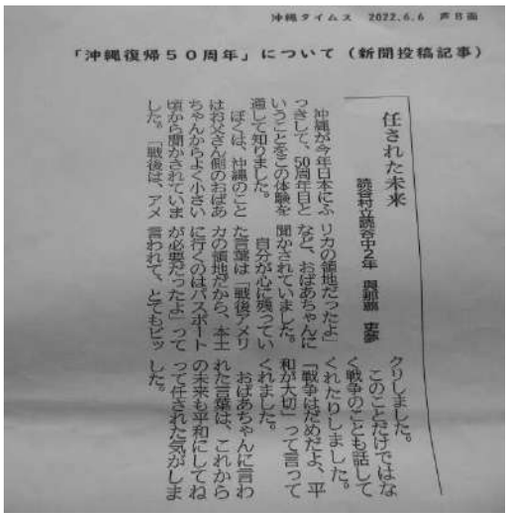
７．写真資料



ＮＩＥ社会「山形県の第４のサクランボを考えよう」（２年）



ＮＩＥ道徳「なんて日だ」（２年：思いやりの心）



沖縄タイムス　2022.6.6　声欄

「沖縄復帰５０周年」について（新聞投稿記事）

任された未来

読谷村立読谷中2年　興那嶺　安蔡

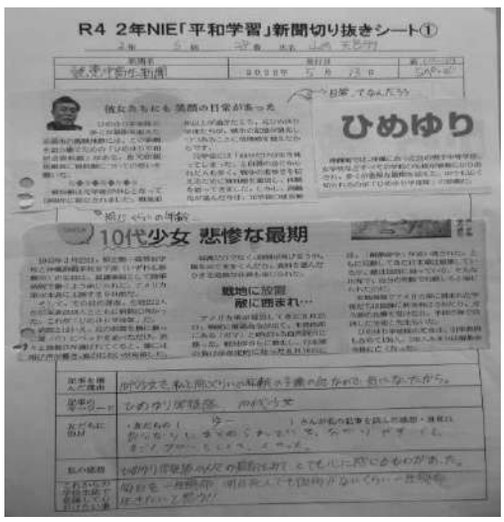
沖縄が今年日本にふっきして、50周年目ということをこの体験を通して知りました。

ぼくは、沖縄のことは、おじいさん側のおばあちゃんからよく小さい頃から聞かされていました。「戦後は、アメリカの領地だったよ」「戦争はだめだよ、平和が大切」って言ってくれました。

おばあちゃんに言われた言葉は「戦後アメリカの領地だから、本土に行くのはパスポートが必要だったよ」って言われて、とてもビックリしました。

このことだけではなく戦争のことも話してくれたりしました。

自分が心に残っていた言葉は「戦後アメリカの領地だから、本土の未来も平和にしてねって任された気がしました。



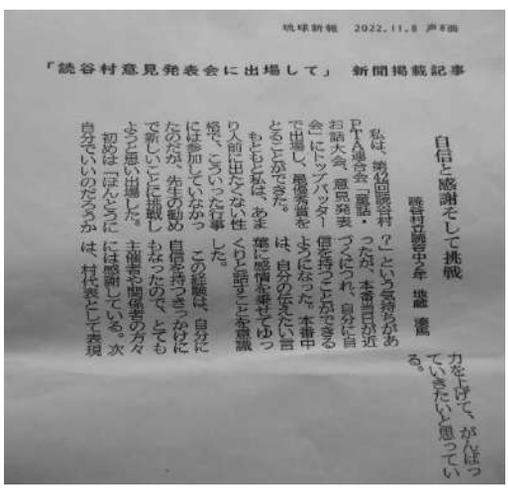
R4 2年NIE「平和学習」新聞切り抜きシート①

ひめゆり

10代少女 悲惨な最期

沖縄復帰５０周年（新聞掲載）

ＮＩＥ平和学習



琉球新報　2022.11.8　声欄

「読谷村意見発表会に出場して」　新聞掲載記事

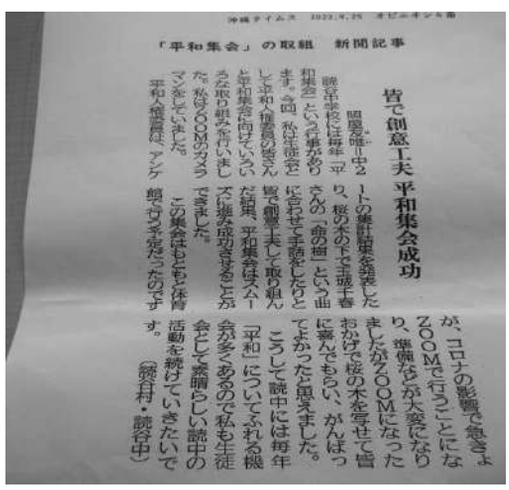
自信と感謝そして挑戦

読谷村立読谷中2年　塩盛　凌雲

私は、第42回読谷村「？」という気持ちがあったが、本番当日が近づくにつれ、自分に自信を持つことができるようになった。本番中は、自分の伝えたい言葉に感情を乗せてゆっくりと話すことを意識した。

この経験は、自分には参加していなかったのだが、先生の勧めで新しいことに挑戦しようと思い出場した。

初めは「ほんとうに」自分でいいのだろうかは、村代表として発表力を上げて、がんばっていきたいと思っている。



沖縄タイムス

「平和集会」の取組　新聞記事

皆で創意工夫　平和集会成功

読谷中学校は毎年、平和集会という行事があります。今回、私は生徒会として平和人権委員の皆さんと平和集会に向けていろいろな取り組みを行いました。

マンをしました。

平和集会は、アンケートの集計結果を発表した後、ZOOMで行うことになりました。

この集会はもともと体育館で行う予定だったのですが、コロナの影響で急きょZOOMで行うことになり、準備などが大変になりましたが、ZOOMになったおかげで桜の木を写せて皆さんの「命の絆」という面に寄んでもらい、がんばってよかったと思えました。

こうして読中には毎年「平和」についてふれる機会が多くあるので私も生徒会として素晴らしい読中の活動を続けていきたいです。（読谷村・読谷中）

意見発表大会地区大会出場（新聞掲載）

平和集会の振り返り

速報　琉球新報　The Ryukyu Shimpo

12月10日(土)

50年の歴史 多彩に

文化の祭典 華やかに開幕

第28回県中学校総合文化祭　1日目

NIE

美ら島の文化発信

私たちが作りました

県中文祭　新聞速報係（おもて面）

県中文祭　新聞速報係（うら面）

2022 年度　沖縄県 NIE 推進協議会　実践指定校　実践報告

NIE REPORT AT HENRTONA HIGH SCHOOL

報告者：教諭　宮城通就

はじめに

本校は世界自然遺産「やんばる」の大自然のなかに位置し、その環境を最大限に活かしながら生徒の感性を刺激することで、彼らに「何事からも学ぶ姿勢」のタネを植え付ける教育活動を目指している。平成 13 年に県内唯一の専科「環境科」（令和３年より「自然環境科」と改称）が設置され、やんばるの自然を教材とした授業や総合的な探究の時間（SDGs の視点を取り入れた探究学習や平和学習）に取り組んでいる。また部活動ではサイエンス部のユニークな取組みなどが新聞紙上でもたびたび伝えられている。自分の学校が新聞で紹介されていることに対して在校生・卒業生達からは「うれしい」という声も聞こえることから、新聞記事になるということは自己肯定感の醸成にも大いに役立っているとも言える（特に大先輩達からは「母校が新聞に載る事はとても嬉しいし、後輩を応援したい」と大好評）。

2021 年より始めた沖縄県 NIE 推進協議会指定実践研究校、テーマ「NIE でちゅ～がなびら　～感じてぃ　考げーてぃ　語やびら（伝えユン）～」も今年度で最終年度となる。この間、学習の三要素＝「自己との対話・テキストとの対話・他者との対話」を身につけさせることを目標の柱とし NIE を手段として活動してきた。初年度は①よみとき新聞②日本史授業での活用事例③はがき新聞で卒業メッセージ④NIE でへんなかんじ～（創作漢字を創ろう）の 4 事例を通して、NIE 的学習手法の効果・有効性を報告した（詳細は『2021 年 沖縄県 NIE 実践報告書』ｐ69～78 をご覧下さい）。今回は前年度の成果や課題をふまえつつ、①よみとき新聞②復帰５０年目の沖縄③NIE でへんなかんじ～（創作漢字を創ろう）④2 分間スピーチの４事例を報告する。

おでかけりゅう PON ワークシート

NIE コーナー：職員室前に設置。「新聞を知ろう！」を掲示し、新聞の構成（伝える工夫）や新聞記者が大切にしている約束事（５W1H や逆三角形＝記事のポイント）も分かるようにした。

学校紹介

沖縄県立
辺土名高等学校
創立 78 年目

校章

制定：昭和 21 年１月５日
形　1，文字の高は白色
　　波は黄金色
　　台は青（濃い青）
　　2，万里の波濤を蹴って進む高校の姿
精　神：万里の波濤を蹴たてて進む姿は人材が各地各界に進出することを表すものである。

1，世界に飛雄、進取、剛毅、果断の精神

2，常に文化の波の魁となって進む（社会のよい指導者の輩出を表す）

3，豊かな黄金の波うつ、みのりの地に立つ学校（永遠の繁栄を表す）

設置学科：自然環境科
　　普通科
　　各学年１クラス
在校生数：89 人
卒業生総数
　　１０．５８８人
（2023．3.月現在）

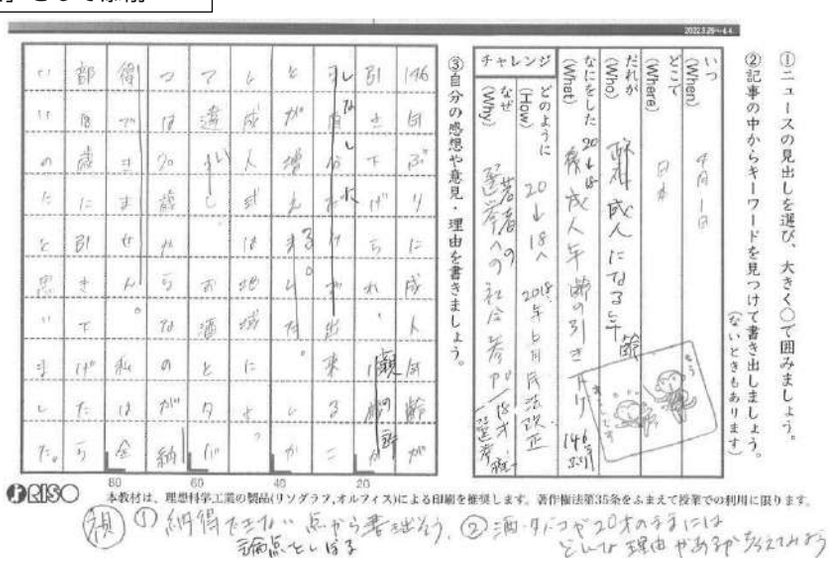
実践事例１　「よみとき新聞」の活用

RISO(理想科学工業株式会社)さんのご厚意による無料配信サービス（月２回：第１・３週）のワークシート(5W1H 型)を活用している（4 年目）。本年度は主に２学年・３学年の普通科（計 16 名）で実施した。この実践の狙いは**①要約力の育成②論理力の育成**の２点である。そしてこのワークシートを使う一番の理由は**「日常生活から生じた疑問を学習へつなげたい」**という思いからだ。同時に、**教科書の内容と現実社会との関係性にも気づいて欲しい**という期待もある。

実践の流れ

（準備）登録アドレスに月２回配信されるシートをダウンロード
（実践）　　（RISO 社 HP 上より入り 登録します）
①授業の中で「10 分程」時間配分し、取り組ませる
①四つの記事の中から、自分が取り上げる記事を選ばせる。
②その記事について、５W１H でキーワードを抜き出す。
③100 字以内の自由記述（意見・感想）
留意点：(1) 記事の内容をくり返し説明させない。
(2) 字数制限のため、省略できる言葉や可能な限り換言できる短い語句を考えさせる。
(3) 事実。具体例をふまえた「伝えたい事」「訴えたた事」を述べさせる。
（事後指導）
④プチ添削：アドバイスや切り口を「視点」として添削

よみとき新聞ワークシート



「視点」　：①納得できない点から書き出そう（論点を絞ってみる）　②酒・タバコが 20 歳のままと言うことは、
（アドバイス）　何か理由があるのでは？・・・どんな理由があるか考えてみよう！そして、18 歳に下げた理由も。

《成果》：生徒感想より（一部）
・文章のキーワード（５W１H）を見つけると、記事の内容が簡単に整理できた。
・ネットと違って、興味が無い記事も目にするようになった。これが先生の言う「多面的」という意味だと、なんとなく分かったような気がする。

《課題》：前年度からの目標であった「思考の奥行き（幅を持たせる）・思考の深掘り」まで導けなかった。ワークシートの《チャレンジ》を活用し５W1H から「６W３H」まで考える段階へ発展させたい。記事から得た情報と自身の生活体験と既習を根拠として「Whom How much How many」も考えさせ、文章を組み立てる力（論理力）を育成したい。

○よみとき新聞からみた生徒達（学習者）の興味関心分野

調査方法：よみとき新聞は社会、国際、経済、スポーツなとの 10 分野から４つの記事が掲載される。
毎回生徒がどの分野の記事を選択したか（どの記事が興味・関心をひいたのか）の統計をとり、レーダーグラフ化した。

・３年生普通科８名：４月～12 月
14 回×４＝全 56 記事

	分野	記事の見出し（上位３つ）	得票
1位	社　会（28 票）	**首里城　いよいよ復興工事** **熊本県アサリ２ヶ月ぶり出荷** 全国の落とし物　探せる	5 5 4
2位	環　境（20 票）	使い捨てプラの削減　うながす ５年以内に「1.5 度」こえるかも **国内の食品ロスは 522 万トン**	5 4 3
3位	学　び（14 票）	小中学生「1 人 1 台」整う 不登校の中学生最多 24 万人 大人の学力、どれくらい？	5 3 3

※太文字は２年生と同じ選択記事

３年生：選択分野のレーダーグラフ

社会分野の１位記事（５票）

社会

首里城、いよいよ復元工事

火災から３年

沖縄のシンボル、首里城（沖縄県那覇市）の正殿などが火災にあってから、31日で３年がたちます。復元に向けて準備が進み、首里城の敷地の中に木材を置いたり作業をしたりするための建物が建ちました。11月３日、工事の始まりに行う起工式があります。2026年の完成をめざしています。

木材倉庫などとして使う白い建物が建てられました＝20日、沖縄県那覇市の国営沖縄記念公園　©朝日新聞社

ことば　首里城　1429～1879年に沖縄にあった、琉球王国の王様の城です。政治や文化の中心でした。太平洋戦争で焼失し、復元工事が完了した2019年、火災にあいました。

社会

熊本県産アサリ２か月ぶり出荷

今年２月、外国産アサリが「熊本県産」として産地偽装されて売られていたことがわかり、出荷を止めていた熊本県で12日、約２か月ぶりにアサリの出荷が再開されました。３月下旬に県内の漁場でアサリを検査して、外国産は確認されなかったといいます。12日は、有明海と八代海で計527キロのアサリが収穫され、販売業者へ運ばれました。

２か月ぶりにアサリの出荷が始まり、網が行われました＝12日、有明海　©朝日新聞社

ことば　産地偽装　消費者や業者に対してうそをつき、表示された生産地でつくったり、とれたりした品物であるかのように見せること。

環境分野の１位記事（５票）

環境

使い捨てプラの削減うながす

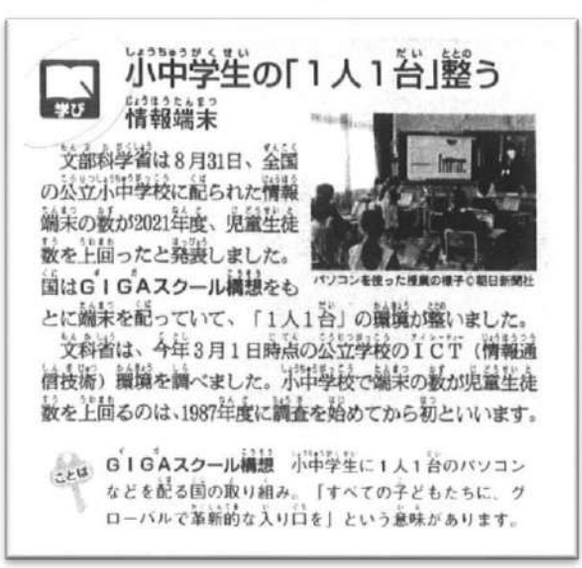
新しい法律が４月１日スタート

コンビニなどが無料で配るフォークなどの使い捨てプラスチック製品を減らし、リサイクルをうながす「プラスチック資源循環促進法」が４月１日から始まります。環境省によると、有料化する企業は一部で、軽くしたり素材をかえたりする企業が多いそうです。

減らす対象となるプラ製品はフォークやスプーン、歯ブラシなど12品目。小売業や飲食店、宿泊業などが目標の設定や配り方の見直しを求められます。

使い捨てプラスチック製品　©朝日新聞社

学び分野の１位記事（５票）



学び

小中学生の「１人１台」整う

情報端末

文部科学省は８月31日、全国の公立小中学校に配られた情報端末の数が2021年度、児童生徒数を上回ったと発表しました。国はＧＩＧＡスクール構想をもとに端末を配っていて、「１人１台」の環境が整いました。

文科省は、今年３月１日時点の公立学校のＩＣＴ（情報通信技術）環境を調べました。小中学校で端末の数が児童生徒数を上回るのは、1987年度に調査を始めてから初といいます。

パソコンを使った授業の様子©朝日新聞社

ことば　ＧＩＧＡスクール構想　小中学生に１人１台のパソコンなどを配る国の取り組み。「すべての子どもたちに、グローバルで革新的な入り口を」という意味があります。

・２年生普通科７名：４月～1月

18 回×４＝全 72 記事

	分野	記事の見出し	得票
1位	社会（33 票）	**首里城　いよいよ復興工事**	5
		熊本県アサリ２ヶ月ぶり出荷	5
		10 月から食品値上げラッシュ	5
		「成人式」多くは 20 歳対象で	5
2位	環境（18 票）	**国内の食品ロスは 522 万トン**	5
		マツダ、温室ガス「実質ゼロ」へ	4
		絶滅危惧種の出品を禁止へ	2
3位	新型コロナ（16 票）	海外からの個人旅行が解禁	6
		中国入国者の隔離は終了へ	5
		解熱剤を買いしめないで	3

※下線太文字は３年生と同じ選択

２年生：選択分野のレーダーグラフ

社会分野の１位記事（５票）：首里城とアサリの記事は省略

社会

10月から食品値上げラッシュ

男性の「産休」制度もスタート

10月に入り、身近な食品で今年一番の値上げラッシュをむかえました。帝国データバンクによると、10月に値上げされるのは約6500品目。今年最多だった８月の約2.6倍にあたります。原材料や原油の値上がりに加え、円安も進み、輸入品の値段が上がっています。

子どもが生まれた後、父親が「産休」を取れる新しい制度もスタート。男性の育児休業の取得をうながすのがねらいで、生後８週間以内に、最長４週間まで取れるようになります。

10月からの値上げを知らせるペットボトル飲料の売り場＝９月30日、東京都大田区　©朝日新聞社

社会

「成人式」、多くは20歳対象で

式典の名前変え　18歳対象の自治体も

９日は、成人の年齢が18歳に引き下げられてから初めての「成人の日」でした。多くの自治体では式典の名前を変えた上でこれまで通り、20歳を対象に「成人式」を開きました。

大阪市天王寺区では前日の８日、「二十歳のつどい」が開かれました。去年までは「成人の日記念のつどい」でしたが名前を変えました。一方で、時期を変えて18歳を対象に式典を開く自治体もあります。

「二十歳のつどい」の参加者たち＝８日、大阪市天王寺区　©朝日新聞社

ことば　**成人の年齢**　おとな（成人）になる年齢のこと。民法で決められていて、2022年４月１日以降、20歳から18歳に変わりました。ただし飲酒や喫煙は引き続き20歳からです。

環境分野の１位記事（５票）

環境

国内の食品ロスは522万トン

20年度　前年度から８％減る

食べられるものが捨てられてしまう「食品ロス」が、2020年度は国内で522万トンにおさえられ、統計を取り始めた12年度以来最少になりました。消費者庁などが推計した数値を発表しました。

前年度に比べ、各家庭が出す量は５％、食品産業が出す量は11％減り、全体で８％（48万トン）減でした。コロナ下で外食やコンビニの弁当などをつくる量が減ったことや、家庭でも食品ロスを減らす意識が高まったためとみられます。

家庭であまった食品の寄付を呼びかけたサッカー・名古屋グランパスの活動　©朝日新聞社

新型コロナ分野の１位記事（６票）

新型コロナ

海外からの個人旅行が解禁

「全国旅行支援」もスタート

新型コロナウイルスを広めないための水際対策が11日から大幅にゆるめられ、海外からの個人旅行が解禁されました。３回のワクチン接種か出国前の陰性証明があれば、入国時の検査も原則いらなくなりました。

政府は11日から、12月下旬までの期間で国内旅行の代金を補助する「全国旅行支援」も始めました。

成田空港に到着した海外からの入国者＝11日、千葉県成田市　©朝日新聞社

○よみとき新聞からみた生徒達の興味関心分野（考察）

「日常生活から生じた疑問を学習へつなげたい」という目的でよみとき新聞を活用していると前述したが、今回初めて生徒達の興味関心分野を分析した結果、次の事が見えてきた。それは「生徒達は、より身近な出来事（ニュース）や自分事として置き換えられる記事（ニュース）に多くの関心を集める」という事である。当然だが、実生活と結びつけられる内容の記事（ニュース）を選択する傾向だ。両学年に共通している「国際」や「政治」を選択する生徒が「ほぼいなかった」という事実から考えても、日常生活との関わりは学習への動機付けとし十分に有効であり、このよみとき新聞は十分にその目的を達成できる手段になりえると考える。だが逆説的に考えると、如何に政治や外国の出来事へ関心を持たせるかが課題とも言えるが・・・。

両学年での異なる点を考えると、3 学年には「学び」の分野が 14 票に対して 2 学年は 9 票であった。新型コロナに関しては、3 学年では 6 票、2 学年では 16 票であった。スポ-ツ分野では、3 学年は 5 票、2 学年は 13 票となった。スポーツ分野に関してはクラス在籍の男女差が一番の背景であると推測できるが、3 学年と 2 学年とを比較すると 3 学年の方が「より社会的な記事」を選択している傾向があることがわかった。

以上の事から、**授業の中で生徒達へ提示する記事内容は、身近な記事（自分事にしやすい内容）から社会的な記事（客観的に問題・課題の内容）へと導いていく手法が効果的であると報告する。**

実践事例２　本土復帰 50 年関連の NIE

１：「5.15・6.23　企画展」（図書館主催）NIE 実践

6.23 慰霊の日に向けた図書館主催の企画展が毎年開催される。本校の人権・平和教育委員会へも協力依頼があり、図書委員へのアドバイザーとして今年も協力させていただいた。

写真①

その１：復帰関連記事の紹介

図書委員がそれぞれ「沖縄本土復帰 50 周年に関連する記事やコラム」をワークシートで紹介した（写真①）。記事を通して図書委員の問いかけに対し、来場者は感想や意見を付せん紙に書くことで、「復帰という出来事」・「沖縄県の現状」についての感想や意見を共有することを目的とした NIE 活動である。

その２：全国紙の比較

今年は復帰 50 年という節目である。4 月 29 日～5 月 15 日までの手に入る限りの全国紙（朝日、毎日、読売、産経）を集めた（報告者の涙ぐましい努力です。県立図書館通いの日々でした）。その新聞記事をもとに、図書委員が「基地賛成」「基地反対」の記事を分け、切り抜き新聞形式で報道の仕方を伝えた（写真②）。

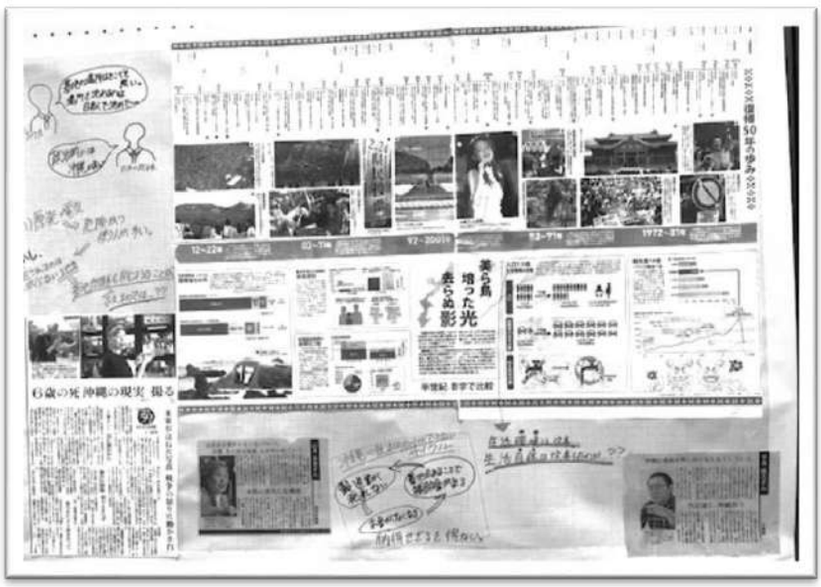
沖縄に関する全国の視点や報道の現状、地元紙との温度差、社説の違いなどを考えることで、**情報リテラシーの育成を目的とした。**また、**メッセージ（新聞）は、受け取る側＝「読む人」を想定して編集されている事にも気づかせたかった。「中立って何だろう」という問いもある。**

写真②　全国紙の沖縄報道比較：基地問題

その３：非テキストの活用

毎日新聞の特集記事「復帰 50 年の歩み」をベースに、関連する他社の記事も貼り付け、切り抜き新聞を作成した。（写真③）

「美ら島 培った光 去らぬ陰　半世紀数字で比較」の特集記事については「分かりやすい」との感想が多かった。**写真や図（グラフ）・イラストなどの非テキストを用いての問いかけは、テキストに対して苦手意識を持っている生徒（学習者）の興味関心を十分に喚起させた。新聞における「特集記事の活用」や非テキストの有効性の事例として報告する。**



写真③

ある図書委員の感想は「（復帰することで県民の）**生活環境は改善したが、生活自体は改善したのか？**という問いを抱き、沖縄県の現状について様々な課題や沖縄県の日本国内での立ち位置や扱われ方など他府県と比べて違う感じがする。どうしてだろう？」と述べていた。是非、この「問い」を入り口として持ち続け、疑問を探究しつづけて欲しい。

その４：全国紙への投稿・・狙い：自己肯定感の醸成、言葉の力に気づく

2022 年３月に朝日新聞より「沖縄県の高校生の声を寄せてほしい」との依頼があり、４月からの授業からは、復帰 50 年に向けた題材や日常生活の疑問などを意識させ新聞への投稿（紙面での意見発表）を前提に生徒と取り組んだ。何度も何度も添削・推敲を重ね、生徒の作品７本を投稿し３本が採用（掲載）された（生徒の皆さん、お疲れ様でした）。全国紙に掲載された事は、彼らにとって大きな自信になったと言える。

朝日新聞　2022年（令和4年）5月2日（月）　13版　オピニオン　6

声 Voice　オピニオン＆フォーラム

地位協定が情けなく恥ずかしい

高校生（沖縄県　16）

僕は沖縄県に住む高校生です。この島の新聞には「性的暴行事件を含む米軍や軍属による犯罪」の内容の記事が1面に出ることが少なくありません。県外の新聞紙面ではこのような事件を報道していますか。4月20日付地元紙によると「1972年から2020年で米軍人・軍属とその家族の検挙件数は6068件」とのことです。もちろんその数字は氷山の一角です。なぜ、こんなにも米軍人らの関係する犯罪が、この島で頻発するのでしょうか。

一番納得できないのは「日米地位協定」です。なぜ米軍やその関係者が日本で犯した罪を、日本の法律で裁けないのですか。誰がこんな協定を結んだのですか。私は今まで自分の国がこのような条件を認めていたことを知りませんでした。情けなく、恥ずかしいです。だからこそ日本国民全体の問題として、この協定で一番被害を受けている沖縄の現状を知って欲しいです。

日本人だろうが米国人だろうが、罪を犯せば平等にその国の法律で裁かれるべきです。有事に守ってもらうという約束があるかも知れませんが、その前に政府は「日常の安全」を保証するべきです。

やんばるの命を守り つなげたい

高校生（沖縄県　16）

私の学校は、やんばるの大自然の中にある、創立77年の県立高校です。普通科と、環境科という珍しい学科があり、全校生徒100人にも満たない学校です。

生徒が少ない分、先生方はひとりひとりの生徒に向き合ってくれます。「沖縄の古い高校は、だいたい捕虜収容所跡地か、その近くに設立された」と先生から教えてもらいました。77年前の悲しい歴史を思い起こしました。二度と繰り返してはいけない歴史です。

教室からは山の緑と海の青さ、空の白さが感じられ、いろんな種類の虫や鳥を通して「命の存在」が感じられます。でも「命を踏みにじる物体」が低空飛行し、その命を脅かしてもいます。

昨年、私の地元、やんばるが世界自然遺産に登録されました。すごくうれしい半面、複雑な思いもあります。やんばるの森にはたくさんのゴミが捨てられています。海では多くの生き物が、マイクロプラスチックなどで死んでいます。そして、返還された米軍演習地からの不発弾。

この森や海にすむ「命」を守り、次世代へつなげたい――。それが私の責任と考えています。

「大宜味村にあるのに、辺土名高校・・なぜ？」と問いかけた。そして「やんばるの自然」に対する思いへつなげた。

「数字やエビデンスを入れた方が説得力あるよ」とアドバイス。意見に根拠を持たせ、現在の課題へとつなげる

2022/05/11 「声」掲載

なぜ小さな島に集中するのか

高校生（沖縄県 16）

私の通う高校は世界自然遺産の中にあります。学校の前にはコバルトブルーの海が広がり、後ろから「やんばるの森」が包み込んでくれます。自然がいっぱいの沖縄ですが、気になるのは、いまだに海に広がる軽石です。海面を漂い、その下で多くの魚たちが死んでしまいました。もうあまりニュースに取り上げられなくなりましたが、まだ被害はなくなっていないことを知ってほしいです。

軽石以上に深刻なのは、戦後77年間、本土復帰後50年間、ずっと続いている「米軍基地問題」です。なぜこんな小さな島に集中しているのでしょうか。いや集中させられているのかもしれません。私たちの学校でもオスプレイの音で授業が妨害されることがあります。基地近くに住む住民の被害はそれ以上に深刻です。

沖縄の人の中にも、基地で働き、生活している人たちがいます。しかし、生活＝経済的問題が障害になっているならば、基地関係収入がなくなっても生活できるように考えてはどうでしょうか。県の経済に占める基地関係の割合は約5％。沖縄に基地は必要ありません。私たちは基地返還地の再開発で成功した例もたくさん知っています。

本島中部の中学校出身。基地の被害（騒音など）を経験。経済と基地の面からの視点をアドバイスした。

2022/05/14 「声」掲載

この島は一体 何に復帰したのか

高校教員 宮城 通就（沖縄県 54）

アメリカ世に生まれ、4歳で大和世に変わった。大学時代に島を離れた。旅先で沖縄出身と言ったら「日本語がお上手ですね」と笑顔で言われた。それまで「母国語は日本語」と信じて疑ったことはなかった。山之口貘の詩「会話」を思い出した。島には「象の檻」があった。日の丸が焼かれた。その頃から「内地人」という言葉の意味を考え始め、僕自身が「外地人」であることを知った。

基地への土地提供を拒否した知事が裁判で負けた。「自治権は神話」との占領者の言葉が蘇った。少女が米兵に襲われた。それでも「協定」は維持されている。ヘリが落ちた。またしても「協定」の壁が姿を現した。「危険だ、返還だ」と騒いだが、本土の日本人の本音はNIMBY（Not in my backyard＝私の裏庭はお断り）だと証明された。

本紙の最近の県民世論調査では、沖縄と本土には様々な格差があるとの見方が89％だった。平和憲法下への復帰にチムドンドン（胸の高鳴り）した日から明日で50年。一体、この島は何に復帰したのだろうか。チムワサワサ（胸騒ぎ）を隠せない。

自己の経験をもとに「沖縄」と「日本・アメリカ」の関係性を述べた。文字数の関係もあるが、推敲されて削除や修正された言葉があることも生徒達に想像させたい。

・投稿を通して生徒達と考えること（考察）

「新聞に自分の名前や意見が掲載された・・・・嬉しいさぁ～」。この感覚（嬉しさ）は、SNS 上で発信することと、何か違うのだろうか？新聞と SNS の相違点を少し考えてみてみた。

共通点は、「自分の事が記事になる。自分の意見が掲載されることで、自分自身が認められた」という自己肯定感が生まれることであろう。言い換えるなら、SNS 上の「いいね」を求める承認欲求が満たされることだろう。

違いは、「他者の眼」というフィルターを通ったものなのかどうか」だと思う。この点が SNS 上の発信と一番違う点だと思える。もちろん、この国は憲法で「表現の自由」が保障されている。しかし、昨今の SNS 上の誹謗中傷（人間を死へ追いやる言葉・書き込み）などからは、「表現の自由をはきちがえているのでは、という感想を抱かざるをえない（現代日本社会の歪みを反映しているのか？）

茶のみ話

拝啓　知事様

宮城通就（54）

あいえーなー　建議書への提案　忘しぃーとたん。基地返還プログラムぬくとぅ　やいびーん。観光立県もてーしちやしがよーさい、なまから「福祉立県」めざしてい　いちゃびらな。

日本ぅてぃ絶対に減らないもの　高齢者と眼鏡やんどー。アミリカーから土地どぅいもどし、あったーぬ住宅、老人ホームかいリフォームやさ。あったー家、バリアフリーやくとぅ、リフォーム代も安っさいびんどー。

耳の大きなネズミのキャラクター遊園地なんか、呼ばんでしむんどー。人生を生き抜いた人たちへの贈り物。芝生の中、映画のような風景の中での最後のうとぅいむち　なとーいびん。

して、アミリカーに提供している3LDK級のマンションやしがよーさい、親子3代なら優先入居やさ。オシー・オバーが孫の面倒見る。オトー・オカーは安心して仕事ないるシステムやさ。ゴーヤーもマンゴーも大和にまねされたしが、この案は大和がはまねないびらん。

大和や、基地ねーらんむん。日本中の高齢者、美ら島んかい集めていいかな。日本中の高齢者の皆さまに年金を落としてもらおう。総理大臣の言葉を借りたら「インベストイン沖縄」やさ。とー、上等話あらに？　福祉立県、くれー命大切にする艦砲喰えぬくさーぬ子孫ぬ魂（使命）やさ。デニーさん、ちぇーやみしぇーが？　大和の皆さま、この案どうですか？　よければアメリカー基地の引き取りから始めてください。

敬具

（宜野湾市、公務員）

2022・6・5　沖縄タイムス

調子に乗って地元紙にも投稿：2022/06/05

「他者への思いやりを忘れた自由は成立するのか」「共感を得られない自由はどこまで許されるのか」、そもそも「人に迷惑かけなければ、いい」の「迷惑」とは何だろう？その「迷惑」を決めるのは「自分」なのか、それとも「他者」なのか？「世間（社会）」なのか？・・・・こんなことを、投稿を通して生徒達と話しています（お互いに問いかけながら、情報リテラシーや言葉のすごさや怖さを勉強しています）。

《しーぶん：おまけ》　掲載辞退した生徒の投稿文、いい内容でした。全文をご紹介できないのが残念ですが、要約すると、「生まれた時から基地がある。祖母からは沖縄は外国だったと聞いた。沖縄本島の「約 15％の土地は、金網で囲まれ県民は入ることが許されず、そこには日本国憲法以上の権利を有する人達が住む外国」がある。私にとって基地は当たり前。「賛成」・「反対」、私にはまだ結論がでません」の内容。不条理や葛藤を実に上手く表現していました。

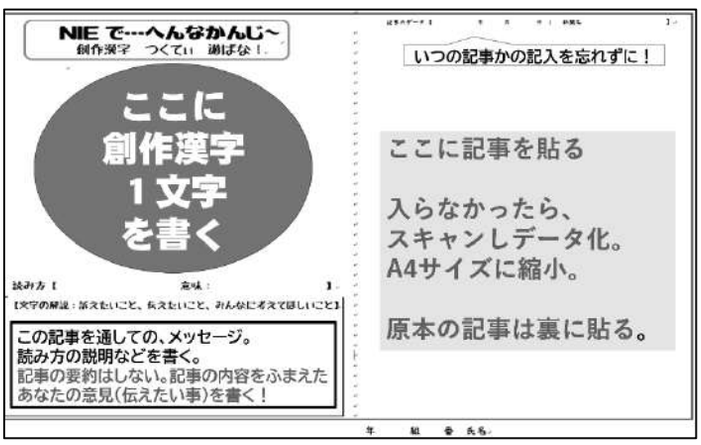
実践事例３　NIE でへんなかんじ～（創作漢字を創ろう！）

タイムス ワラビー
Vol.1260
子どもも大人も めくるワクワク
きょうのもくじ
4・5 おぢらいツブリ
7 学校のデジタル化
8 母度が変えた食卓

新聞読んで
辺土名高 ユニークな授業
漢字創作
生徒が挑戦 発想力キラリ

2022 年 11 月 20 日　ワラビー（沖縄タイムス社）

ワークシート（報告者作成）：A3 版



「新聞からは、社会の課題がみえる」「新聞は、社会や時代を読み解くカギである」をスローガンとして昨年度試験的に実施した「NIE でへんなかんじ～」を、本音度は本格的に実践した。

ゲーム感覚を取り入れた内容の NIE であり、生徒達も楽しく取り組んでいて、その学習雰囲気からは「何かを創造するおもしろさや楽しさ」に気づけているとの印象を抱けた。オススメの NIE 実践です。

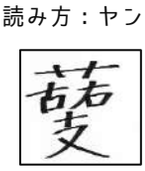
授業狙い	課題発見能力、発想力、想像力の育成 表現力、伝える力、聞く力の育成

《準備》（クラス人数分の新聞：日付は問わない）
《手順》①新聞記事を選ぶ（見出し読みを教える）
②記事の内容をふまえ、その内容を漢字１文字を創作する。（自分のセンスで漢字を創作です、新しい漢字１文字を創る）
③この漢字を通してのメッセージを書く
④共有の時間（1 人 2 分以内のスピーチ）

例１　読み方：ジェンダー

「男」＋「女」＋「人（にんべん）」
メッセージ：
男だから女だからというのは、無くして欲しい。男も女も、同じ人間だ。

例２　読み方：ヤングケアラー



「若」＋「苦」＋支」
メッセージ：
「自分を犠牲にして家族を支える」を美談としてはいけない。貧困は社会構造の問題。自己責任ではない。

留意点：人格攻撃や誹謗中傷するような漢字は NG とする。批評、提言、批判等の違いにも触れる。

読み：サンゴしょう
メッセージ
地球温暖化によりサンゴの白化が進んでいて、・・（中略）これ以上白化が進まないように、真剣に考えて欲しいと思います。

読み：リスク軽減
メッセージ
妊婦にはいろんなリスクがある（中略）お金の問題で医療的ケアを受けられない方々への支援は大切である。まずは母親への支援。

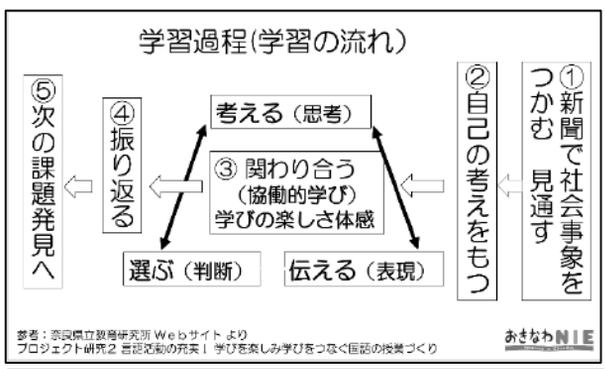
読み：
えんじょうしょうほう
メッセージ
ひろゆき氏の辺野古を巡る言動・やゆした問題についての記事から「偏見」が浮かぶ。炎上商法を表現した。

上の 3 点は本年度の NIE 授業における生徒作品例

・「NIE でへんなかんじ～　創作漢字を創ろう！」（考察）

「現実社会でリアルに起きている課題、直面している課題、気づかないうちに巻き込まれている課題を日常生活と結びつけることで当事者意識（自分事）とさせること」（渡邊巧広島大学大学院准教授：『社会科教育』（明治図書）No 775　p14）の言葉を、この NIE 授業の柱としている。結論として、この NIE 実践からは期待以上の成果（学習効果）を得たと考える。まず学習の雰囲気である。生徒（学習者）が、すごく楽しそうに授業に取り組み仲間といろんなことを話し合うこと（考えを共有すること）ができていた。また、テキストを読むことが苦手な生徒（学習者）も「自由な発想でいい。自分なりの漢字をつくる」というしばりのない状況の下からスタートしたことで、自分のイメージに近い漢字を自ら積極的に探し出す姿が「新発見」であった。漢字は「表意文字」である。表音文字と違い漢字には「意味」がある。そして、彼らは漢字には成り立ちにも興味がわいてきたようだ。そのような点をふまえてメッセージ（伝えたい事）を考えてくれた。既成の漢字（伝えたいことに関連する漢字）を一度偏（へん）や旁（つくり）に分解し、記事を通して考えた自己のメッセージに近い姿に（創作漢字へと）再構築する知的活動である。

つまり、**選ぶ（判断）・伝える（表現）・考える（思考）という「学ぶ楽しさを体感できる NIE 実践」の例であることを報告する（右図）。**持論だが、AI 時代に生きる彼らへ「これからの時代は、自分の思いや意見（考え）の見せ方・伝え方が武器になる」と言い続けている。大発見や大発明なんか必要ない。これまであるもの・あったものの組み直し（再構築）だと。「思い込みを捨て　思いつきを拾え」との言葉を投げかけ、常識を疑い自分なりの問い（発想）を追求しつづけることが、あらゆる物事から学べる姿勢＝生きる力（術）になると投げかけている。この思いを十分に発揮できるこの NIE を今後も継続実践していきたい。



参照：奈良教育研究所 Web サイトより
プロジェクト研究２　言語活動の充実Ⅰ　学びを楽しみ学びをつなぐ国語の授業づくり

実践事例４　２分間スピーチ（受験指導（面接指導）も兼ねた NIE 実践）

NIE　2分間スピーチ

①記事を選ぶ・・・見出し読み
→記事を決める（３～5分）
②2分間スピーチ（2分）
(1)選んだ理由
(2)記事の要約（５W1H）
(3)この記事を通して、考えたこと、伝えたいこと

③評価（感想：コメント）・・・（1分）

NIE を使った進路指導（受験対策）である。具体的には、総合選抜型入試における面接対策用に実践した。もちろん、就職における面接試験にも十二分に対応できる。主に３学年を受け持ち、校務分掌では進路を受け持ったという事もあり前任校で実践していた「NIE で２分間スピーチ」を本校でも実践（25 回程度）した。その様子と成果・課題を報告する。

２分間スピーチの様子

２分間のスピーチ

評価（円グラフで見える化）

《狙い》：NIE を使ったプレゼン技術の向上
聞く（聴く）力の育成

《指導上の留意点：主なもの》

・**見出し読みの指導**：見出しは究極の要約文。記事選びに時間をとられないよう見出し読みさせる。ザーと新聞紙面全体に目を通させ、引っかかった記事を選ばせる。または、**自己の進路に関係する記事を選ばせる（慣れきたらこれが選ぶ基準）。**
・よみとき新聞（５W１H）を声に出しているだけと説明し、人前話すことへの抵抗感を和らげる。
・**２分間**の説明（1分では短すぎ、３分では長い）

クラスメイト全員の前での２分間スピーチ

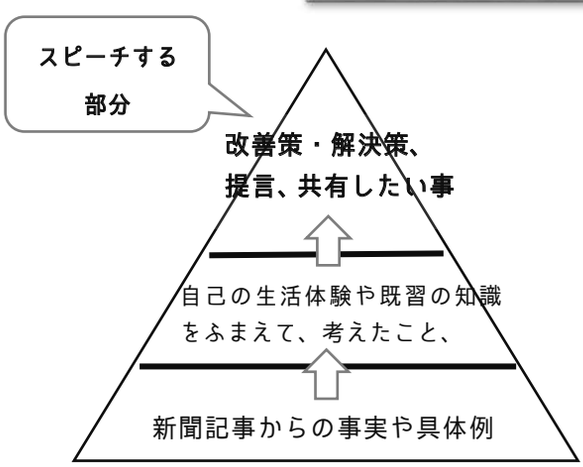
《2 分間スピーチへ取り組むませる環境作り：仕込み》

教育ルネサンス　総合型選抜 2

学ぶ 育む

「自分の言葉」磨く受験対策

その１
教育・学校関連
受験関連の記事利用
（適時配布）



２分間スピーチにおける思考の流れ
（イメージ：報告者作成）
よみとき新聞で育成した力が土台となる

（2022 年 9 月 14 日　読売新聞）

・【「自分の言葉」磨く受験対策】：志望理由の表現力、集団討論や小論文の論理性などを分かりやすく説明している記事を通して、２分間スピーチの有効性を考えさた。

「大学側は実績や結果よりも、そこに至る過程を重視している。あなたは高校生活を一つのストーリーとして自分の言葉で語れるのか？」を投げかけた。（もちろんこの訓練=2 分間スピーチは、就職活動にも有効であることにも触れている）

その２：新聞と受験との関係性の説明

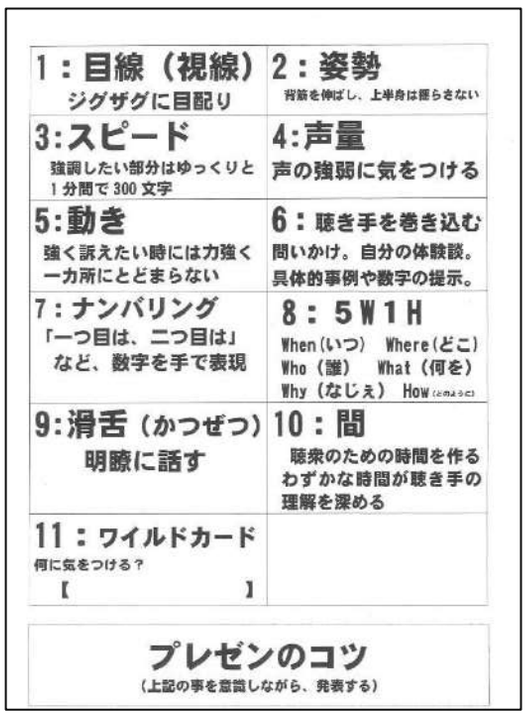
Gakken 読売新聞「大学受験は新聞から！」（2022 年 7 月発行）

大学入試には新聞記事が数多く引用されていること。また、新聞を読むことは、一般入試の対策になるだけではなく総合選抜型や学校推薦型といった入試形式においても有効な対策であるということを紹介（冊子内に記載されたデータを利用し、数字の説得力を実感させた）。

記事のテーマ別出題傾向からは、自分の進む分野ではどのようなテーマが頻出しているのかを理解させ、２分間スピーチで選ぶ時の「記事選択基準」にするようアドバイスを行った。

その３：プレゼン時の具体的技術をアドバイス（右図）

プレゼン（２分間スピーチ）を行う際に気をつけることを表にまとめ、生徒へ提示した。生徒は、表の中の何番を意識するかを、スピーチ毎に決めてスピーチする。この実践では「2分間」という制限があるので、１番、４番６番、７番、９番を意識するようアドバイスした。



1：目線（視線） ジグザグに目配り	**2：姿勢** 背筋を伸ばし、上半身は揺らさない
3:スピード 強調したい部分はゆっくりと 1分間で 300 文字	**4:声量** 声の強弱に気をつける
5:動き 強く訴えたい時には力強く 一カ所にとどまらない	**6：聴き手を巻き込む** 問いかけ。自分の体験談。 具体的事例や数字の提示。
7：ナンバリング 「一つ目は、二つ目は」 など、数字を手で表現	**8：5W1H** When（いつ）　Where（どこ） Who（誰）　What（何を） Why（なじえ）　How（どのように）
9:滑舌（かつぜつ） 明瞭に話す	**10：間** 聴衆のための時間を作る わずかな時間が聴き手の 理解を深める
11：ワイルドカード 何に気をつける？ 【　　】	

プレゼンのコツ
（上記の事を意識しながら、発表する）

（報告者作成：プレゼンのコツ一覧表）

《成果》：生徒感想より（抜粋）

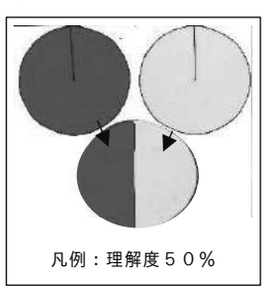
・やってよかった、よみとき新聞（笑）。
・限られた時間内でスピーチすることで、伝えたい事を伝えるには、どうしたらいいかの方法を考えさせられました。
・人前で話すことに対して、ハードルが下がった。
・人前で話すことに、前よりかは、あまり緊張しなくなった。
・志望理由とか、丸暗記じゃなくてしっかりと頭で考えて言えるような気になってきた（ストーリーが浮かんできた）。
・プレゼンにはテクニックがあることを知った。例えばナンバリングを使えば、面接でパニックにならない気がする。言いたい事（伝えたい事）が整理できて、落ち着ける。
・スピーチを聞いてる人の気持ちが分かった。相手が何を聞きたいかを考えてスピーチする方が、伝わりやすいと思った。
・手作り円グラフで評価を「見える化」したので、相手からの気持ち（評価）が分かりやすかった。
・先生が言っていた「場数をこなすと感覚でわかる」と言うことが分かってきた（２分という時間の長さの感覚）

《考察・課題》

２分間スピーチに対し当初は抵抗感を抱いていた生徒達も、その必要性を説明していくうちに（前述した環境作り）、徐々にこの活動の意味を理解し受け入れ始め、５回目ぐらいからは楽しんで取り組んでいた。受験や就職活動における術の１つであると認識していた生徒達だったが、１０回目前後からは「自分の話をちゃんと聞いてくれていることへの嬉しさ・充実感」を感じていたのではないか。最初は自分のスピーチばかりに気を遣っていた。しかし感想にもあるような「聞いている人の気持ちが分かった」と言う記述からも、このスピーチが単なる主張ではない活動であり、「コミュニケーションって面白いんだ」という事に気づけたのではないかと思える。

また、相手を評価することに対しても、授業者は丁寧に生徒（学習者）が抱いている先入観を取り除くことも必要であることも付け加えたい。

「評価する」ことを、上から目線で意見する等のネガティブな先入観を抱いている生徒（学習者）は少ない。「自分も何を言われるか怖いから本音が言えない」との心の内を打ち明けてくれた生徒（学習者）もいた。このような状況下で私の考えた手製の「評価見える化グラフ」（写真④）を使い、評価への抵抗感を低めた。つまり、自分の理解度が度をグラフ化することを通して相手に伝えたのである（自分の理解度を評価した。つま低ければ、それはスピーチ側の伝達方法にも検討する余地があるということ）。また、「討論」と「対話」の違いや、「批判」と「批評」の違いなども一緒に考える絶好の機会となった。**NIE を使った２分間スピーチではコミュニケーションの目的をも考えさせると同時に、受験対策にも効果的であり、Ｚ世代の悩みである人間関係のジレンマ（距離感）も学ぶことができ、一石三鳥の学習効果が得られたことを報告する。**



凡例：理解度５０％

写真④

2023 1/15 沖縄タイムス

海洋博から出題

共通テスト日本史
新聞見出し読み取る

課題としては、すべての教育活動に共通するが「やらされている感」をいかに払拭できるかという点である。２分間スピーチはまさに「主体的・対話的な言語活動」そのものと思えるので、この点は常に留意していきたい。

次年度使える「新聞と受験」のネタ記事→
（2023/1/15 沖縄タイムス 26 面）

おわりに

以上が 2021・2022 年度沖縄県 NIE 推進協議会指定実践研究校テーマ「NIE でちゅ～がなびら ～感じてぃ考げーてぃ 語やびら（伝えユン）～」の 2 年間実践報告である。この実践研究の目標の柱は、学習の三要素＝「自己との対話・テキストとの対話・他者との対話」を身につけさせることであると「はじめに」の部分で述べたが、2 年間の実践事例を通して**「学習手法としての NIE がいかに有効性であるか、学習の拡がり・思考の深掘りにおいて、いかに可能性を秘めているか」ということを、自信を持って報告できたと結論づけたい。**一番の収穫は、2 分間スピーチを通して「人の話にしっかりと耳を傾けることのできる子を育てるべし」という関浩和氏（兵庫教育大学大学院教授）の言葉を実践できたことである。この成果を励みに NIE を手段として、これからも生徒達（学習者）の「聞く力」を「聴く力」へと育てていきたい。

本校における 2 年間の NIE 活動についてその経過を説明するならば、NIE という戦術（手段）を用いて「学習の三要素を身につけさせ」、そして「思考停止の人間を作らない」ことを戦略（最終目的）とするという教育・学習活動であった。換言するなら「考えることをあきらめない子」「考えることから逃げない子」の育成である。生徒達（学習者）に自分自身の人生を生きていく力として「何事からも学ぶ姿勢」を身につけさせたいのである。ポストコロナ社会、収束がみえないウクライナでの戦争、東アジアにおける米中大国の緊張状態・覇権争い、それを受けての戦後日本安全保障政策の大転換、待ったなしの少子化対策・子育て政策、そして安保増税や世界情勢に起因する物価高などの経済的不安要素が追い打ちをかける現在の社会情勢のなかで、「いかに生き抜くか」が重要なことだと考えているからである。

ところで、今後も NIE 活動を実践していく上で気になるニュースが 2 つほどあり、頭を離れない。1 つめは、【「ニュース砂漠」広がる】の記事（写真⑤）であり、2 つ目はネットニュースで配信された【「1 年で 200 万部減「新聞離れ」は止まらず「一般紙」は 15 年後に消える勢い」】（表 1）である。1 つ目の記事において危惧される事は「政府や企業の腐敗」である。ジャーナリズムの重要な役割である「権力の監視機能」が無くなった社会はどのようになるのか、未来社会からの留学生である生徒達（学習者）と考えなければいけない喫緊の課題を問いかけた記事だと思える。

米国地方紙 2514紙廃刊
17年間で3割減少「ニュース砂漠」広がる

写真⑤　2022 年 9 月 3 日　琉球新報（9 面）

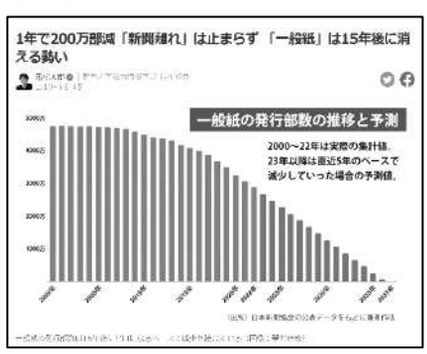


表 1　Yahoo!news 2023 年 1 月 1 日配信
亀谷松太郎 関西大学総合情報学部特任教授

2 つ目は、紙媒体の新聞が消滅するという予測である。「インターネットとデジタルデバイスの普及によって、ニュースを知る手段としての新聞の必要性が大きく減っており」「制作や配送コストなども高く、廃れるのは避けられない」「新聞を支えている高齢者世代が衰え、新聞を購読できない状況になっていくと考えられる」「新聞社が生き残るためには DX（デジタル・トランスフォーメーション）が必要」等の内容の記事である。

GIGA スクール構想、2024 年度から国が本格導入を目指すデジタル教科書、学習用端末と紙媒体との入れ替わりが始まる。部分的な導入から始まるが、デジタルとアナログのそれぞれの利点を上手く活用できる NIE 研究が急がれている。学習者の読解力などは、紙媒体が優位という結果は周知の事実だが（理解力についての記事：2022 年 5 月 10 日読売 15 面、読解力についての記事：2022 年 9 月 4 日沖縄タイムス 19 面：写真⑥）、NIE 授業においてもデジタル手法の導入は避けて通れない流れだ。

読解力、デジタルより紙
広島大などが初調査

写真⑥　2022 年 9 月 4 日　タイムス（19 面）

時代の流れを受け入れつつ、生きた教科書である新聞（紙媒体）を通して活字体験をさせていきたい。学習者のガチ（切実な思い）を引き出し、主体的・対話的な学習を展開することで、彼らに「生きる力」・「学ぶ姿勢」のタネを植え付けたい。それは「どうしようもない時に、どうにかしよう」と行動できる人間になって欲しいからである。そのためにも授業者自身は、「授業ｺｰﾃﾞｨﾈｲﾄ力」や「読解力を鍛える授業デザイン力」、「思考を深める発問力」を探究し続けていく事が大切であると実感した 2 年間であった。（了）

辺土名高等学校　地歴・公民科教諭　宮城通就

2022 年度 NIE 実践報告書

ヒューマンキャンパス高等学校
校長：前田 孝実
教諭：森田 百合奈

1.はじめに

本校では、2019 年度から NIE 実践指定校に認定され、通信制高校初の実践校となる。本年度は認定校として 4 年目にあたる。当校は広域制通信制高校のため、本校スクーリングにて全国の生徒と関わる機会が多い。その中で新聞を通して、沖縄県の興味関心に繋げるとともに、新聞を身近に感じ、それぞれの生まれ育った地方や日本の新聞にも関心が持てるよう実践してきた。現代社会ではインターネットが普及し、スマートフォンやパソコンを使用して自分の興味関心のある分野のみ情報収集する生徒が大多数を占めているが、この NIE を通して新聞から日常では出会わない話題や情報を集め、広い視野を養っていけるよう取り組んでいる。

2.本校の取り組み

①授業実践（生物基礎・政治経済・総合的な探究の時間）

・広域制通信制高校のため、本校スクーリング（沖縄県）にて全国の学生へ同様の授業内容を複数回実施。

（1）理科（生物基礎）　授業者：比嘉 大樹

時間	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価方法
5 分	・自己紹介 ・導入発問をする。	・授業のねらいを説明する。	
15 分	・やんばる地域の動植物の生態について説明する。（ノグチゲラ・ケナガネズミ・アダン・ヘゴ・クワズイモ等）	・紹介する動植物の詳細をパワーポイント、動画、実物を活用して説明する。 ・やんばる地域の生物多様性が評価され、（〇〇）に登録されたことを知っているか問いかける。	
25 分	・沖縄、奄美を含む 4 つの地域が世界自然遺産に登録された内容を説明する。 ・生物多様性がなぜ高いのか ・世界自然遺産に登録されたが、今後の課題について生徒とともに考える。	・新聞記事を見せる。 ・ワークノートを人数分配布準備	
5 分	・まとめ	・ワークシートを記入、回収。 ・授業で気づいたこと、わかったこと等を、数名に発表させる。	

●授業風景

（2）社会（政治経済）　授業者：仲吉 真理

時間	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価方法
導入 20 分	・自己紹介 ・主権者教育として選挙について話題を出す。 冊子配布、及び新聞記事とともに世論操作やメディアリテラシーについて説明し、自身の意見をきちんと持って投票することを伝える。 ・生徒に向けて学習に向かう心構えを伝える。	・新聞記事（防衛省が世論工作研究、AI を使用し、SNS で誘導）について見解を説明し、生徒へ感想を聞く。 ・ワークシートを配布する	
展開 25 分	・ 景気変動と物価変動について （インフレーション・デフレーションを説明する。） ・資産運用について 自身の資産計画を立てて、意識づけを行う。 自身の生活に景気変動と物価変動が関わることを実感させる。	・生徒の理解度を確認しながら進める。	
まとめ 10 分	・ワークシート記入	・記入内容を確認しながら回収。 ・授業で気づいたこと、わかったこと等を、数名に発表させる。	

●授業風景

（3）総合的な探究の時間　授業者：森田 百合奈

1．単元設定の理由

・正しい情報を得るためには新聞は大切な情報源であることを知り、新聞を身近に感じてもらう。

・進路指導として新聞から情報を読み取る力や時事問題への興味関心を深める。

2．本時の目標

ア.高校生の新聞購読者数の現状を知る。

イ.新聞の種類や自身の住んでいる地域との違いを知る。

ウ.興味関心のある記事についてワークシートへまとめる。

3．教材　新聞・パワーポイント・ワークシート

4．本時の展開

時間	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価方法
5 分	・自己紹介	・授業に入りやすい雰囲気づくりに努める。	

15 分	・新聞を読むとどのようなメリットがあるかを説明する。 （新書以冊分の情報が得られる、受験勉強に有効） ・日本の新聞の種類を説明する。 ・新聞の値段について	・普段の自分の新聞とのかかわりを考えさせる。 ・進路と合わせて新聞の活用の重要性を考えさせる。	
25 分	・新聞を実際に読んでみよう。 ①「琉球新報」「沖縄タイムス」を読みながら、自分の住む地域との違いを知る。 ②沖縄についての気になる記事を選び、ワークシートにまとめる。	・地域面、お悔やみ情報など沖縄と他の地方との違いについて紹介し、生徒の興味をひく。 ・沖縄に関する記事に絞ってワークシートをまとめさせる。 ・記事を決められない生徒に対して、声かけを行う。	
5 分	・まとめ （感想を記入させる。）	・ワークシートを記入、回収。	

※撮影なし

3.まとめ

実践４年目を迎えましたが、昨年度に続き、新型コロナウイルス感染拡大を防ぐため、新聞を活用したグループワークを実践することが難しい現状であった。その中でも全国の学習センターの学生へ情報収集の一つとして、また生活の一部としてぜひ新聞を活用してほしいという願いを込めて、新聞の素晴らしさを授業で伝えた。

また県外の学生より自身の地域の新聞と沖縄の新聞の違いや文化の違いに触れ、地方の新聞や日本の新聞にも興味を持ち、さらに興味関心を持ってもらえた授業となった。

学生はもちろん指導する教職員についても新聞の魅力に気付くことができ、次の世代へと新聞の魅力を伝えていくきっかけとなった。

令和４年度　NIE 実践報告書

県立桜野特別支援学校
比　嘉　　美　保
（NIE アドバイザー）

Ⅰ　はじめに

本校は肢体不自由と病弱を障害種とした特別支援学校である。当該学年に準じた教育を受ける児童生徒から、重度心身症の子どもまで、幅広い実態の児童生徒が在籍している。また、障害の軽重に関わらず、医療的ケアを要する子どもたちが多く学んでいる点も特徴の一つである。そのため、我々は常に児童生徒の体調の変化を敏感に察知できるよう細心の注意を払いながら授業を行っている。

本校に赴任してからの５年間、私は主に中度から最重度知的障害を有する中学部生、高等部生の国語の指導を担当してきた。この間、特別支援教育界で大きく変化した流れがある。それは教科学習を見直す動きが活発化したことだ。本校においても児童生徒の障害の実態に関わらず、教科の学びを保障すべく指導しているところである。

肢体不自由及び病弱教育の対象となる本校の子どもたちは生活圏が限定的になりがちで、年齢相応の生活経験が不足しがちになる。生活経験は言わば学習の素地であり、知識と知識を結び付けるジョイントの役割を果たす。加えて知的障害を併せ有する児童生徒も多く、記憶力や抽象的概念の形成、知識の般化等の課題も生じやすい。これらの課題をもつ本校の児童生徒に対してＮＩＥを実践する意義は何か、どのような価値があるのかを、準ずる教育対象生や軽度知的障害の生徒たちの実践事例も交えて報告していきたい。

Ⅱ　実践

事例Ⅰ　新聞活用

（Ⅰ）対象

中学部、高等部Ⅱ課程（知的代替の教育）

（２）教科

国語（書くこと、読むこと）

（３）単元名

平和学習「うれしい　たのしい　いのち」　『大漁』（金子みすゞ）

（４）目標（つけたい力）

詩と慰霊の日の写真に触れ、喜びと悲しみの気持ちを理解する。

（５）新聞を活用した指導内容とねらい

慰霊の日の写真（下図赤枠）と感情カードのマッチングを通して、大切な存在を失った普遍的な悲しみを感じ取る。

（６）学習の様子

①　登場人物や礎に手を合わせる老女の写真を見て、泣きまねをしたり手を合わせたりする仕草をしていた。

②　感情カードに対応した作品中の登場人物や写真の老女を指さしし、同じであることを伝えることができていた。

事例２　新聞作成

（１）対象

中学部・高等部Ⅱ課程・Ⅲ課程（知的代替の教育）

（２）教科

国語（書くこと）

（３）単元名

「学習発表会新聞を作ろう」

（４）目標（つけたい力）

写真等を使って経験したことを思い出し、自分の気持ちを表現することができる。

（５）学習の流れ

①　自分が出演した写真の中から好きな写真を選択する。

②　選んだ写真の感想を教師に伝える。

③　教師の手添えを受けながら、文字を書く。

④　教師と一緒に紙面に写真と書いた文字を貼り付けてレイアウトする。

（６）学習の様子

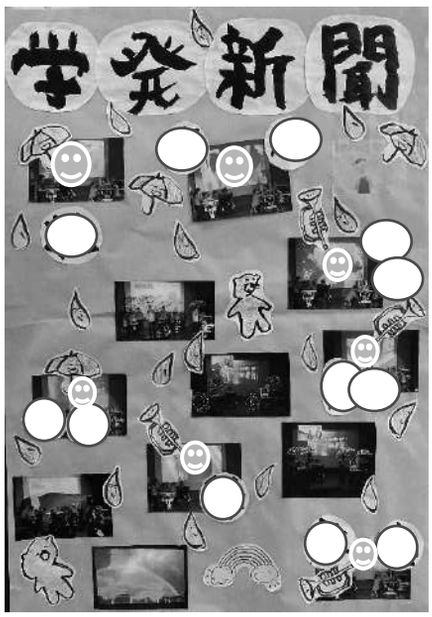
①　「新聞って何？」と尋ねると、そばにある本物の新聞を指さししたり言葉で答えたりすることができていた。

②　「新聞を作るよ。写真を選んだ後、感想を書こうね」と伝えると、活動内容を理解し、笑顔で返事をしていた。

③　レイアウトの際、自分の写真の位置を指さしして指定していた。

④　廊下に掲示する際はとても嬉しそうにしていた。また、他の教師に新聞を見るよう促す様子が見られた。

⑤　祖父母や旧担任に送る年賀状に、縮小印刷した新聞を貼り付けて送った。



事例３　新聞活用

（１）対象：中学部、高等部Ⅱ課程（知的代替の教育）

（２）教科：社会

（３）単元名：『5.15　沖縄復帰５０年　～変わらないものはなんだろう～』

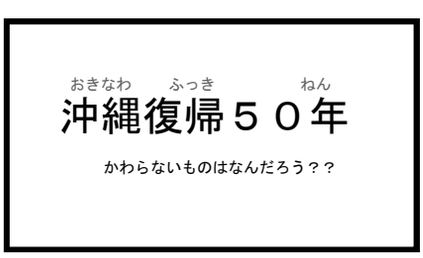
（４）目標（つけたい力）：本土復帰前後の沖縄の社会を比較し、今も沖縄に残っている課題を知るとともに、身近な生活に影響している事柄に気付く。

（５）新聞を活用した指導内容とねらい

沖縄の戦後から現在までの出来事を時系列に、且つ、視覚的に理解できるようマンガを活用した。視覚認知に課題のある生徒に紙面のマンガ全部を提示すると見えづらさにつながるため、PP で１コマ～３コマずつ提示した（下図）。

（６）学習の様子

対象生の指導にあたっては、より身近で体験的な学習活動の中から知識や技能の習得が図られるよう配慮している。今回のマンガは生徒たちに受け入れやすい教材となった。歴史の理解や課題の気付きの到達までには繰り返しの授業が必要ではあるが、一コマ一コマの事実について意見をもったり驚いたりする様子が見られたことは、沖縄の歴史を学ぶ入口として意義深かったと思う。



事例４　新聞活用

（１）対象：中学部、高等部Ⅰ課程（準ずる教育）、Ⅱ課程（知的代替の教育）

（２）教科：道徳　「C　集団や社会との関わり　伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」

（３）単元名：『沖縄の文化』

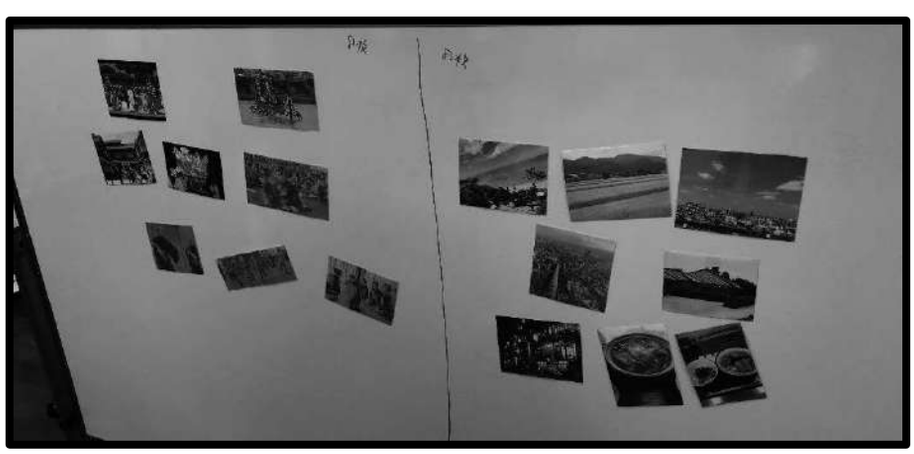
（４）目標（つけたい力）：本土との比較を通して衣食住や芸能等、日常生活の中にある沖縄の文化に気付き、関心を高める。

（５）新聞を活用した指導内容とねらい

沖縄の文化を象徴する写真の活用を通して、視覚的に身近な伝統文化を整理する（下図）。

（６）学習の様子

沖縄の文化と他地方の文化を象徴する写真をランダムに提示し、テーマを予想しながら２つのグループに分ける学習活動を設定した。分別の基準に気付くまで様々な試行錯誤があったが、本土で生まれ育った生徒の発言で、沖縄独自の文化に気付く生徒の姿が印象的な授業となった。



Ⅲ　まとめ

１　成果

（１）生活経験が不足しがちな生徒の学習指導において、写真記事の活用により、生徒が主体的に考え発言する様子が見られるようになった。

（２）新聞の活用を通して、生徒が日常生活と社会生活とのつながりを実感する姿が見られた。

２　今後の課題

（１）時事を反映した記事はスピード感をもって教材化し、興味や関心をより高められるようにする。

（２）手指麻痺のある生徒や視覚認知に課題のある生徒が多いため、記事の提示には工夫が必要。

（３）授業での実践を校内の職員に公開し、NIE の活用方法や効果について理解してもらえるようにする。

【沖縄県ＮＩＥ推進協議会組織（２０２２年度)】
＜会長＞　仲村守和（元沖縄県教育長）
＜副会長＞　宮城栄作（沖縄タイムス社編集局長）
島洋子（琉球新報社編集局長）
＜顧問＞　山内彰（元沖縄県教育長）
武富和彦（沖縄タイムス社代表取締役社長）
普久原均（琉球新報社代表取締役社長）
＜ＮＩＥアドバイザー＞
甲斐崇（西原町教育委員会指導主事）
佐久間洋（恩納村立恩納小学校教頭）
國吉美穂（興南中学・高校校教諭）
松田美奈子（沖縄市立コザ中学校主幹教諭）
宮城英誉（名護市立大宮小学校教諭）
比嘉美保（沖縄県立桜野特別支援学校教諭）
宮城通就（沖縄県立辺土名高等学校教諭）
新垣孝子（糸満市立糸満中学校教諭）
＜事務局長＞高崎園子（沖縄タイムス社編集局ＮＩＥ事業推進室事務局長）
※事務局は沖縄タイムス社と琉球新報社が２年交代で担当
＜会員社＞沖縄タイムス社▷琉球新報社▷宮古毎日新聞社（那覇支社）▷八重山毎日新聞（那覇支局）▷朝日新聞社（那覇総局）▷毎日新聞社（那覇支局）▷読売新聞社（那覇支局）▷日本経済新聞社（那覇支局）▷共同通信社（那覇支局）▷時事通信社（那覇支局）

【沖縄県ＮＩＥ運動の経過】
＜１９９６年（平成８年）＞
「沖縄県ＮＩＥ連絡会」結成
７月２５日　第１回ＮＩＥ全国大会（東京都）。新聞社員２名、県教育庁指導主事２名が参加
＜１９９９年（平成１１年）＞
日本新聞教育文化財団によるＮＩＥ実践指定校に那覇市立松島小、同古蔵中、県立首里東高。※翌年以降の実践指定校は別紙一覧表に掲載
＜２０００年（平成１２年）＞
２月２６日　県ＮＩＥ連絡会を母体に「沖縄県ＮＩＥ推進協議会」設立総会。全国３３番目。初代会長に津留健二元教育長。事務局を沖縄タイムス社に設置
７月２７日　ＮＩＥ全国大会（神奈川県）参加
＜２００１年（平成１３年）＞
３月１６日　県ＮＩＥ推進協議会総会。津留会長再任

７月２６日 ＮＩＥ全国大会（兵庫県）参加
＜２００２年（平成１４年）＞
４月５日　県ＮＩＥ推進協議会総会。津留会長再任
８月１日　ＮＩＥ全国大会（北海道）参加
＜２００３年（平成１５年）＞
３月２７日　県ＮＩＥ推進協議会総会。会長に渡久地政吉元那覇市教育長。事務局を琉県球新報社へ
７月３１日　ＮＩＥ全国大会（島根県）参加
＜２００４年（平成１６年）＞
７月　日本新聞教育文化財団が「ＮＩＥアドバイザー」制度を発足。県内から兼松力教諭が認定される
７月２９日　ＮＩＥ全国大会（新潟県）参加
＜２００５年（平成１７年）＞
３月２０日　「日本ＮＩＥ学会」が発足
４月２７日　県ＮＩＥ推進協議会総会。渡久地会長再任。事務局を沖縄タイムス社へ
７月２８日　ＮＩＥ全国大会（鹿児島県）参加
１１月７日　初めての「ＮＩＥ週間」実施
＜２００６年（平成１８年）＞
５月２５日　県ＮＩＥ推進協議会総会。渡久地会長再任
７月２７日　ＮＩＥ全国大会（茨城県）参加
＜２００７年（平成１９年）＞
県ＮＩＥ推進協議会総会。会長に山内彰元県教育長。事務局を琉球新報社へ
７月２６日　ＮＩＥ全国大会（岡山県）参加
１１月１０日　「沖縄県ＮＩＥ実践フォーラム」を初開催（琉球新報社で）
＜２００８年（平成２０年）＞
７月３１日　ＮＩＥ全国大会（高知県）参加
１１月８日　第２回県ＮＩＥ実践フォーラム開催（沖縄タイムス社で）
＜２００９年（平成２１年）＞
４月１７日　ＮＩＥ実践中間報告会（琉球新報社で）
５月９日　ＮＩＥワークショップ（琉球新報社で）
５月１８日　県ＮＩＥ推進協議会総会。山内会長再任。事務局を沖縄タイムス社へ
７月３０日　ＮＩＥ全国大会（長野県）参加
１０月３１日　第３回県ＮＩＥ実践フォーラム開催（琉球新報ホールで）
＜２０１０年（平成２２年）＞
３月５日　ＮＩＥ実践最終報告会（沖縄タイムス社で）
３月８日　山内会長、岸本沖縄タイムス社長、高嶺琉球新報社長らが県教育長を訪問し、

大城浩統括官にＮＩＥへの一層の理解と連携を要請

４月　財団指定の実践校「奨励枠」に県内から初めて北中城村立北中城小学校、宜野湾小学校（ともに０９年度指定）を推薦し、認定される

５月１４日　ＮＩＥワークショップ（沖縄タイムス社で）

６月１日　県独自指定校制度が発足。協議会が４校を指定し、沖縄タイムス・琉球新報２紙を提供開始。１０年度はうるま市立比嘉小学校、豊見城市立豊見城中学校（以上０９年財団指定校）、うるま市立石川中学校、与那原町立与那原中学校（以上新規）

６月５日　九州地区事務局長会議・アドバイザー会議（熊本市）に与那嶺功事務局長、兼松力アドバイザー出席

６月２９日　県ＮＩＥ推進協議会総会。山内会長再任

７月２９日　ＮＩＥ全国大会（熊本県）参加

１１月６日　第４回県ＮＩＥ実践フォーラム開催（沖縄タイムス社で）。教育関係者、保護者ら２００人が参加した。越来小が国語の公開授業。記念講演は作家の大城貞俊さん（琉球大学准教授）。兼松力教諭（ＮＩＥアドバイザー）、古波津聡越来小教諭、山城銀子小禄南小校長、奥村敦子沖縄タイムス社学芸部デスク、佐藤ひろこ琉球新報社教育担当キャップをパネリストに、佐久間洋宜野湾小教諭をコーディネーターにシンポジウム「新学習指導要領とＮＩＥ」を行った

＜２０１１年（平成２３年）＞

２月９日　日本新聞教育文化財団の枝元一三コーディネーターを招いた特別講演会「新学習指導要領とＮＩＥ」（主催＝読谷中、喜名小、共催＝県ＮＩＥ推進協議会）を読谷中学校体育館で開催。村内の教職員ら約１２０人が参加した

２月１０日　金武正八郎県教育長に要請活動。山内会長、中根学沖縄タイムス社編集局長、玻名城泰山琉球新報社編集局長、兼松アドバイザーらがＮＩＥ活動への理解と協力を要請した

４月　２０１０年６月にパイロット事業としてスタートした沖縄タイムス社と琉球新報社による県指定校制度の継続を確認。５校を上限に指定予定

６月１７日　県ＮＩＥ推進協議会総会。事務局が琉球新報社へ

７月２４日　ＮＩＥ全国大会（青森県）。教師・事務局１３人、取材記者４人が参加

８月２日　ＮＩＥアドバイザー就任要請。山内会長らが４校訪問

９月１４日　日本新聞協会ＮＩＥ専門部会で仲程俊浩氏、佐久間洋氏、甲斐崇氏のＮＩＥアドバイザー認定が了承される

１０月１７日　日本新聞協会主催「第２回いっしょに読もう！新聞コンクール」の地域審査（琉球新報社で）

１１月１２日　第５回県ＮＩＥ実践フォーラム（那覇市立小禄南小学校で）。全２６学級で公開授業。保護者６００人を含む７５０人が参加

１２月１０日　県中学校総合文化祭。中学生が速報発行、両新聞社が支援。ＮＩＥ展示ブ

ースも設置。１１日まで
＜２０１２年（平成２４年）＞
２月１５日　大城浩県教育長を訪問（山内会長、アドバイザー、両新聞社編集局長）。夏休みの短期講座の開催、全国大会への職員派遣を確認
３月５日　ＮＩＥ実践最終報告会（琉球新報社で）
４月２１日　県ＮＩＥ研究会発足。教員主体の研究組織を目指す。当面、新聞社主催の講座に合わせて会合を開く
６月２２日　県ＮＩＥ推進協議会総会。地元２社の会費の増額を承認（６万円から１０万円に）。他の加盟社の会費増額は次年度総会までに議論することにした
７月３０日　ＮＩＥ全国大会（福井県）参加。県教育庁から職員３人が参加
７月・８月　県立総合教育センターで初の教員向け研修。７月２７日に短期研修講座・小学校社会科講座の一部として佐久間アドバイザーが講師。８月３日は中学校社会・高校地歴公民講座の一部として兼松アドバイザーが講師
１１月３日　第６回県ＮＩＥ実践フォーラム（うるま市立中原小学校で）。県教育委員会、うるま市教育委員会の後援を得た。特別支援を含む全学年全学級で公開授業を行い、保護者や教育関係者、新聞関係者計８００人が来場した。教師向け、保護者向けのワークショップ（分科会）も開催し、兼松・佐久間・甲斐アドバイザーが講師
＜２０１３年（平成２５年）＞
１月２０日　教師向けメーリングリスト開設
２月２０日　大城浩県教育長を山内会長らが訪問。全国大会への職員派遣、行政主催の研修へのＮＩＥ採用に謝意を述べた
３月６日　実践報実践報告会（琉球新報社で）。協会指定、県指定１０校のうち９校が報告した
４月　県立総合教育センターの出前講座にＮＩＥが開設。甲斐崇研究主事（ＮＩＥアドバイザー）が担当して校内研修や児童生徒の授業に対応開始
５月１１日　教師向け研修会「第１回おきなわＮＩＥセミナー」開催。昨年度まで新聞社主催だった講座を推進協主催に。原則として偶数月に開催する
５月２４日　県ＮＩＥ推進協議会総会。会費、会則の変更を了承。会費は地元２社１０万円から１５万円に、全国紙４社３万円から４万円に、通信社２社１万円から３万円に、宮古・八重山２社３万円据え置き。役員では副会長を１名から２名とし、地元紙２社の編集局長を充て、任期を１年から２年とした。再任を妨げないことは従来通り。事務局が沖縄タイムス社へ
７月２５日　ＮＩＥ全国大会（静岡県）参加。県教育庁が前年に続いて職員を派遣し、県内の教育関係者、新聞社関係者らが参加
７月３０日　金武町教育委員会が主催する教員研修に４人のＮＩＥアドバイザーを派遣
８月１３日　県中頭教育事務所が主催する１０年経験者研修の選択研修でＮＩＥが取り

入れられ、２０人が受講。推進協に講師派遣依頼があり、兼松、佐久間両アドバイザーが校種に分かれて講師を務めた

１１月３０日　第７回実践フォーラム（県立総合教育センターで）。沖縄市立コザ小学校の４年生、５年生が公開授業。パネルディスカッションは実践校の教員、県教育行政、教育センターからパネリスト・コーディネーターを招いて議論を深め、新聞社による新聞解育センターからパネリスト・コーディネーターを招いて議論を深め、新聞社による新聞解説・ワークショップもあった。約１５０人が参加。※古波津聡沖縄市立コザ小学校教諭が５人目のＮＩＥアドバイザーに承認

＜２０１４年（平成２６年）＞

２月６日　山内彰会長、玻名城泰山琉球新報社取締役編集局長、武富和彦沖縄タイムス山内彰会長ら７人が県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問

３月４日　実践報告会（沖縄タイムス社）１２校が発表。ほか２校が紙面発表。県指定校の拡大にともない、過去最大の報告校数になった

５月２４日　九州アドバイザー・事務局長会議を沖縄で開催（沖縄タイムス社）。沖縄からは推進協発足の経緯やフォーラム開催などの活動報告、教育センターにＮＩＥ出前講座が盛り込まれたことなどを報告

６月２８日　６月のおきなわＮＩＥセミナーから、セミナー開催前の午前中に実践教員に呼び掛けて「研究部会」を開催。それぞれの実践を持ち寄り、情報交換

７月３１日　ＮＩＥ全国大会（徳島県）参加。８月１日まで

１１月１日　第８回実践フォーラム（県立総合教育センターで）興南中学校の国語の公開授業、授業研究会を行った。約５０人が参加

＜２０１５年（平成２７年）＞

２月１３日　山内彰会長、副会長の武富和彦沖縄タイムス社取締役編集局長、潮平芳和山内彰会長、兼松アドバイザー、佐久間アドバイザーが県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問

３月２日　実践報告会（沖縄タイムス社）日本新聞協会指定のうち、指定最終年の名護実践報告会（沖縄タイムス社）日本新聞協会指定のうち、指定最終年の名護市立真喜屋小、興南中学・高校、那覇市立小禄南小から報告を受け、３グループに分かれて報告の内容や日頃の実践について意見交換

５月１９日　県ＮＩＥ推進協議会総会。事務局が琉球新報社へ

６月２５日　山内彰会長、甲斐崇ＮＩＥアドバイザーらが北中城村教育委員会に森田孟則教育長らを訪問。地域連携型のＮＩＥ の推進について意見交換

６月２７日　ＮＩＥ研究部会を開催。佐久間洋ＮＩＥアドバイザー、松田美奈子美東中教諭が記事を使った道徳の授業について実践報告。１５年度から研究部会の開催を定例化し、教員らの実践内容の共有、意見交換の場とすることを確認した

７月３０日　第２０回ＮＩＥ全国大会（秋田県）に、山内彰会長ら教育関係者７人と新聞

社関係者９人の計１６人が参加。「『問い』を育てるＮＩＥ思考を深め、発信する子どもたち」をテーマにしたパネル討論や公開授業、実践発表などを通して論理的思考力など「２１世紀型学力」とＮＩＥの取り組みを学んだ

９月９日　日本新聞協会ＮＩＥアドバイザーに、新たに石川美穂興南高教諭、松田美奈アドバイザーに、新たに石川美穂興南高教諭、松田美奈子美東中教諭が認定

１１月１２日　日本新聞協会実践指定校の那覇市立城北小学校が１１月のおきなわＮＩＥ月間に合わせ、４年（総合学習）、５年（道徳）、６年（国語）の公開授業を同校で行った

１１月２６日　第６回「いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）で、小学生部門の最優秀賞に北中城小６年の瀬底蘭さんが選ばれた。同コンクールの最優秀賞は県内初。奨励賞３人、優秀学校賞に大里南小が選ばれた

＜２０１６年（平成２８年）＞

２月１６日　山内彰会長、潮平芳和琉球新報編集局長、武富和彦沖縄タイムス編集局長の両副会長らは県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問。教育行政とのさらなる連携を確認した。いっしょに読もう！新聞コンクール最優秀賞の瀬底蘭さんの受賞も報告した

３月１日　２０１５年度の実践報告会を琉球新報社で開催。日本新聞協会ＮＩＥ実践校のうち本年度で実践期間が終了する城北小、大里南小、興南中・高校がこれまでの取り組みや成果を報告した

５月２８日　県ＮＩＥ推進協議会総会

６月１８日　ＮＩＥ研究部会を「ＮＩＥカフェ」として、ケーキやコーヒーの出る飲食店で開催した。原則毎月第３土曜日の午後２時から開催し、教員が参加しやすい環境にした

８月４日　第２１回ＮＩＥ全国大会（大分県）に、山内彰会長ら教育関係者９人と新聞社関係者が参加。パネル討論や公開授業を通し、大分や各地の事例や手法などに理解を深めた

１１月４日　県ＮＩＥ実践フォーラム２０１６（沖縄市立室川小学校で）。おきなわＮＩＥ月間（県教育委員会後援）の中心行事として開催。２、３、６学年（計３クラス）の公開授業や全体会を行った。約１２０人が参加

１２月１０日　第２２回県中学校総合文化祭で中学生が速報を発行し、両新聞社が支援した。ＮＩＥ展示コーナーも設置し、実践校や新聞社の活動を紹介。１１日まで

＜２０１７年（平成２９年）＞

３月１日　実践報告会（琉球新報社）日本新聞協会指定のうち、指定最終年の室川小、県立森川特別支援学校が報告発表を行った

４月２０日　山内彰会長、副会長の普久原均琉球新報社編集局長、石川達也沖縄タイムス社編集局長、佐久間アドバイザー、石川アドバイザーらが県教育庁に平敷昭人県教育長を表敬訪問

５月２６日　県ＮＩＥ推進協議会総会。共同通信社の会費増額を承認（３万円から４万円に）。事務局が沖縄タイムス社へ

５月２７日　本年度最初のおきなわＮＩＥセミナー。新聞協会主催の「いっしょに読もう

新聞コンクールを授業に組み込む」(佐久間アドバイザー)。その後、６月はこども新聞沖縄戦特別版の活用方法（松田アドバイザー)、１１月は「はがき新聞作り」(プール学院大学の今宮信吾准教授)、２月に「NIE 年間計画の立て方」(石川アドバイザー）を行った

８月３、４日　ＮＩＥ全国大会名古屋大会に山内彰会長、蔵根美智子前室川小校長、松田美奈子アドバイザー、金城治・県立総合教育センター研究主事、宮城英誉・緑風学園教諭、比嘉美保・森川特支教諭、内山直美・糸満中教諭、地元新聞社員が参加した

１２月９、１０日　「第２３回県中学校総合文化祭」(沖縄市民会館など）で、沖縄タイムス、琉球新報の移動編集車両（ワラビーＧＯ！、りゅうちゃん号）を活用し、大会の速報作りを行った。速報作りには糸満中、美東中の生徒が記者として参加し、新聞社が指導した

＜２０１８年（平成３０年）＞

１月１７日　名護市教育委員会の後援を得て、実践指定校の同市立小中一貫教育校緑風学園で NIE 実践フォーラムを開催。朝の NIE フリートーク再現、５年生の社会、１年生と８年生（中学２年）合同の国語の３本の授業を公開。小中一貫校らしい異学年の学びの蓄積を他校教員、保護者らに見せた。学校の取り組みを振り返る全体会も行った

３月８日　２０１７年度の実践報告会を那覇市の沖縄タイムス社で開催した。日本新聞協会指定のうち、指定最終年の高原小、美東中、興南高校が報告発表を行った。その後、他の指定校の代表者が３グループに分かれ、報告への質疑、実践交流を行った

５月１０日　緑風学園の宮城英誉教諭がＮＩＥアドバイザーに認定。北部地区での教師ネットワークづくりへ

５月２６日　６年目の「おきなわＮＩＥセミナー」スタート。この日は「話す力・書く力を育てる指導法」をテーマに佐久間洋、宮城英誉両アドバイザーが講師。その後、６月「切り抜き新聞」(甲斐崇アドバイザーがメイン講師)、１２月「はがき新聞」(講師は桃山学院学院教育大学の今宮信吾准教授）を行った

５月３１日　県ＮＩＥ推進協議会総会。会長に仲村守和元県教育長を選出。山内彰会長は顧問に就任。６月４日に新旧会長が平敷昭人県教育長を訪問した

７月２６、２７日　ＮＩＥ全国大会岩手大会に宮城英誉アドバイザー、比嘉美保桜野特別支援学校教諭、宮城通就宜野座高校教諭、蔵根美智子放送大学沖縄学習センター客員准教授、地元新聞社員が参加した

８月４日　実践資料集（仮称）制作のため、編集委員会を結成し、８、９、１０、翌年１月に会議。編集作業を進めた

１０月９日　県教育庁の県立学校教育課、義務教育課から各１人の指導主事を推進協の幹事に任命

１１月８日　比嘉美保桜野特別支援学校教諭がＮＩＥアドバイザーに承認された

１１月１２日　糸満市立糸満中学校でＮＩＥ実践フォーラム開催。数学、英語、国語、理科で公開授業を行った

１２月８、９日　「第２４回県中学校総合文化祭」(うるま市民芸術劇場など）で、沖縄

タイムス、琉球新報の移動編集車両で大会の速報作りを行った。速報作りには糸満中、美東中の生徒が記者として参加し、新聞社が指導した

＜２０１９年（平成３１年）＞

１月７、１１日　仲村守和会長が沖縄タイムス社、琉球新報社の社長を訪ね、学校への購読料軽減措置を要請。７日には平敷昭人県教育長を訪ね、学校図書館への新聞配備状況の調査を要請した

３月１５日　２０１８年度の実践報告会を那覇市のてぃるるで開催した。日本新聞協会指定のうち、指定最終年の糸満中、宜野座高校が報告発表を行った。その後、他の指定校の代表者が３グループに分かれ、報告への質疑、実践交流を行った

４月６日　ＮＩＥカフェ開催。４月２０日、７月、９月、翌年２月、３月とアドバイザーの先生たちと実践と実践資料集（仮称）の編集会議を開催

５月７日　県立辺土名高校の宮城通就教諭が日本新聞協会のＮＩＥアドバイザーに承認された。

５月２５日　７年目の「おきなわＮＩＥセミナー」がスタート。「簡単にできるＮＩＥ入門編」（宮城英誉教諭が講師）を行った。その後６月２９日に「簡単にできるＮＩＥ～特別支援教育向けと他校種への応用」（比嘉美保教諭が講師）、１０月１９日に「時事カルタ」（宮城通就教諭）のセミナーを実施した。１１月２日は、桃山学院教育大の今宮信吾准教授によるよる「はがき新聞づくり」をセミナーの一環として開いた

５月２９日　沖縄県ＮＩＥ推進協議会総会開催

５月３１日　仲村守和会長ら３役が沖縄県教育庁を訪れ、県立学校教育課の石垣真仁指導主事と義務教育課の山内かおり指導主事の２人を沖縄県ＮＩＥ推進協議会の幹事に任命

８月１、２日　ＮＩＥ全国大会栃木大会に、仲村守和会長、宮城英誉アドバイザー、佐久間洋アドバイザー、宮城通就アドバイザーと実践指定校の古堅南小学校から教諭１１人、藏根美智子放送大学学習センター客員准教授、地元新聞社員が参加した。

１１月１２日　読谷村立古堅南小学校でＮＩＥ実践フォーラムを開催。２年、３年、５年の公開授業のほか、秋田大学大学院特別教授の阿部昇氏の講演会も実施

１２月７日　「第10回いっしょに読もう！新聞コンクール」の初の地域表彰式を那覇市の琉球新報社で開催。

１２月７、８日　第２５回沖縄県中学校総合文化祭（浦添市のアイム・ユニバースてだこホールなど）で、琉球新報、沖縄タイムスの両社がそれぞれ移動編集車両で大会の速報作り作りに協力した

＜２０２０年（令和２年）＞

１月７、８日　仲村守和会長が琉球新報、沖縄タイムスの両社の社長を訪ね、学校への購読料軽減措置を要請。また平敷昭人教育長を訪ね学校図書館への新聞配備を要望した

６月２日　仲村守和会長、与那嶺一枝副会長、松元剛副会長が金城弘昌県教育長を表敬訪問。県立学校教育課の石垣真仁指導主事、義務教育課学力向上推進室の平良一指導主事を幹

事に任命した。

６月１６日　県ＮＩＥ推進協議会総会開催。仲村守和会長の再任、山内彰顧問の再任が承認された。

６月　「すぐに活用できるＮＩＥ授業実践資料」が完成。県内の全小中高校、特別支援学校のほか、教育委員会など関係機関に配布した。

１１月２２日　ＮＩＥ全国大会東京大会。新型コロナウイルス感染拡大のため、初のオンライン開催となった。

１２月１９日　「いっしょに読もう！新聞コンクール」地域表彰式を琉球新報本社で開催。全国奨励賞５人、地域表彰６人のうち、８人が出席した。

＜２０２１年（令和３年）＞

１月２０日　実践校の一つである糸満中学校で「沖縄県ＮＩＥ授業研究会」開催。校内研修として４教科の公開授業が行われ、アドバイザーが参加し助言を行った。

３月９日　ＮＩＥ実践報告会を琉球新報本社で開催。日本新聞協会指定の２年目の実践校４校がオンラインで発表した。

４月　沖縄県ＮＩＥ推進協議会のサイト開設。

４月１７日　ＮＩＥカフェをオンライン開催。アドバイザーが２０２１年度の実践計画を報告。

５月２２日　第２８回おきなわＮＩＥセミナーを沖縄タイムス社で開催。初めて対面・オンラインのハイブリッド形式で行った。１５人が受講して、児童生徒の表現力を伸ばす新聞活用法を学んだ。アドバイザーの宮城英誉教諭（名護市立大宮小学校）が講師を務めた。

６月２６日　第２９回おきなわＮＩＥセミナーを対面・オンラインのハイブリッド形式で、琉球新報社で開催。１７人が参加し、新聞を使ったＳＤＧｓ学習の教授法を学んだ。アドバイザーの宮城通就教諭（県立辺土名高校）、國吉美穂教諭（興南中学・高校）が講師を務めた。

６月３０日　県ＮＩＥ推進協議会総会開催。２０２１年度活動方針案を承認した。

８月１６日　ＮＩＥ全国大会札幌大会。新型コロナウイルス感染拡大のため、昨年に続き、オンライン開催となり、式や分科会の様子がライブ・オンデマンド配信された。

８月１７日　県立総合教育センターの夏期短期研修ＮＩＥ講座がオンライン開催。アドバイザー７人とタイムス、新報の記者が講師を務め、県内の教諭１７人が参加。

１０月２３日　第３０回おきなわＮＩＥセミナーをオンラインで開催。１１人が参加し、「はがき新聞」の実践方法を学んだ。

１０月２５日　仲村守和会長、与那嶺一枝副会長、松元剛副会長が金城弘昌県教育長に学校図書館への新聞配備など、ＮＩＥ活動への協力に関する５項目を要請。義務教育課の植前秀一郎指導主事、県立学校教育課の石垣真仁指導主事に協議会幹事就任を依頼。

１１月１７日　糸満市立糸満中学校で県ＮＩＥ実践フォーラムを開催。新型コロナウイルスの影響で昨年は中止となり、２年ぶり。感染予防のため人数制限し、教員ら約３０人が

参加。英語、数学、社会、家庭の４教科で公開授業が行われた。

１２月３日　福岡市で開催された日本新聞協会主催「九州ブロックＮＩＥアドバイザー・ＮＩＥ推進協議会事務局長会議」にアドバイザーの宮城通就教諭、國吉美穂教諭、県ＮＩＥ推進協の高崎園子事務局長が出席。

＜２０２２年（令和４年）＞

２月２６日　第３１回おきなわＮＩＥセミナーがオンライン開催。県内大学生、県外高校生を含む２０人が参加。アドバイザー７人が新聞を活用した実践例を紹介。

２月２７日　「第１２回いっしょに読もう！新聞コンクール」地域表彰式を沖縄タイムス社で開催。全国奨励賞と県推進協議会会長賞・奨励賞に選ばれた児童生徒９人を表彰した。

３月３日　２０２１年度ＮＩＥ実践報告会をオンラインで開催。日本新聞協会指定ＮＩＥ実践校の西原町立坂田小、糸満市立糸満中、沖縄県立本部高校が実践例を報告。

４月２３日　ＮＩＥカフェをオンラインで開催。新聞協会指定ＮＩＥ実践校の代表やアドバイザー約２０人が参加して、２０２２年度の実践計画を報告した。

６月１４日　県ＮＩＥ推進協議会総会を沖縄タイムス社で開催。新型コロナウイルス感染症の収束を見据えたセミナーの対面開催など、２０２２年度の活動方針を承認した。

６月１８日　第３２回おきなわＮＩＥセミナーを興南高校で対面開催した。ＮＩＥアドバイザーの國吉美穂教諭が沖縄の日本復帰５０年をテーマに公開授業を行った。セミナーでの公開授業は初。教諭約２０人が参加した。

８月４～５日　第２７回ＮＩＥ全国大会宮崎大会が「いまを開き　未来を拓く　ＮＩＥ（教育に新聞を）」をスローガンに宮崎市で開催。全国から１１００人が参加した。対面開催は３年ぶり。沖縄県内からＮＩＥアドバイザーや実践校の教諭、新聞関係者ら約２０人が参加した。

８月１７日　県立総合教育センターの夏期短期研修ＮＩＥ講座が３年ぶりに対面開催。ＮＩＥアドバイザー４人が実践例を紹介、県内２紙の記者が新聞制作について講話した。教諭９人が参加した。

９月６日　新垣孝子教諭（糸満中）が日本新聞協会のＮＩＥアドバイザーに認定された。数学科のアドバイザーは県内初。県内のアドバイザーは計８人になった。

１０月２９日　第３３回おきなわＮＩＥセミナーを「はがき新聞」をテーマに沖縄タイムス社で開催。はがき新聞に詳しい大阪大谷大学の今宮信吾教授が講師を務めた。理想教育財団（東京）が教材を提供した。教諭約２０人が参加した。

１１月２２日　県ＮＩＥ実践フォーラムを西原町立坂田小学校で開催した。西原町教育委員会共催。３年、５年、特別支援学級の総合学習で、新聞を活用した五つの公開授業が行われた。町内外から教諭や教育関係者ら１９０人が参加した。

＜２０２３年（令和５年）＞

１月１５日　「第１３回いっしょに読もう！　新聞コンクール」の沖縄地域表彰式を沖縄タイムス社で開催。全国優秀賞・奨励賞、県ＮＩＥ推進協議会会長賞・奨励賞に選ばれた児

童生徒８人を表彰した。

２月１８日　第３４回おきなわＮＩＥセミナーをオンラインで開催。短時間でできる新聞を活用した授業の実践を新垣孝子ＮＩＥアドバイザーが紹介した。県内の教諭１４人が参加した。

３月１４日　２０２２年度ＮＩＥ実践報告会をオンラインで開催。新聞協会指定実践校の坂田小、久米島小、西原中、県立本部高の４校が取り組みを報告した。

４月２２日　ＮＩＥカフェをオンラインで開催し、ＮＩＥアドバイザーや新聞協会・県ＮＩＥ推進協議会指定の実践校が２０２３年度の活動計画を発表した。

５月１３日　長崎市で開かれた日本新聞協会主催「九州ブロックＮＩＥアドバイザー・ＮＩＥ推進協議会事務局長会議」にＮＩＥアドバイザーの宮城英誉教諭、新垣孝子教諭、高崎園子事務局長が参加。県の活動を報告したほかグループ討議に参加した。５年ぶりに開催された懇親会にも出席し、九州各県の新聞関係者、アドバイザーと情報交換した。

５月２０日　第３５回おきなわＮＩＥセミナーを琉球新報社で開催。小中高、特別支援学校のＮＩＥアドバイザー４人が校種別に実践の基礎やこつを紹介した。教諭１１人が参加した。

沖縄県内の実践指定校一覧

＜２０２２年度＞

【日本新聞協会指定】名護市立久辺小学校▽名護市立大宮小学校▽浦添市立牧港小学校▽久米島町立久米島小学校▽西原町立坂田小学校▽西原町立西原中学校▽沖縄県立本部高等学校【沖縄県NIE推進協議会指定】糸満市立糸満中学校▽読谷村立読谷中学校▽沖縄県立辺土名高等学校▽ヒューマンキャンパス高等学校▽沖縄県立桜野特別支援学校

＜２０２１年度＞

【日本新聞協会指定】久米島町立久米島小学校▽西原町立坂田小学校▽石垣市立富野小中学校▽糸満市立糸満中学校▽西原町立西原中学校▽沖縄県立本部高等学校【沖縄県NIE推進協議会指定】名護市立久辺小学校▽西原町立西原南小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立コザ中学校▽沖縄県立具志川高等学校▽沖縄県立辺土名高等学校▽ヒューマンキャンパス高等学校▽沖縄県立桜野特別支援学校

＜２０２０年度＞

【日本新聞協会指定】▽石垣市立大浜小学校▽浦添市立牧港小学校▽石垣市立崎枝小中学校▽糸満市立糸満中学校▽県立具志川高校▽ヒューマンキャンパス高等学校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】名護市立久辺小学校▽恩納村立恩納小学校▽与那国町立与那国小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立コザ中学校▽興南中学校▽沖縄県立宜野座高校

＜２０１９年度＞

【日本新聞協会指定】読谷村立古堅南小学校▽名護市立久辺小学校▽石垣市立大浜小学校▽浦添市立牧港小学校▽石垣市立崎枝中学校▽県立具志川高校▽ヒューマンキャンパス高等学校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立高原小学校▽うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽沖縄市立コザ中学校▽沖縄県立宜野座高校

＜２０１８年度＞

【日本新聞協会指定】うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽県立宜野座高校▽読谷村立古堅南小学校▽名護市立久辺小学校▽浦添市立仲西小学校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽沖縄市立美東中学校▽興南中学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽沖縄市立室川小学校▽沖縄市立高原小学校

＜２０１７年度＞

【日本新聞協会指定】沖縄市立高原小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立美東中学校▽興南高校▽うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽県立宜野座高校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽名護市立久辺小学校▽久米島町立久米島小学校▽

渡嘉敷村立渡嘉敷中学校▽沖縄市立室川小学校▽県立森川特別支援学校

＜２０１６年度＞

【日本新聞協会指定】沖縄市立室川小学校▽宮古島市立福嶺小学校▽興南高校▽県立森川特別支援学校▽沖縄市立高原小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立美東中学校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽名護市立久辺小学校▽宮古島市立西辺小学校▽久米島町立久米島小学校▽八重瀬町立具志頭中学校▽渡嘉敷村立渡嘉敷中学校

＜２０１５年度＞

【日本新聞協会指定奨励枠】興南中学校・高校【日本新聞協会指定通常枠】南城市立大里南小学校▽那覇市立城北小学校▽沖縄市立北美小学校▽宮古島市立福嶺小学校▽沖縄市立室川小学校▽県立森川特別支援学校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】南城市立大里中学校▽沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立石垣小学校▽沖縄アミークスインターナショナル▽宜野座村立松田小学校▽那覇市立小禄南小学校

＜２０１４年度＞

【日本新聞協会指定奨励枠】那覇市立小禄南小学校【日本新聞協会指定通常枠】名護市立真喜屋小学校▽興南中学校・高校▽南城市立大里南小学校▽北谷町立浜川小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立伊野田小学校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】南城市立大里中学校▽沖縄市立比屋根小学校▽沖縄市立コザ小学校▽那覇市立城北中学校若夏分校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立宮良小学校▽県立泊高校▽沖縄アミークスインターナショナル▽宜野座村立松田小学校▽宮古島市立平良中学校

＜２０１３年度＞

【日本新聞協会指定奨励枠】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校【日本新聞協会指定通常枠】うるま市立中原小学校▽沖縄市立コザ小学校▽沖縄アミークスインターナショナル▽名護市立真喜屋小学校▽恩納村立喜瀬武原小中学校▽興南中学校▽県立陽明高校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】南城市立大里中学校▽那覇市立城北中学校若夏分校▽北谷町立浜川小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立伊野田小学校▽石垣市立宮良小学校▽県立沖縄工業高校

＜２０１２年度＞

【日本新聞協会指定奨励枠】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校【日本新聞協会指定通常枠】うるま市立中原小学校▽沖縄市立コザ小学校▽沖縄アミークスインターナショナル【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】南城市立大里中学校▽豊見城市立豊見城中学校▽北谷町立浜川小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立伊野田小学校

＜２０１１年度＞

【日本新聞協会指定奨励枠】宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校【日本新聞協会指定通常枠】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校▽うるま市立勝連小学校▽宜野座村立漢那小学校▽読谷村立喜名小学校▽読谷村立読谷中学校▽県立真和志高校

【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】与那原町立与那原中学校▽豊見城市立豊見城中学校
＜２０１０年度＞
【日本新聞教育文化財団指定奨励枠】宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校【日本新聞教育文化財団指定】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校▽うるま市立勝連小学校▽宜野座村立漢那小学校▽読谷村立喜名小学校▽読谷村立読谷中学校▽県立真和志高校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】うるま市立比嘉小学校▽与那原町立与那原中学校▽うるま市立石川中学校▽豊見城市立豊見城中学校　※年度末で日本新聞教育文化財団が日本新聞協会と合併
＜２００９年度＞
※これ以前はすべて日本新聞教育文化財団指定▽那覇市立さつき小学校▽那覇市立古蔵中学校▽うるま市立比嘉小学校▽うるま市立高江洲中学校▽宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校▽豊見城市立豊見城中学校
＜２００８年度＞
那覇市立さつき小学校▽那覇市立古蔵中学校▽うるま市立比嘉小学校▽うるま市立高江洲中学校▽宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校▽豊見城市立豊見城中学校
＜２００７年度＞
那覇市立銘苅小学校▽名護市立大宮小学校▽糸満市立三和中学校（注１）▽那覇市立石嶺中学校▽うるま市立石川中学校▽沖縄三育中学校　（注１）座間味村立慶留間小中学校から実践者異動による実践校の変更
＜２００６年度＞
那覇市立銘苅小学校▽名護市立大宮小学校▽座間味村立慶留間小中学校▽那覇市立石嶺中学校▽うるま市立石川中学校▽沖縄三育中学校▽県立向陽高校（注２）▽県立南風原高校（注２）　（注２）実践者の休職などによる指定中止
＜２００５年度＞
浦添市立当山小学校▽座間味村立座間味小中学校▽那覇市立小禄中学校▽那覇市立上山中学校▽県立浦添商業高校
＜２００４年度＞
浦添市立当山小学校▽座間味村立座間味小中学校▽那覇市立小禄中学校▽那覇市立上山中学校▽県立那覇高校▽県立浦添商業高校
＜２００３年度＞
那覇市立城北小学校▽沖縄市立室川小学校▽琉球大学教育学部附属中学校▽沖縄尚学高校附属中学校▽県立那覇高校▽県立辺土名高校
＜２００２年度＞
那覇市立城北小学校▽沖縄市立室川小学校▽琉球大学教育学部附属中学校▽沖縄尚学高校附属中学校▽県立中部商業高校▽県立辺土名高校
＜２００１年度＞

豊見城村立とよみ小学校▽沖縄カトリック小学校▽平良市立西辺中学校▽東風平町立東風平中学校▽県立中部商業高校▽県立浦添高校

＜２０００年度＞

豊見城村立とよみ小学校▽沖縄カトリック小学校▽平良市立西辺中学校▽東風平町立東風平中学校▽県立首里東高校▽県立浦添高校

＜１９９９年度＞

那覇市立古蔵中学校▽那覇市立松島小学校▽県立首里東高校

第3種郵便物認可

新聞活用 深まる思考

おきなわ NIE Newspaper in Education

5年3組の公開授業。食品ロスに関する新聞記事を読んで、自分の考えをまとめる児童＝22日、西原町立坂田小学校

西原町立坂田小で実践フォーラム

「主体的・対話的で深い学びを生み出す児童の育成」情報活用能力を育む学習指導の工夫を通じて」をテーマに22日、日本新聞協会指定NIE（教育に新聞を）実践校の西原町立坂田小学校（仲川裕司校長）で、2022年度県NIE実践フォーラム（主催・県NIE推進協議会、主管・坂田小、共催・町教育委員会、後援・県教育委員会）が開かれた。3年、5年、特別支援学級の総合学習で、新聞を活用した五つの公開授業が行われ、町内外から教育関係者ら約100人が参加し、NIEの実践方法を学んだ。8人のNIEサポーターによる指導助言もあった。フォーラムの様子を報告する。（学芸部・鎌田隼人、文化部・宮城隆尚、社会部・玉城潤、写真部・竹尾昭典、低面編集・金城慶）

ゴール提示「自分事」に

宮城英資さん（大京小教諭）

記事の見出しを一部隠すなどヒントがあり、記事を読むだけの時間をつくって記事の言葉と児童を向き合わせていた。家族に何を伝えたいかという「ゴール」を一番に提示することで児童が「自分事」として取り組み、感想書きにも生きていた。

地域に目向ける導入に

岡吉美穂さん（南風高教諭）

クイズ作りは高校生でも挑戦し、学習を生徒に「問い」を立てる一スタートになる。難易度には高低があり、自分に合った学習に他者意識を付けていけます。家族に伝える自分の学習に他者意識を付けていけます。家族に伝える自分の学習に他者意識を付けていけます。家族に伝える自分の

2022年度県ＮＩＥ実践フォーラム

西原町立坂田小学校

自ら学ぶ力 新聞で育む

教育現場での新聞活用について関係者が実践を共有し学び合う2022年度ＮＩＥ（教育に新聞を）実践フォーラム（主催・県ＮＩＥ推進協議会、共催・同町教育委員会、主管・西原町立坂田小学校、後援・県教育委員会）が11月22日、日本新聞協会指定ＮＩＥ実践校の坂田小で開かれた。「主体的・対話的で深い学びを生み出す児童の育成～情報活用能力を育む学習指導の工夫を通じて」をテーマに、3年2クラス、5年2クラス、レインボー（特別支援）の合計5クラスで総合の公開授業が行われた。記事からクイズを作って楽しく交流したり、記事を読んだ上で課題解決策を考えたり、自ら学びたいものを見つけたりする授業に町内外から参加した190人の教員らが見入った。授業感想交流会で授業の振り返りやＮＩＥアドバイザーによる助言、参加者同士の協議があり、全体会も行われた。フォーラムの授業内容などを紹介する。

（関戸亨、高良利春、新垣梨沙、小川晶宏）

特別支援学級・総合　城間吉主教諭

タブレットを使って、「レッツチャレンジNIE」のワークシートに向き合う児童たちを支援をサポートする担任主任講師

問いと答え それぞれ生み出す

この記事からどんな学びができそうですか？

記事を読み、物語（二宮金次郎）について調べた後のワークシート

受験の縁起をしりたい

特別支援学級（レインボー組）は「レッツ、チャレンジNIE」と題した授業で、ソフトやウマいい香りを高いはず麩チャンプルーなどを調理した。

西原町立坂田小学校

を紹介する新聞記事を読み、「受験の縁起」について調べた後のワークシートに取り組んだ。

教諭は「子どもたちが自己肯定感を高めるための工夫を考えたい」と話した。

11月分は、宜野湾市の坂田小学校

がサポートした。

同組では、毎週1時間、総合的な学習の時間を使って、琉球新報小中学生新聞（ハッピーPONI）の活用（レッツチャレンジNIE）に取り組んでいる。この日は、「ふくちゃんの食べ物」の記事を題材にしたシートを使用。2、3、5年生の4人が、タブレット端末で水行上げ（ふくの養殖）などを調べ、ふくに関する自分たちの考えや気になる言葉などを記入した。

児童の1人は、「お寺が『縁起物』と書かれていたことから『受験の縁起を知りたい』と記入。ネットで調べてみると、ふくの画像を取り付けた『福外』などが出てきた。他の人の考えも聞いてみたい。ふくを食べるとどうなるのかを調べたい」と意欲を見せていた。

授業の中では、「ふくは『福』と『ふく』の発音が同じ。『福』を食べるとどうなるのかを調べたい」などの発表があった。

教諭は「子どもたちは、自分で問いを生み出すことができる。同じ新聞記事でも、1人1人違う学びが生まれる」と説明し、思考力の深まりに期待した。

ＮＩＥアドバイザー 指導助言

表現・発信で自信つけて

松田美奈子勝谷中主幹教諭

タブレットを活用し、児童が自主的に学べる環境をつくっていた。教材に親り仮名が付いているのも良かった。今回の記事はインドゾウ、与那国ウマの生態を調べる事後学習へもつなげられる。今後も自分で表現して発信する授業をし、児童に自信をつけてほしい。

記事と自分 結び付けて

比嘉美保宜野湾特別支援学校教諭

学びたいことを考える活動を大切にしていた。子どもたちが自己肯定できる具体的な指標はあった方がいい。記事の「お守り」から応援の方法を連想させたり「受験」からキャリアに結びつけたり、記事と自分の生活がどう結びついているかを考える授業も今後できるといい。

5年総合　幸喜大輔、玉城建幸教諭

食品ロス、温暖化考える

グループになって新聞記事を読み合う5年生の児童たち

5年生は「未来へわたしたちにできること」と題した授業を行った。3組は食品ロスに関する記事を題材にした。

食品廃棄物に関する記事があるので、もっと読んでみたいと思ったから記事を選んだ」と話した。

1組は「温暖化防止に向けて」という記事を選んだ。「温暖化が進むと、海面上昇などで、自分たちにもくるかもしれない。タブレットに書き込み、全体で共有した。

「使い捨てプラスチックの利用をできるだけ減らす」などの意見が出た。

授業実践校、坂田小、玉城教諭は「子どもたちが自己肯定感を高めるための工夫を考えたい」と話した。

新聞記事を読んで話し合う5年1組の児童たち

5年1組の玉城建幸教諭

5年3組の幸喜大輔教諭

ＮＩＥアドバイザー 指導助言

記事を自分ごとに捉えた

佐久間洋恩納小教諭

教師が日常的に新聞を読んで記事を見つけるのが大事だ。中の記事は子どもたちの食いつきが高く、記事の選び方が非常に良かった。先生もとても楽しそうで何よりだ。総合学習は調べて終わることが多いが、自分ごとに落とし込むことが大事で、効果的な活用だった。

生徒が考える環境構築を

宮城浩敏辺土名高教諭

21世紀、教師は教え込むのではなく、生徒が自分の考えを生み出す環境をつくるファシリテーターになるのではないか。新聞には世界的な課題がたくさん見られる。SDGｓを題材としていろんなことを考えて、子どもたちの活躍できる社会ができたらいい。

3年総合　兼次順子、比嘉祐一教諭

クイズ作りで要点理解

新聞を題材とした授業で、クイズの解答をする神谷小学校児

3年生は「町内のものしりはかせになろう」と題した授業で、5組の兼次順子教諭は、地域に根ざした問題を考えさせたり、問題を考えたり何人かの人に答えさせるなど、工夫した。

3組は食品ロスに関する記事を選んだ。「賞味期限が切れていないのに捨てられる食品がもったいない」と話した。

4組の比嘉祐一教諭は、作ったクイズを発表し、5組はクイズを考えるグループと、他グループが出す問題を考えるグループに分かれた。

グループが記事から問題を考えたり、クイズを考えたりする授業を行った。

8人は「みんなにも参加してもらえるようなクイズを作りたい」と話した。

1組は、「環境問題」をテーマにした。

「環境問題、特に地球温暖化について考えてみたいと思ったから」と話した。

4組は「町内にどんな神様がいるのかを調べたいと思ったから」と話した。

「地域に根ざした問題を考えたい」と話した。

授業後、兼次教諭は「何度かクイズ作りをしていく中で、子どもたちが自分で考えられるようになってきたと思う。記事に関係する地域の問題にも目を向けるようになってきたと思う。」と話した。

3年4組の比嘉祐一教諭

3年5組の兼次順子教諭

新聞記事に夢中になる児童たち

ＮＩＥアドバイザー 指導助言

関心の持たせ方効果的

宮城英智大宮小教諭

楽しい授業を意識しつつ、協議会でもまず楽しむことを大切なテーマにしているのでうれしくなった。智頭に消防士の写真を見せるなど、うまく子どもたちの興味を引き、自に何を伝えるかといった目的を丁寧に伝えていたのも良かった。

新聞の活用 書く力高める

國吉美穂興南高教諭

記事からクイズを作ることは今後「問いを立てる」ことに役立つものになる。小学校時代にたくさん新聞を活用してきた子どもたちは書く力が高い。今回の授業でも最後5分間で感想をしっかりとした分量で、理由も含めて書いていた。日ごろの指導のたまものだ。

語彙力高め交流楽しむ

新垣孝子糸満中教諭

授業では、児童たちが活発に活動し、言葉一つに対しても「何だろう」と意味を考えながらクイズに答えていた。このように新聞に慣れ親しんで語彙が増えると交流が始まり、交流すると思考が発達する。これからも楽しませる授業を展開してほしい。

全体会発言要旨

来年度ＮＩＥ実践校を募集

県ＮＩＥ推進協議会は、来年度のＮＩＥ実践校を募集している。同協議会が日本新聞協会に推薦し、指定されると県内の地元紙に加え、全国紙（小学校は小学生新聞も可能）が一定期間無償で提供される。指定期間は2年間。年度末に実践報告書の提出が必要。問い合わせは同事務局（仲真タイムス社学芸部内）電話098（860）3553、メールltimes-nie@okinawatimes.co.jp。

全体会で講評に耳を傾ける参加者たち

主催者あいさつ

主体性培う授業推進を

仲村守和・県ＮＩＥ推進協議会会長

公開授業では、子どもたちが興味を持ちそうな題材を取り入れ、「主体的・対話的で深い学び」を培っていく授業実践を各学校で推進してほしい。参加された先生方には本日の実践報告を各学校で共有し、ＮＩＥを実践してもらいたい。

歓迎のあいさつ

読解力向上へ活動促進

新島信・西原町教育委員会教育長

町では昨年度から特色ある取り組みとして、町内の小・中学校が実践校指定を受けＮＩＥに取り組んでいる。今回の公開授業では児童たちが生き生きと記事から情報を読み取り、自分なりの考えを情報する姿を見ることができた。フォーラムで示された成果と見えてきた課題を踏まえ、今後も児童生徒たちの情報活用能力の育成、社会性や読解力向上のためＮＩＥ活動の充実を図りたい。

坂田小の取り組み

情報共有し意識向上

石川節男主幹教諭

各学年がタブレットと新聞記事を活用して、日常的な授業実践に取り組み、情報を基にした思考力・判断力・表現力の育成に努めている。情報を共有する「ＮＩＥコーナー」も設置し、教職員が意識を高めている。図書館には新聞コーナーと、「レッツチャレンジＮＩＥクイズコーナー」を設けた。児童が記事を読み、キーワードとなる言葉や文章を見つけ、クイズに取り組んでいる。

授業講評

記事選定に工夫見えた

甲斐崇・西原町教委指導主事・ＮＩＥアドバイザー

3年生は、楽しみながら新聞記事でクイズを作った。記事に振り仮名を振って教材化した点が素晴らしかった。5年生はＳＤＧｓの視点から、記事を根拠にできることを考えた。記事の選び方や難易度の設定に工夫が見られた。特別支援学級は「レッツチャレンジＮＩＥ」を使った。問題を解くだけでなく、学べそうなものを自分で考え、調べていく、いい選択をしていると感じた。

学校長あいさつ

授業改善で指導力向上

松川邦昭校長

学校は今、先の見えない社会変化に対応しながら、さらなる研究が必要となっている。自分の考えを持ち、相手に伝え、話の真意を理解するカを育むことは教育にとって最も重要なことだ。坂田小は定めた規律を活用して社会性や主体性を深めていけることが強みだ。ＮＩＥ活動を生かした授業改善が校内協力体制を構築し、教師の指導力を向上させ、活力ある学校力向上にもつながると確信している。

授業の指導案サイトで紹介

県ＮＩＥ推進協議会は、同協議会ウェブサイトで今回の公開授業5クラスの授業デザインシート（指導案）を掲載している。ダウンロードも可能。

サイトではこのほか、協議会発行の「すぐに活用できるＮＩＥ授業実践資料」のＰＤＦデータも掲載している。

無断複製・転載を禁じます

第27回ＮＩＥ全国大会宮崎大会　「いまを開き 未来を拓くＮＩＥ」

未来の担い手 共に育む

教育現場に新聞をうち活用していくか考える「第27回ＮＩＥ（教育に新聞を）全国大会（主催・日本新聞協会、宮崎県ＮＩＥ推進協議会）が8月4、5の2日間、宮崎市で開催された。テーマは「いまを開き 未来を拓くＮＩＥ」。初日は全体会があり、ノーベル化学賞受賞者の吉野彰氏（旭化成名誉フェロー）の講演、教育関係者や高校生らが登壇してのパネルディスカッションが行われた。2日目は宮崎県内の学校による公開授業や実践発表13件が行われた。過去2年はオンライン開催だったが、今回は4年ぶりの対面開催に全国から教育関係者、新聞関係者合わせて約1100人が参加した。大会の様子や、県内からの参加者の感想を紹介する。

吉野彰さん 記念講演

50年にサステナブル社会 実現へ日本も技術貢献を

NIE全国大会で講演する吉野彰さん＝4日、宮崎市民文化ホール

私は旭化成の中で育ちながら、「コウノウの科学」を読んで育った。ファラデーの火のように、サイエンスの世界の2年間の大学生活が、基礎研究を通じた、宮崎に来て、最初の研究室で、「ポリアセチレンの研究」を行った。担当された石坂誠教授の指導のもとに、研究テーマを与えられ、3年間、ある記事を選んで、要約のレポートを基に、望ましい未来、問題を提起、感想を書くスライドの作成に、試行錯誤した。

ライフの記事について話し合つたグループは、子ども食堂への寄付を呼び掛けるために固定募金箱を設置する仕組みづくりなど、野菜をすぐに提供する仕組みづくりなど、できることを考えた。記事を選んだ理由は「スクラップをしてみんなに『スクラップをしてみたら』と言ってみたかったことが結果多かった」と話していた。

五反田教授は「今後、いろんな人と力をあわせ課題解決を協働するはず。人の意見を受容し、自分の意見を述べ、すり合わせる力が重要になる。タブレットは使わず、現代で生徒たちが持っている情報や考え得るもので進めた」と話した。（高見利春）

公開授業で、新聞記事のスクラップシートを基に話し合う宮崎県立大宮高校の生徒

宮崎県立大宮高　社会の課題 解決策探る

宮崎県立大宮高校は、どを話し合う公開授業を「新聞スクラップの活用」と題し、3年生による、担当された五反田誠教授指導のもと、行った。

ある記事を選んで要約の上、「問題性

第27回NIE全国大会宮崎大会

新聞で開く社会の扉

「いまを開き 未来を拓く NIE（教育に新聞を）」をスローガンに4、5の両日、宮崎市で「第27回NIE全国大会宮崎大会」（主催・日本新聞協会、主管・宮崎県NIE推進協議会、宮崎日日新聞社）が開かれた。NIE関係者によるパネルディスカッションやノーベル化学賞受賞者の吉野彰さんによる記念講演、公開授業や実践発表、共同発表など13の分科会が開かれた。新型コロナウイルスの影響で対面開催は3年ぶり。全国から約1100人が参加した。沖縄からは日本新聞協会認定のNIEアドバイザーや実践校の教諭、新聞関係者約20人が参加して見聞を広めた。大会の様子を詳報する。来年は松山市で開催を予定している。（学芸部・高崎園子、又吉嘉例、読者局・川満雅也）

パネルディスカッション

主体的な学び「地頭」育む

学校教育の場に新聞を活用する効果について意見を交わすパネリスト＝4日、宮崎市民文化ホール

【パネリスト】
- ■木幡佳子さん（宮崎県立宮崎西高校付属中学校指導教諭・日本新聞協会NIEアドバイザー）
- ■新地辰朗さん（宮崎大学理事・副学長）
- ■関口修司さん（日本新聞協会NIEコーディネーター）
- ■高村心花さん（宮崎西高校1年）
- ■中山隆さん（こゆ地域づくり推進機構・教育イノベーション推進専門官）

【コーディネーター】
- ■水永正憲さん（NIE全国大会宮崎大会実行委員長、宮崎県NIE推進協議会会長）（文中敬称略）

―NIEは子どもにどんな力を与えたか。

木幡佳子 中学の全生徒が社会科の週末の課題で新聞スクラップに取り組んでいる。約束事は新聞名と日付、オリジナルタイトルの3点を書くだけで、記事の選び方やまとめ方は自由。初めは記事の感想だけだったが、3年続けると意見や提言に変わっていく。「社会科は暗記科目ではなく民主主義を学ぶ場」なんだという生徒の意見もあった。

高村心花 毎週の習慣になっていたので大変という意識はなかった。社会のさまざまな出来事について意見を持てるようになった。

関口修司 公立小学校の校長時代に週1回15分、NIEタイムをやった。3カ月たつと少しずつ読めるようになり、意見を書けるようになる。全国学力テストの正答率で、国語も算数も平均より10ポイント以上高かった。こつこつ継続的に取り組むことで主体的な学びの力が付き、子どもの「地頭」を育てると実感する。

―SNSが普及し、新聞や活字を読まなくなる中、NIEと読解力の関係は。

関口 新聞と本を読む生活の繰り返しが読解力のベース。学校では小説など文学的な文章を読むことが中心だが、説明的、実用的な文章を読み取らせることも大事だ。加えて、グラフや図も含めて教えることを意識しないと読解力は身に付かない。日常的に新聞を読めば説明的、実用的な文章に出合える。ICT（情報技術）とも組み合わせて新聞を有効に使ってほしい。

高村 若者の新聞離れが進んでいるのは事実。だからこそ信頼性が高い情報がより詳しく掲載されている新聞の良さを再認識し、他のメディアで得た情報を新聞で確認する機会を増やせばいい。多数のメディアのそれぞれの長所を活用したい。

―他にも新聞を活用した教育の成果がある。

中山隆 記事が作られる手法は、子どもが自己表現して発信する時の参考になる。子どもたちが地元紙の記者から記事の書き方やインタビューの方法などを学んだことがある。「取材前の下調べが大事」などの気付きがあった。情報収集力や整理、分析する力が身に付くのではないか。

SDGs（持続可能な開発目標）を学ぶ時も身近な場所からがいい。地元紙のウェブサイトにまとめられた関連記事を活用している。自分の地域や県内の別の地域で何が行われているかを比べながら、それぞれの違いや良さに気付ける。

―社会が激変していく中で、求められる力は何か。

新地辰朗 先生から一方的に教えるのではなく、子ども自身がいかに工夫して学べるかという「学習者中心主義」授業への転換が迫られている。期待されるのは「変革を起こせる力」。自分が感じた「気付き」を周囲の人に、社会に、提案できることを目指す学びだ。

NIEを通して自分でじっくり考えるだけでなく、仲間との意見の違いを説得や新提案で克服し、新たな価値をつくり出して提案できることが必要になる。新聞で気付いた情報を基に、他の情報とも関連付けながら協働で解決していく。学び方が変わる中でICTを含め、新聞などメディアの使い方も変わっていく。

―NIE実践の課題は。

木幡 新聞の使用は教育に有効である一方、誰が新聞を買って子どもに与えるのかという議論が抜け落ちているように感じる。学校か家庭か、新聞社側か。

関口 紙の新聞をどう手に入れるかは課題だ。購読している家庭の子が何日分か持ってきたり、学校の予算で買ったり、販売店に協力して届けてもらったこともある。行政にも動いてもらいながら新聞が届く環境をつくることが大事だ。

NIEは小学1年生からできる。子どもは少し難しいくらいがやる気を起こす。先生が最初に難しいと思わず、「世の中と授業をちょっとつなげるNIE」をやってほしい。数学でも理科でも、世の中の出来事が今日の授業とつながっていると気付かせることで、学習が「自分事」になる。

紙面編集・桑門琴音

知識伸ばす発表参考に

新垣孝子さん

教科書だけでは教えられない、生徒の興味関心と知識を伸ばす実践発表が聞けた。新聞記事を、自分の意見も含めてディベート形式で伝える「シンプリオバトル」は新鮮で、取り入れられそうだ。SDGsの項目ごとにスクラップして活用していたのも参考になった。生徒が自然に新聞を手に取れるように工夫していきたい。（NIE実践校・糸満中教諭）

新聞が子の成長手助け

関涼介さん

授業でNIEに取り組んでいる。初めて全国大会に参加したが、新聞が子どもの成長の助けになることが分かったし、学校でも使えそうな実践例が学べてうれしい。新聞を読んでいる子は多くの知識を得ているのだろう。子どもにとって新聞を身近な存在にしたい。いつでも手に取れるような環境をつくりたい。（NIE実践校・名護市立大宮小教諭）

県内参加者の声

仲村守和さん

ぜひ学校で取り入れて

子どもたちが楽しそうに自ら活動していて「主体的、対話的で深い学び」を実践していることがうかがえた。授業は沖縄と大差なく、むしろ沖縄の先生の方がICTをうまく活用した授業では進んでいると思った。県内から多数参加し、これまでにない意識の高まりを感じる。ぜひ学校の実践に取り入れてほしい。（県NIE推進協議会会長）

藏根美智子さん

新時代の教育への示唆

ウィズコロナやソサエティー5.0時代の新しい教育への示唆に富んだ大会だった。宮崎大宮高の公開授業は新聞スクラップを通して国や社会の出来事を自分事として捉えて共有し、未来のより良い社会を見据えていた。宮崎公立大と宮崎日日新聞の合同発表では大学の役割は「情報生産者」を育てることだと再認識させられた。（県教育委員）

甲斐崇さん

段階に応じた実践重要

新聞スクラップの継続で確実に力が付くことを再確認した。子どもたちは新聞を通して主体的に学び、社会への興味を高め、視野を広げていた。教師も社会につながっていると感じさせる授業を展開していた。「無理なく楽しく続ける」をキーワードに、小中高と発達段階に応じた実践が大事だ。（NIEアドバイザー、西原町教育委員会指導主事）

佐久間洋さん

地元紙活用で自分事に

先生が記事中の難しい漢字の読み方や言葉の意味を示したワークシートを教材化しているのが印象に残った。地元紙を活用すれば記事が「自分事」になり、関心を持てると実感した。読解力向上の実践は県内でも行われているが、長い目で見る必要がある。子や先生の負担にならない形での継続が重要だ。（NIEアドバイザー、恩納小教頭）

宮城英誉さん

「問い」生む授業に感心

公開授業では子どもに「宮崎をどうしたいのか」と考えさせていて「問い」が生まれる授業に感心した。身近な社会が新聞を通してつながっていることを意識させ「自分事」として捉えさせていたし、地元紙を使うからこそできることだ。引き続きNIEで子どもが互いに伝え合う力を高めたい。（NIEアドバイザー、名護市立大宮小教諭）

宮城通就さん

生きた教材の活用継続

子どもをいかに学びの主人公にさせるかを意識した大会だった。高校の探究学習では、教師は生徒を導くファシリテーターとなる必要があるが、その際、学びを切り開くツールとして最適な教材が新聞だ。視点を切り替え、問題点の理解を深めることができる。今後も「生きた教材」の活用を続けたい。（NIEアドバイザー、辺土名高教諭）

比嘉啓信さん

紙の新聞の良さ再確認

何でもICT、効率化の風潮に疑問を感じている。宮崎大宮高の新聞スクラップ活用の公開授業では、ICTを使わず、生徒たちが考え方や意見を交わしていた。生徒が協働的に学びを深めていける紙の新聞の良さを改めて感じた。新聞を通して、時間をかけ、問いや考えを深めていく実践をしていきたい。（NIE実践校・本部高教諭）

第27回ＮＩＥ全国大会宮崎大会

地元宮崎の魅力を探究

宮崎大付属小6年　公開授業

宮崎大付属小の荒川ひかり教諭は「わたしと宮崎　宮崎の魅力再発見」をテーマに、６年生27人と新聞を活用した探求的な総合学習の授業を行った。

児童は、修学旅行で訪れた鹿児島県の魅力をまとめた、事前の新聞作りの経験を基に、地元・宮崎の魅力は何かを考えた。

県内、国内、海外の修学旅行生の様子を紹介する６本の記事を読んで、宮崎の魅力につながるキーワードを探し、「観光が自然とつながっていて、グリーンツーリズムなどが行われていた」などとグループで発表した。

授業を見学した教員からは「時間内に児童がかなりの本数の新聞記事を読みこなし、テンポ良くやりとりしていた」「教師が記事の内容を事前に知らせない方が子どもたちの気付きや驚きにつながったのでは」などの感想が寄せられた。

同小の６年生は授業のほか週に１回、「ＮＩＥノート」に関心を持った記事を要約して見出しを付けたり、調べたことをまとめる活動に取り組んでいる。

荒川教諭はＮＩＥの成果について「仲間と協力して、記事中のキーワードの共通点や相違点を見つけ、自分たちの言葉でまとめることが少しずつできるようになった」と語った。

児童の岩下結葵さんは「ＮＩＥで要約する力、インターネットや新聞から情報を得る力が付いた。キーワードを押さえ、深めることは将来につながるので大切にしたい」と話した。

子どもたちが新聞記事から宮崎の魅力を探った宮崎大付属小の公開授業＝５日、宮崎市・宮崎公立大

地域の課題を探り議論

県立宮崎大宮高3年生　公開授業

より良い未来のために何ができるか―。宮崎市・宮崎大宮高の五反田聡教諭の授業では３年生約30人が10年後の未来に向け、持参したスクラップ記事を参考に現状や課題を洗い出し、社会にどう貢献できるかを考えるワークショップを行った＝写真（川満雅也撮影）。

郷土かるたを紹介した記事を取り上げて「住み続けられる宮崎」をテーマに議論したグループでは、本県に人口流出の課題があることを確認。自身が取り組むべき内容として「地産地消を心がける」「学校で郷土愛を語る時間を設ける」などの意見を出し合った。

個人でできることには限りがあるとして、選挙の重要性を訴える意見も。長井祈華さん(17)は「新聞を読んで社会に関心を持ち続けたい」と話した。

（宮崎日日新聞社提供）

記事紹介 上手さを競う

宮崎第一中　実践発表

宮崎第一中学校の緒田浩輔教諭は、新聞とＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）を結び付けて社会の理解を深める複数の実践例を発表した。情報があふれる現代で確かな情報を選べる判断力「新しいものさし」を養おうと、学年や全校単位でＮＩＥに取り組んでいる。

この学校はＳＤＧｓ関連の新聞記事のスクラップノート作りに加え、記事への意見を英作文にすることで英語の授業にも生かしている。会場では読んでほしい記事をいかに効果的に紹介するかを競う「シンプリオバトル」も実演。生徒３人が登壇し、お薦め記事を示しながら意見を述べた＝写真。

２年生は記事で知った身の回りの社会問題を解決するため、実際に計画して行動する授業もある。コンビニに電話してマイバッグを持参する割合を調査した上で、持参を勧めるポスターを店頭に掲示したという。

緒田教諭は「自転車で店を回って大変だったが、達成感もあったようだ。記事で現状を知り、自分事と捉え、社会に働きかける経験ができた」と強調した。

記者から時事問題学ぶ

宮崎公立大・宮崎日日新聞社　共同発表

宮崎公立大と宮崎日日新聞社の共同発表では、同社の記者たちが講師を務める教養科目「時事問題ガイド」の実践からＮＩＥの可能性を探った＝写真。

同ガイドは、学生が幅広く地域の課題を学び、将来のキャリア設計につなげることを目的に全15回を講義。地元の水産業の取材をライフワークにする奈須貴芳報道部次長は「新聞社には政治や経済、事件・事故などを取材するいろいろな記者がおり、さまざまな思いがあって記事を書いている。新聞で身近にあることに興味を持ち、学問の種を見つけ、発展させてほしい」と述べた。

同大が受講生に実施した調査では「さまざまな分野の知識に触れ、興味・関心が広がった」などの報告があった。同大２年の橋本実咲さんは「受講前は新聞を読む機会がなかった。インターネットでは自分の得たい情報だけだが、新聞ではさまざまな知識を得ることができ、考えを深めることができる。コロナ下の不安定な時代だからこそ知識を得て、自分の意見を持つことが大事なんだと講義を通して学んだ」と発表した。

新聞の購読率低下を救え

自販機設置やアプリ開発 提案続々

宮崎西高と付属中 討論　実践発表

パブリック・ディベートの様子。発表チーム（手前）と別のチーム（奥）の参加者間で質問と回答が繰り返される＝５日、宮崎公立大

新聞の購読率低下、どう救う―。宮崎県立宮崎西高校と、同付属中学校の生徒は、主に若い世代に新聞がより読まれるようになる方法について「理解しやすく、聞き取りやすく」を心がけた「パブリック・ディベート」方式で討論した。

公共交通機関への新聞の自動販売機の設置や、人気作家の連載小説の新聞限定掲載など、新しいアイデアが次々に飛び出した。

同付属中でＮＩＥに取り組む木幡佳子教諭が指導した高校生１、中学生２の計３チームが議論を交わした。それぞれ政策を提案し、受けた質疑や意見を反映して再提案した。生徒のアイデアに対し、参観した教諭や新聞記者からも質問が出るなど盛り上がった。

生徒側は紙の新聞について「信頼性がある」や「保存できる」などの長所を挙げた一方、「高価」「必要じゃない時にも届く」「大きくて読みにくい」などの課題も指摘。「欲しい時だけ買える」自動販売機の設置や、スマホで見られるアプリの開発を提案した。

参観者の投票で勝利した高校生チームは全国紙と地方紙がスマホで定額で見られ、比べ読みできるシステム「新聞バイキング」を提案した。木幡教諭は「ディベートで互いの提案をより良いものに練り上げる」と説明。高校生と共に「新聞社の皆さん、実現お願いします」と呼びかけた。

ノーベル化学賞の吉野彰さん

未来へできること探して

ノーベル化学賞の受賞に至る経緯について話す吉野彰さん＝4日、宮崎市民文化ホール

吉野彰さんは、充電して何度も使えるリチウムイオン電池を開発し、ＩＴ社会や持続可能な社会づくりに貢献したとして、２０１９年にノーベル化学賞を受賞した。記念講演では、生い立ちや電池開発までの過程を紹介し、若い世代へメッセージを送った。

吉野さんは、マイケル・フェラデーの「ロウソクの科学」を読んだことがきっかけとなって、科学（化学）の道に進んだと語った。

１９７２年に旭化成に入社し、自身でテーマを設定して基礎探索研究に取り組んだが、３度の失敗を経て、４番目の研究でようやくリチウムイオン電池の発明につながる芽出しができたと振り返った。その後、さまざまな新素材を使って試行錯誤を重ね、電池の小型化、軽量化に成功したことを紹介した。

宮崎県内小中学生との質疑タイムでは、「大きな困難にぶち当たっても、諦めずに続けられた要因は何か」の質問に「ゴールがあるという信念さえあれば乗り越えられる」と述べた。

若い世代へのメッセージとして、大阪万博が開かれる２０２５年、ＳＤＧｓの目標達成期限である30年、脱炭素社会実現の目標年である50年の三つのマイルストーン（節目）を紹介し、「世界が変わっていく時に自分がどうなっているべきかを想像して、将来のために今からできることをやってほしい」と呼びかけた。

未来の科学者へ「脱炭素社会実現の具体的な方法をまだ誰も見つけていない。皆さんにはチャンスがある」とエールを送った。

経験語り若者へエール

２０２２年度沖縄県ＮＩＥ実践報告書

２０２３年６月発行

発行　沖縄県ＮＩＥ推進協議会（会長・仲村守和）
事務局　〒９００－８６７８
沖縄県那覇市久茂地２－２－２
沖縄タイムス社ＮＩＥ事業推進室内
電　話：０９８－８６０－３５５３
ＦＡＸ：０９８－８６０－３４８４
メール：times-nie@okinawatimes.co.jp